

(題字松陰先生筆跡擴大攝影)

昭和十年十二月發行

校友會雜誌

第參拾四號

山口縣立萩中學校校友會

昭和十年十二月發行

校友會雜誌

第參拾四號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立萩中學校校友會雜誌 第三十四號 日

口 繪
訓練強調標語
河内學校長を送る
津守新學校長を迎ふ

鮮満視察談
特別會員 河野通毅講話
五年 田村精作筆記
特別會員 河野通毅
特別會員 山本博毅
萩に於けるキリシタン殉教者
と新資料の發見について

追悼記

祭安藤靜宇先生文……特別會員 河野通毅
安藤紀一先生を偲ぶ……著特別會員 金子乙助
安藤靜宇先生を偲ぶ……同 香川政一
靜宇文庫整理中の諸感……伊東素芳
安藤先生追憶の記……大村武一

生徒作品

我が家……一年 大島 宰
故郷……同 淺原 榮
海水浴……同 元木 朝徳

秋の夕暮……二年 田中 貞雄
秋の夕暮……同 内山 博
月夜の美感……同 水津 明
夕立……同 石田 光美
秋の夕暮……同 岡田 清
夏の夜……同 中島 淳一
秋の夕暮……同 阿武 弘愛
夜の霧……同 波多野 保
蘭……二年 佐伯 哲郎
僕等の村の自動車……同 白井 輝夫
可部……同 野村 男次
散髪屋の鏡……同 植村 一良
祭のあとさき……同 田邊 武彦
溺れた時……同 井關 正次
小學校……同 杉山 純一
祭のあとさき……同 澤本 良秋
治療を受けるまで……同 土屋 康紀
歸るまで……同 田中 大資
柿……同 大田 頼久
かはいさうに……同 玉木 博彦
僕の好きな學課……同 藤山 紀元
庭木の剪定……同 江原 行正
夏休の思ひ出……同 新谷 勇二
休みのある日……四年 小橋安次郎
休みのある日……同 梅屋 薫
或日の失敗……同 藤重 清
休みのある日……同 弘長 純一
努力……同 菟原 和平
自 信……同 田村 正好
郷土愛……同 津村 對介
質實の氣風……同 岡村大一郎
林先生の講演を聞いて……同 西島 愛三

梅雨……一年 池部 涉
夏の朝……同 金子 泰
夏の朝……同 山根 松壽
一日遠足……同 町原 俊雄
夢……同 弘中 六彦
病の一日……同 室田 實
雨の日の教室……同 石光 正芳
防空演習……同 守重 哲眞
旅行……同 柳井 茂
萩の春……同 池田 勳
夏の朝……同 伊東 泰治
暑 さ……同 山崎 正二
月夜の美感……二年 坂本 淳
靜かな田舎……同 中村大十郎
秋……同 森重 龍馬
月夜の美感……同 伊藤 義男
秋の朝……同 白石 明
夕の海岸……同 山田 松華
海邊の朝……同 山本 一夫

橋の上……五年 野村 正次
燈火管制の夜……同 藤田 正
窓……同 香川 朝政
草……同 刀彌彌太郎
自然と人生……同 田村 精作
民族……同 能美 陽一
傳統的精神……同 玉井 義照
自然と人生……同 福田 寛雄
民族……同 石村 豊徳

卒業生通信

神宮皇學館を語る……同校 中原 正久
陸士を語る……同 淺原 昌佑
海軍經理を語る……同 岡田 寛
靈南ヶ丘を語る……旅順工大豫科 新谷 幸治
五高を語る……同校 阿部 浩
一高を語る……同校 西本 春男
菊屋嘉十郎
京阪地方修學旅行記……四年 熊谷 正雄
山口聯隊入營記……五年 河村 定一
同 香川 朝政
同 杉原 大泰
同 福田 寛雄

校報

▲卒業式 ▲賞品授與式 ▲先生の更迭 ▲校誌

校友會報

▲書道部 ▲書道部 ▲地歴部 ▲理科部 ▲競技部 ▲籠球部
▲水泳部 ▲柔道部 ▲剣道部 ▲射撃大會出場記
▲辯論部 ▲校友會役員表 ▲昭和九年度校友會費收支決算報

附 録

萩中學校同窓會創立二十周年記念式に當りて

吉田松陰

歸らじとおもひさだめし旅なればひとしほぬる、涙松かな

ふりつづく五月の雨のやめばまたあつきに人のなやむ暮れかな

こと問はむ淀の川瀬の水車いくめぐりして憂世經にきや

啼かずあらば誰かは知らむ郭公さみだれくらく降りつづく夜に



津守新學校長先生



河内才三校長先生

訓 練 強 調 標 語

昭和九年

十一月

己に克て

昭和十年

十二月

紙屑は屑箱に

一月

何事も真剣に

二月

些細な注意もよく守れ

三月

終りを完うせよ

四月

第一歩を誤るな

五月

靴をよく拭へ

六月

肌着を清潔に

七月

私語を慎め

八月

必勝の信念

九月

時間を活用せよ

十月

時間を活用せよ

河内學校長を送る

學校長河内才三先生昭和十年十一月十一日を期として辭職せらる。先生は昭和二年十一月千葉縣立佐倉中學校長より囑望されて本校に轉任爾來八星霜の間終始公平無私近來稀なる人格者として本校子弟の教育に盡瘁せられたり。先生の功績寔に多くして枚擧に遑あらずと雖、その顯著なるものを擧げんか、先づ校訓の質實義勇に新しく協同を加へて人の和を強調せられ、又生徒を個人別に及ぶまで懇切に指導せられ育英資金の充實を計り、共研會を設けて防長軍人の養成を盛にせられたり。

御聖影奉安庫、農業實習室、柑橘園、衛生室、肝油飲用、教室の採光通風に關する衛生施設の完備を見たるも、理科實驗室の改造もひとへに先生の盡力に依れり。而して最近運動場の擴張實現の運びに至れるも全く先生の御力なり。先生又阿武郡教育會長、萩市教育會副會長として郷土の教育界に貢獻し斯文會を率ゐて大に偉人の道を弘められたり。

今や晩秋橙黃の節、謹みて恩愛厚かりし先生を送る。

冀くは功成り名遂げ給ひし先生の御身猶御壯健に、今後も我が萩中學校の發展の爲に倍舊の御溫情を賜はらんことを。

津守新學校長を迎ふ

昭和十年十一月新學校長として津守馨先生を迎ふ。

先生は明治三十九年東京帝國大學を卒業せられ爾來栃木、青森、宮城の各縣を経て大分縣立宇佐中學校長、山口縣立下關中學校長、山口中學校長を歴任して御令名世に高く今回本校に學校長として就任せられたり。而して先生は往年の萩分校時代の卒業生にして寔に本校にとりては大先輩の第一人者たり。

我が萩中學校は斯かる緣故深き新學校長を推戴し前途洋々たるものあり。今や世界に非常時の聲喧しく人材の要望切なる時、古來偉人發祥の地に親しく臨まれ、若き子弟を統べ給ふ先生の新抱負に光輝あれ。



鮮 滿 視 察 談

特別會員 河野通毅 講話
五年 田村精作 筆記

四

滿洲へ旅行したお話を話せるだけして見ませう。私は滿洲へは初めて行きましたが、日本と滿洲との關係は不可分の關係にあります。私が奉天へ行つたのは丁度滿洲事變が起つて滿四年目でありまして、九月十八日の記念日に會ひました。飛行機爆撃演習を見、柳條溝爆破地點を汽車で通りました。實に妙な感じがし非常に感銘が大きかったです。四年前の滿洲と今日の滿洲とを比較すれば、三千萬民衆は王道樂土の世界を實現しつゝあります。苦しみ昔から今や平和の風が全滿洲を覆うてゐます。一年毎に理想が着々として實現してをり、日本に對する有難さを痛切に感じました。主に學校を參觀しましたが、學校の生徒滿洲の學徒は滿洲事變、滿洲獨立に對して、又滿洲人が日本人に對して如何なる考へを持つてゐるか云ふと、大體に於て一致した感じを持つてゐる。彼等は非常に喜んでゐる。其の一つの理由は今迄は絶えず匪賊に脅かされて來たが、事變以來匪賊討伐によつて平和に安んずることとなり、枕を高くして眠ることが出來、安んじて商業をやる。即ち生活の安定を得たこと、もう一つの理由は軍閥政治の時代は税金が多く取られてゐたが、今はそんなことはない、此の二つの理由が主なるものである。日本と滿洲との關係は前にも云つた様に不可分の關係でありまして、對立的でなく、依存關係にあることが非常に大切であります。其處を彼の地に居る日本人が大いに注意してゐるところであります。滿洲の將來は吾々の大事なる點でありまして、人口の點に於ても、資源の點に於ても、重大なるものです。北滿の

細羊、南滿の棉花等があります。事變以來日本人がどん／＼増加して來てゐます。新京の町に此の年度に小學校が二つも増設されてゐますが、まだ小學生の收容が不足であります。滿洲は吾々の想像の及ばざる發展を示してゐます。滿洲へ行つて一番心強く感ずる點は、日本の國の有難いと云ふことでありまして、日本を出て強く痛切に感じました。新京へ行きした時に丁度 皇帝陛下がハルビンに於ける觀艦式をおすませになつて、ハルビンからお歸りになるのに會ひました。宿屋の女將に聞いて飛び出した。新京の大通りを各中小學校の生徒がお出迎へに來てゐる。やがて「氣をつけ」のラツパがなつたので、吾々も氣をつけをしました。其のラツパの音たるや非常に面白くなく憐れつぽい音であります。行列の一番先頭をオートバイで日章旗を掲げてやつて來たので不思議に思つて見てゐると、此度は滿洲國の國旗を掲げて 皇帝陛下がおいでになつた。陛下がお通りになつても、まだ氣をつけをしてゐる。又自動車五六臺通つた。皆が敬禮するので吾々は何の事か解からないが、とにかく敬禮して後で尋ねて見ると、今のは南軍司令官閣下であると云ふ。以つて如何に日本の勢力があるかを知ることが出來ます。其の翌日軍司令部へ國軍に敬意を表する爲め、又軍隊の狀況を聞きに行きました。丁度軍司令官がおいでになるところでありました。驚いた事には自動車三臺の真中でオートバイ二三臺護衛つきである。四ツ角などは通行禁止である。内地と比べて不思議な感じがしました。常にこんな風であると云ひます。さつきお話しした先頭の日章旗は護衛の意味であります。日本の勢力の大きさを有難さを感じるのです。だから滿洲では日本人が馬鹿に勢力が強い。朝鮮人も「俺は日本人だぞ」と云つて威張る。だから滿洲人は朝鮮人を嫌ひます。新京で宮城を拜みに行きました。非常にお粗末で日本の二重橋の様だらうと思つて行つたところが、大いに異つてゐて、甚だみすばらしく蘭花の御紋章があり、小さな汚ない家がある。日本の二重橋の感は少しも有りません。新京は國都建設中でありまして、色々の官衙學校が出來て、一番最後に朕の宮城を建てよ、との有難い御命令があつたのです。だから非常にお質素なわけです。廣い宮城建設の豫定地があります。他所にて又日本の皇室の有難さを感じざるを得ませんでした。ハルビンの觀艦式

五

に於ては取締りが嚴重でありましたが、日本人に對しては非常に寛大でありました。旅館は露國人のものが多くロシア人の宿引きが多く来る。私がトランクを提げて歩いてゐると、宿引きが出て来てトランクを持つて引張つて行かうとする。「何をやるか。」と云へど言葉が通じない。宿引きも何とかべら／＼云つてゐるが、さつぱりわからん、遂に「えい」と蹴飛ばして逃げましたが、若し此れが四年前にこんな事をしようものなら、ひどい目にあはされたのですが、今日では威張つて日本人と云へる。次に滿洲へ旅行して一番有難く感じたのは、本校卒業生山口縣人會が何處でも出迎へて呉れて、涙が出る程嬉しかつた。本年卒業生の松浦、木村がゐた所は夜通過したのみであつたが、それでも出迎へてゐて呉れた。一行中の五つの學校（萩中、山中、室積師範、防中、下關中）の中で萩中の卒業生が一番よく出て来て案内して呉れたので、愉快に見學出來ました。「先生書飯を一緒に食べませう。」と云ふ。「いや一人ならよいが連れがあるから。」と云へば「どうぞ五人ながら。」と云ふ。だから他の先生方は「萩の者は情味が深いですね」と云つてゐました。先生鼻が高かつたです。營口へ行きましたら又縣人會（大部分本校卒業生）が出迎へて呉れました。遼河を舟で下りませうと云うので滿鐵の小蒸氣船に乗つて下りました。「やがて飛行機が來ます。」と云ふ。「何故か」と問へば「海邊警備隊（營口―安東）の飛行機の飛行士（山田氏）が、柳井出身の者である故、山口縣人が來ると云ふので、歡迎飛行をやります」と云ふ。やがて飛行機が來て五六回低空飛行を行つた。遼河は廣く向ふ岸はぼんやりして見え、濁つた水が滔々と流れてゐます。此の河へ落ちたら、濁つてゐるのでわからなくなつて助けられぬと云ふ話でした。そう云ふ風で、愉快に河を下つて驛へ行つて見ると、又山田さんが來てゐられた。支那語が出來んから誰か案内して呉れなければ不自由である。然し普通の用事は日本語でよい。ロシア人の商店にも店先に「日本語を話す番頭あり」と書いてある。店でロシア人を採用する時、日本語の出來る者から採用する。それ程日本は重要な地位にあるのです。然し實際に深く事情を探るには支那語を知らねばなりません。

え、話は前後しますが、まあ順を追うてお話しませう。九月五日に門司を出まして、先づ釜山に着きました。其所で出迎へて呉れたのが先づ萩の關係者であつて、吾々の爲に自動車を提供して呉れました。釜山を見る時間が無いので町の中をドライブしたのみでした。朝鮮人を此所から研究し始めました。第一に朝鮮人は知識の程度が底い。此れは釜山で聞いた話ですが、朝鮮人の失業者は日本内地へ行つたら良い職があると云つて内地へ渡らうとするが、さうやたらに渡ることには出來ない。そこで悪い奴が居て内地へ彼等を渡してやると云つて金を捲き上げ、夜自分の舟に乗せて附近の海岸や島の間を廻つて夜の明けないうちに釜山の沖の絶影島に來て、さあ日本へ來たと云つて置いて其所へ下して逃げ去る者がある。と云ふ。家は土壁が多く細長く觀音開きの窓があつて、冬はおんどるを焚く、夏は暑いので家の中に居れず、道路の上に出で寝る者がある。だから年に二三十人も自動車にひかれて死ぬるさうで、ひどいになると鐵道線路の上に寝るのがゐるさうです。然し朝鮮人は質朴で愛すべきで、可憐であります。私が汽車の中で或る老人に林檎を一つ與へたところが、其の場で食べず、仲間の所へ行つて分けて食べてをりました。實に愛すべきであります。京城へ行きまして朝鮮人の女學校へ見學に行きました。悪むべき人間ではありません。其所の校長先生が云はれるには「昨晚一人の生徒が病氣で死にました。其の遺言に『作業の宿題で作つた物があるから其れを明日校長先生の所へ出して下さい。』唯此れだけでした。」と云つてゐられました。諸君！何と純良ではありませんか。平壤で聞いた話ですが、朝鮮の青年團が大神宮に毎朝參詣して喜んで掃除をしてゐる。雨や風の中をいとはずにやつてゐる。又京城の女學校の生徒が「皇太子殿下の御誕生」の歌を詠んでゐる。又滿洲事變以來學校のストライクが少しもなくなつた。朝鮮人は教育さへすれば將來立派な人間になるでせう。學校で困ることは、先生は日本語に生徒の姓名を呼ばれるが、友達同志で呼ぶ姓は朝鮮讀みで異なるので困るさうです。朝鮮の家庭生活は三様生活である。内地人は二重生活である。即ち日本式と西洋式の二様であるが、彼地に於ては日本式、朝鮮式、西洋式の三様式があるのです。だから女學校に於ても日本の作法も教へなければならぬさうです。或る

時此んな滑稽なことが起つたさうです。女學生を大阪方面へ修學旅行につれて行つて、大阪の或る宿屋に泊つたさうです。ところが其の旅館の床の上には碁盤が置いてある。彼等は其の床の上にあがつて、碁をやつてゐたさうです。朝鮮の家には床の間がありませんから、知らずに丁度よい坐り場があつた位に思つてゐたのでせう。こんな風だから、日本流の作法も教へてゐるさうです。京城の女學校の體操を見ましたが、體が均勢がとれてゐて立派な體格であります。足の運動が上手です。次に朝鮮の家庭生活の狀態を見ました。女學校の校長の世話によつて、社稷洞の李海昌と云ふ家を見に行きました。いつたい特に朝鮮人は家庭を開放して見られることを好みません。其の家は相當の家柄で、娘は女學校生徒、母は女學校卒業生、父はアメリカへ留學してゐた事があり、又従弟は中學校生徒であつて新進の家庭であります。第一に驚いたことには門を入ると大きな長屋があつて、人が皆其の中に住んでゐる。實にきたない。何故こんな大きな長屋があるかと聞けば、朝鮮では使用人を使ふと其の使用人の家族が全部ついて来るさうです。此の家でも女中を一人使つて家族數人もついて來てゐると云ふ。朝鮮で家族とは一家親族のことであつて、其の親族の中で誰か一人偉くなると、皆其の家へ行つて養つてもらふ。だから相互扶助がよく行はれるも依頼心が強くなつて獨立心が少ない。祖先崇拜は日本以上であつて、普通の家では祖先を一つの部屋を仕切つて祀つてある。此の家では母屋より大きな堂を建て、祀つてある。都正宮といつて之れは朝鮮李王家の社稷と關係がある。家の中で一番氣附くのは漬物であつて、是非なくてはならぬ副食物である。漬物の多いのが自慢である。此の家にも壺が十ばかりあつた。次には平壤へ行つて大洞江を舟で下りました。玄武門、牡丹臺、乙密臺等の戰跡を見ました。今は飛行場があつて飛行機が飛んでゐました。日清戰爭は私が小供の時代の事でありましたが、重大な戰爭であると云ふことを聞かされてゐましたので、今此所に立つと妙な感じがしました。昔支那の前漢の時代に此の半島を四郡に分けて政治した事は有名であります。此の附近は其の一つの樂浪郡の郡治のあつた所で、古跡を見に行きますと、丁度考古學の學者が掘つてゐたので掘し物の一片をもらつて來ました。其の次に安東へ行

きました。途中鴨綠江の開閉橋を汽車で渡りました。今は開閉する必要もなし又壊れてゐるので開閉しません。之を渡ると安東で國境を通過して國外に出た。汽車で通つたので國境らしい感じがしないので、翌日歩いて國境を見に行きました。江の水面は朝鮮のものである。國境は一步でも越されぬ。税關の検査がありますから、我々はそば迄行つて覗いてみました。別に線が引いてあるわけはありません。本校卒業生で警察關係のものに聞いた話ですが、滿洲は銀が馬鹿に安いので國外へ輸出する。然し輸出が禁止してあるから密輸出をやる。其の方法は色々あるが、中には自動車へ一杯銀貨を積んで物凄い勢で國境を突破するさうである。一步でも外へ出ればもう滿洲でないので如何ともすることが出来ない。或る日密輸出をやる自動車が來ると云うことがわかつたので何とかして止めようと云ふので、道路上に自轉車を二三臺つき出し置いたところが、其れをつき破つて國境を乗り越えた奴があるさうです。中に横着な奴になると、國境を越すと自動で車を止めてからゆう／＼と銀貨を數へて行くのがゐるさうです。こんな話を聞いて安東中學（滿鐵經營）へ行きました。此の學校は教練が非常に上手である。獨立守備隊と中學の運動場と續いて居ります。嘗て安東へ匪賊が出たことがあつた。當時守備隊の二個中隊は此れに應戦すべく皆出て行つた。在郷軍人も防禦に出た。そこで安東中學校長は四、五年生に武裝として戰線へ行く準備をして、父兄の許可を経て出動すべき時刻を待つてゐたが、幸に戰場に出なくてすんだ。こんな事件があつて以來、非常に教練が熱心で閱兵分列式は兵隊より數倍上手である。兵隊の出動する時は生徒は自發的に迎へ送りに行く。次に安奉線に乗りまして一行は奉天へ向ひました。安奉線に乗つて、いよ／＼滿洲へ來た感じがする。停車場は皆鐵條網が張り廻らされてあり、土囊があり、銃眼が所々に設けてある。汽車の中には兵隊や巡查が四五人必ずゐる。巡查は大きなピストルを背中にかけてゐる。汽車の中では車掌のことを車隊長と呼んでゐますが、其の車隊長が切符を調べて歩く時、必ず後からピストルを持つた巡查がついて來ます。安奉線が一番よく匪賊に襲はれて危険であります。山の中を通つたりトンネルがあつたりするからです。夜間に出ることが多いらしい。本溪湖附近で車隊長が「防空演習をやり

ますから窓をしめて下さい」と云つて歩いた。いよ／＼夜奉天へ着きましたが眞暗である。防空演習がまだすまないのです。公主嶺では支那町と満鐵附屬地との間には鐵條網が張つてあります。此れは四年前の事變の際の遺物であります。公主嶺の農事試験場へ行き、農事の概念を見ました。農業のことを聞くと満洲は雨が少く、日本の雨量の三分の一しか雨がでない。だから旅行するには雨季以外には雨具の必要は殆んどありません。土地が乾燥しますので、畑を耕すのに鋤いてすぐ種を蒔いて土をかける、早くしないと土地が乾燥して、種がはえぬ、だから耕して種を蒔いて土をかけることを同時にする道具がある。

新京へ行きました。一番感じたことは町がどん／＼發展しつゝあることです。先づ文教部へ行きました、其所のバルコニーに上りまして町を見ました。其所で案内をつけてもらつて、見學に出ました。此の町は都市計畫を理想的に行つてゐます。廣い所に町を作るのですから、日本と違ひます。理想的なのは中央に廣場を作つて、放射線狀に四方へ道路を作る。放射線ばかりでは東洋人の頭に入りにくいので、更に基盤目の道を適當に配置する。何もない所に作るものであるから、自由により得る、文教部は國都建設局と一所にあり前には司法部、陸軍部、電々會社（電信電話會社のこと）等があつて、大通りが通つてゐる。新京中學は此所の行詰めにあります。都市建設の方法は舗裝道路を先づ作る。そしたら兩側の地價が上るので、其れをつ賣ては又道路を作ると云ふ調子で、自給自足でどん／＼やつて行く。計畫を三期に分けて行ふ。第一期は人口三十萬、二十年後には百五十萬の人口を目標としてゐる。新京中學へ行きましたが、此所も三期に分けて設備を充實せしめつゝありまして、目下第二期の工事中であります。第一期は一階、第二期が二階です。中學の教育方針は國際道德の涵養を目ざしてゐる。これも滿洲特色の一つと考へられる。次に吉林へ行きました。此所で珍らしいことは關帝廟へ上りましたところが、今空前絶後と云ふ筏が來てゐると云ふ。何かと聞きますと「吉林は筏で有名な所です。滿洲でよい材木はこの吉林と鴨綠江と間東と北滿から出るので。其の吉林の材木を筏にして松花江を下るので、途中匪賊

がそれを襲撃するのです。筏主が金を持つてゐないと、其の場で借用證書を書かして歸りに材木を賣つた金をまきあげるこんな事がしば／＼あるので、其の防止法として、大きな筏を共同して作るのです。筏の長さが一里もあつて巾が三十尺と云ふ細長い筏を作つて其の上に千人餘りの人が住んでゐる。兵隊が百三十人も乗り込んでゐて大砲と機關銃と迫撃砲を載せてゐる。上流から吉林まで下るのに二十六日かゝつて來た。材木の直徑二尺長さ二十四尺―三十尺と云ふすばらしい筏が、今吉林に來てゐる其れを賣ると百二十萬圓で賣れる。」と云ふのです。吉林空前の筏でありました。之れも松花江のいかに大きいかを知ることが出來ます。もとは汽船が吉林まで來たさうです。驚かざるを得ません。次に新京を通つてハルビンへ行きました。此所で露國人の小學校視察に外國語學校出身の通譯をつれて行きました。應接室に入ると女がお茶を持つて來た。やがて校長先生が出て來られたので、スタンプ帳を出してサインしてもらつた。牧師が十字架を下げて出て來た。露國人らしい氣分がする。本校の教育方針を聞くと校長先生が云はれるには「東洋に親しみ、滿洲國の事情に通じ、滿洲國の爲め有爲の人材を作ると云ふことを目的としてゐます」と。彼等は白系露人で國土を追ひ出されたる人々であります。國民の觀念がありません、情けないものです。四年生の文法の時間を見ました。いつたい露國語は文法が難しいので、小學校の時から教へるのです。一年生の書方も見ました線を引くのです。講堂へ入つて見ました。淋しいもので黑板のそばに滿洲國皇帝陛下の肖像が掲げてあり、側に滿洲國獨立の宣言書がある。此の學校は二部制度で、午前中が小學校で、午後が中等學校であります。中學校は男女共學であります。體操を見學しました。日本の體操と異なつてゐる。帽子は横にかむり手を横に振つてゐるものもある。それでも眞面目にやつてゐるのです。最後に生徒を集めて吾々に敬意を表しました。私は擧手の禮をやつて答禮しました。次にチ、ハルへ汽車で行きましたが、その間が實際に滿洲らしい氣分がいたしました。此の鐵道は露國のものでありましたが、本年之れを買収しました。だから従業員等は大部分露國人であります。吾々は三等車に乗りました。外は廣い／＼野原である。山も森もない、唯所々に二三本の木が生えてゐるだけであ

る。朝九時から夜八時にチ、ハルに着く迄真直な草の中のレールを進んだ。驛があつても建物があるだけで「人家二三軒あり」と案内記に書いてある。汽車の中は露國人と支那人ばかりである。途中昇々溪で乗りかえました。多門師團と馬占山との戦争した所であります。又日露戦争の時、横川、冲等の爆破を企てた嫩江の鐵橋が原の向ふに見えた。汽車は非常に大きく廊下があつて片方が一坪位ひに仕切つてあり、其の中は三段に分けてあり、下段が腰掛けで、残りは寢臺である。中に入つてドアを閉めてかぎをかけるのである。露國人の家族が旅行するのに使用するであらう。チ、ハルに着いた。チ、ハル神社は明治天皇と天照大神と大國主命が祀つてあります。昨日お祭があつて日本人が「しやぎり」を出した。印袴纏あげ鉢巻で、踊つたさうである。チ、ハルでは女子師範學校を見學に行きました。建物が非常に粗末で應接室のテーブル掛けがなく、西洋紙が代用にしてある。英語の授業を見學しましたが、全部白話で解釋してゐる。生徒が書き入れをしてゐる。見ると白話で書いてゐる。書き入れをするのは何國の生徒でも同じらしい。此の學校で面白い事は結婚してゐるのが多くゐることである。統計表を見ると三百人の内で三十人は結婚してゐる。生徒は十三才から二十三才位であります。結婚の約束をしてゐるのが二十人許りゐる。先生が早婚を止めてゐるが長い習慣で早く結婚する。體操を見學しました。よく體操を見ますが體操が一番よくわかつてよいです。女の先生が教へてゐましたが、仲々良くやります。漢文は程度が高い、難しい本ばかりである。中學では解析幾何をやつてゐる。チ、ハルの視察を終へて奉天、營口、旅順を経て大連へ行きました。旅順では戰跡廻りをやつた。東鷄冠山北壘壘二〇三高地を見た。二〇三高地に行つて見て、我々の目でも成程重要な所であると云ふことが解る。東鷄冠山北壘壘コンドラテンコノ築いた砲壘を見た。實に堅固に築いてある。いつたいロシア人は二〇三高地を餘り重要視してゐなかつた。だから二〇三高地は手薄であつたのである。それでも日本軍は相當苦戦してゐる。何か記念になるものを取らうと思つたが何もない。石を拾ふことを思ひついで東鷄冠山北壘壘では石砌片と思はれる様な石を拾ひ、二〇三高地では山の最高頂の石を拾つて來た。乃木大將のさわられた石であ

らう。さわられたと云ふ證據はないが、又さわられぬと云ふ證據もない、だからさわられた石であると云つてもよい。自分がさう思へばよい。水師營に行きましたら、有名な棗の木がありました。記念の爲めにと思つて其の棗の實を二三個拾つて來ました。ほかの人も眞似をしてゐた。此の實は何時蒔いたら芽が出るか知らないけれども私は十二月六日か、一月二日の記念に蒔かうと思つてゐる。十二月六日は二〇三高地の陥落した日であり、一月二日は水師營で乃木將軍とステツセル將軍との會見した日であります。若し此の日に蒔いて芽が出なかつたら、自分の赤誠が足りないものとあきらめよう。もう此れで時間が來たのでまだ話したい事は澤山あるけれども、此れでやめませう。又機會があつたら話してあげませう。

偶 感

學 半 河 野 通 毅

時 局 何 多 事 人 材 濟 世 難
育 英 惟 急 務 松 下 芳 芬 殘

萩に於けるキリシタン殉教者

新資料の發見について

一四

特別會員 河野通毅
特別會員 山本博

目次

- 一 序 説
- 二 萩に於ける殉教者に關する從來の研究
- 三 顧みられざりし史料
- 四 慶長十年に於ける殉教者の真相
- 五 キリシタン遺跡遺物の新發見について
- 六 結 語

一 序 説

戰國末期より江戸初期にかけて國史上に嘗て見ざる新事實を添へたのは歐人の渡來であり、キリスト教の傳來であり、宣教師の活躍であつた。而してその齎らした物質文明の影響外に今一つ顧みるべきは國民思想の變化であつた。

顧ふに當時の我國人には海外雄飛の壯圖勃々たるものがあり、加之、新來文明憧憬の日を逐ふて熾烈と成りつゝあつたにも拘はらず、遂に秀吉をして禁教令を出さしめ、家光をして鎖國を斷行するの止むなきに至らしめた所以のものは、重

商主義を抛つても猶防止しなければならなかつた所の國民思想の動搖があつたからであつた。

宣教師の活躍の漸く顯著ならんとする時に於ける政治上の變遷、即ち豊臣氏の滅亡と徳川氏の擡頭は宣教師をして確かに多くの當惑と誤解とに陥らしむるに足るべき許多の事件が輻輳してゐた。本稿の目的は特に慶長十年に於ける一地方的出來事としての萩に於ける公教殉教者の再吟味である。萩に關する從來の殉教史なるものは吾人の眼にふれた限りに於て、すべて一方的史料に基ける記述であり、前述の如く當時の世態の誤られ易かつた所にもよるとはいへ、またむしろ、真相を傳へんとするよりは誇張されたる公教、史的吟味を忌避したる殉教史なるかの觀を呈し、一は國史の一部に誤謬を流布し、他は、宣教の効果をば真相を掩ひつゝ禮讚してゐる所の、好ましからざる記述が見られる。

禮讚は迷ひのあとに生れ、信仰は争亂の後に求められること敢て洋の東西と時の古今を問はなかつた、戰國争亂後に渡來せるキリスト教も亦實にこの原則に従つて多くの信者を獲ることが出來た。しかしながら宣教師は我國人信者の日常の動靜を熟視して信仰の程度を付度することよりは、むしろより多くの信者を聚めることに熱中してゐた。従つて正確なる史實よりは宣教師自身の功績をその本國へ書き送ることに忙殺され、事實を吟味する進を有しなかつたのであらう萩に於ける所謂殉教者も亦實にこの範圍に入るものであつた。

吾人は問題の範圍を萩關係に限定したく欲して、萩公教の淵藪たりし山口に於ける公教の活躍をすら殆んど問題外とした。と云ふのは山口關係についても訂正すべき誤謬が尠からず見られ、従つて山口に言及すれば當然これにも觸れなければならぬこととなり、却つて多くの錯雜性を誘致するの煩を考へたからであつた。

今一つは吟味の時代を慶長十年に限つたことである。これは萩に於ける最古の殉教者として、且つ最も著明なものがこの年の熊谷豊前守元直であり、政治史上では豊徳兩氏の過渡期に當り、毛利氏にとつても政治中心を山口より萩へ移した當初でもあつたからである。

我國の殉教者に關する文獻として最も信頼するに足るものは Leon Pages の Histoire de la Religion Chrétienne au Japan である。萩關係のことも矢張りこれに見える。明治以後出版の諸研究書も大抵これを典據としてゐるらしい。故に吾人もこのバジェーの『日本耶穌教史』を引用し更に明治以後の出版書に見られる萩關係を擧げるであらう。

一六〇四年(慶長九年)の條の『日本耶穌教史』によれば「一人の師父廣島を發して山口に至り、彼地の基督信徒を訪へり(中略)、此地の基督教を維持して最も力ありしはベルシオル豊前殿(即ち熊谷元直のこと)にして、嘗て毛利殿の領國の總奉行サシエンドフ(佐世長門守元嘉のことであらう)に對して驚くべき氣力を顯はせり、此の大名一日ベルシオルと會食せるとき、耶穌教を誹りて、重んずべき大名は一人として此教を奉ずるを欲せず、此教を奉じたる大名は一人として其の終を全うせるものなし、オーギユスチン(小西行長)豊後侯(大友吉統)其他の數者其例なりと語りしに、ベルシオルは己の教を辯護し、サシエンドフの引きたる例に對して毛利殿の例をとり、其敬神の篤きにも拘はらず、其の禍を防ぐこと能はざりしを説き、又アンコスチ(安國寺のことであらう)、ジブノショウ(石田治部少輔三成)其他數多の例を擧げたり。サシエンドフは之を聞いて無禮の返答をなしたればベルシオルは既に刀柄に手を懸くるを禁ずる能はざりし處に、サシエンドフは食卓を立ち他に退かんとし、爲めにベルシオルは禍其身に及ぶべかりしも、サシエンドフの許に行きて、其の兇相の擧動を謝せり、然れども其の基督教の信仰は一點も曲げざることを證せんが爲め「さはいへ、我れの耶穌教徒たるの故を以て、我が命を奪ひたまはんは君の自由なり」といひて、大膽に其頸を延したり、サシエンドフは心を和らげ此後宗教の事につきてベルシオルを煩はすことなからんを約せり。

幾くもなく毛利殿は朝廷より還り來れり、其の耶穌基督の名に對する怒再び發して、其領内より耶穌教徒といへる名を根絶せんと欲し、先づ其棟梁なるベルシオルより著手せんと決心し、之に命するに其奉ずる教を棄て其祖先の教に復歸せ

んことを以てせり、ベルシオルは他の事ならば何にても君侯の命に服従すべきも、我宗教のみは一命にかへても棄て難しもし君侯にして我を鞫問せんとならば先づ二たびアマンガチ(山口)の市街を、屠者即ち最下等の賤民に引かせて残りなく引き廻し、耶穌教を奉ずる故此の懲罰を蒙れることを宣言せられよと請ひ、又其決心を毛利殿に通せんが爲めに、甚だ華麗なる一通の書を其友人に贈りて、之を君侯に傳達せんことを請へり。此後も猶毛利殿はベルシオルを屈服せんと試みしも遂に其效なくして終れり」とあり、更に翌一六〇五年(慶長十年)の條には「此際無識にして迷信に陥れる毛利殿は坊主の説と自己の恐怖とに打ち勝たれ、再びベルシオル熊谷豊前殿を襲撃し遂に之を殉教者たらしめたり、此顯著なる人物は名將の後と聞こえ、己れも大勇士なりき、安藝國ミリ(安佐郡三入)の城主にして十八年來耶穌教を奉じ、同國人を數多改宗せしめ己の領國內に一箇の教會を建立せり。(中略)此頃毛利殿領内主要の萩に築城のことあり、此事に關してベルシオルが鞏アマン五郎右衛門(天野元信)とマズング・ゲンバラ(益田玄蕃元祥)といへる偶像信者の大名との間に葛藤を起せり。ベルシオルは兩者を和解して世間の賞讃を得しも、此葛藤の爲め工事中絶せるを以て毛利殿は好味口實を得、ベルシオルに兩士官の負擔せる分を補ふべき命を與へたり、ベルシオルは此時宗務の關き難きものありしを以て之を辭せり。

聖母昇天祭の日、毛利殿は千人の兵を遣はしてベルシオルの家を圍ましめたり、二人の重なる士官、柳澤三左衛門及坊主ミヨゴジヨ(妙悟寺)内に入り、ベルシオルに告ぐるに、毛利殿の命に依りて人質を徴することを以てせり、彼等は死刑の宣告に關することは一言も發せざりき、是れ一切の抵抗を豫防せんが爲なりき。

ベルシオルは其季子フランソア・イノスケ及其孫マノエル彌三郎を出せり、後者は毛利殿と親戚なり、ベルシオルは此等の人質を出し、さて毛利殿の前に出でて其處にて實を吐くべき時間を與へられんことを請ひしも其家は猶引續き圍まれ居たり、これを見て最後の瞬間の既に迫れることを知り死の準備を以て一夜を明かせり。始めは己を保護せんと思想を

有し、長刀を以て身を堅めたりしも既にして神慮を畏みて其念を去れり。

八月十六日(陰曆七月二日)の朝二人の士官は兵卒を率ゐて入り來れり、ベルシオール手に念珠を取り、他手に繩を持して捕縛を待てり、士官等は毛利殿が死刑を加ふる理由として二箇條の罪狀を擧げたり、一は其聲の加はりたることにして、他は國主の屢下せる禁令を顧みず、耶蘇教を奉じたることなりき。かくてベルシオールは割腹を命ぜられしが死に處せらるゝは甘受せしも自殺は之を拒みたり。

ベルシオールは其手に持ちたる繩をば二人の使者に示し、己を堅く縛して、毛利殿の許に引き行き、其面前にて耻辱を加へて死刑に處せんことを乞ひしも使者は之を許さざりき。是に於てベルシオールは奥の室に退き最も佳良なる衣服を著し、座敷に入り小さき聖像の前に跪き、暫らく祈禱を爲したる後、頭を削手の前に延ばしたり、是に於てシシモといへる兵、頭を刎ねたれば人々此を毛利殿の許へ齎らしたり。毛利殿はベルシ奥の妻、子、孫並に重なる家來を死刑に處すること命じ、唯血族の關係ある少年の人質のみは助け置けり、死骸は盡く焼きて灰となせよと命じたり。又耶蘇教徒なりしベルシ奥の聲も宣告の中において、凡て犠牲に供せられしもの百人以上に及びたり、此聲の死刑に就て注意すべきは、日本にては喧嘩の爲め死を命ぜらるゝときは、兩方共に死すべきなれども此度は敵は助けられたることなり、ベルシ奥は五十歳なりき。」とあり、以上引用せる二ヶ條は大日本史料の第十二編の三(三一〇—三二〇頁)に示された『日本耶蘇教史』の原文譯文對照の所に依つたのであるが、要するに、(1)熊谷元直と佐世元嘉の宗教論争及びそれが毛利氏の悪口に成つた、(2)毛利氏の立腹と元直へ棄教勸告及び元直の返事、(3)萩築城と天野元信・益田元祥の葛藤、工事中斷、(4)元直襲撃・人質提出・元直の無抵抗服罪、(5)元直一族の受刑、なる五つに要約し得るが、以上を假に外人調査による根本史料とすれば、明治以後のものは實にこれが研究書に當るわけである。しかしながら事實はこれに反し研究と云はんよりむしろ史料の謬りを踏襲し、或は殊更誇張せる傾きがあり、また中には他の史料に據つたとも考へらるゝ記述を爲せるものも

見られるのであつた。

『山口公教史』には「彼是するうち城の工事を二箇月計り中止したる廉を以て國主は熊谷豊前守に工事の監督を命じ、増田天野の兩人に代らしめんとしたりしに、熊谷は深き事情ありて直に萩へ赴く事を得ざれば暫時猶豫ありたしと歎願した」(二八二頁)と述べ熊谷元直が當時山口に居住したものゝ如く述べてゐることは、その次に「柳澤三左衛門と僧侶ミヤウギヤウジヨ(妙壽寺ならん山口江良にあり)の和尚云々」と述べ、原本の *M. Ogono* を山口の妙壽寺に指向し、當時既に妙悟寺が萩に在りしことを穿鑿しなかつたなど、からも推察し得る所である。(慶長九年七月十六日城内に建てらる)右のほか固有名詞の誤りなど諸處に見られるが、特に重要なものゝ外は不問に附することとし、爰に一つ注意すべきは「ピリオン神父が近頃萩東光寺の境内に於て認め得し一箇の墓碑は二百年を経たりと思はるゝ椋の太木に十字架の印を刻みたるものにして、最も年を過ごし、ものと覺しく十の字なりに樹の皮を巻込で一種の奇觀を呈しつゝあり(中略)此樹は人々相傳て耶蘇の木と呼び、維新の後まで之れを見るにつけても尙身震したりし程なりと云ふ、これ疑ふべくもなく奉教人を埋めたる跡にして云々」(二七一頁)と附記してゐることであつた。このことは後に再述するであらう。前書より二十餘年後の出版に成る『長門公教史』によれば元直が死刑の宣告を受けたのを慶長十年八月十五日と記し陰曆に直すことを忘れ、また千々茂と云ふ家來に首を斬らせて差出したとし、東光寺の十字架ある太木は「内證で信仰を續けた者のあつた證據に成る」と述べ、前書が墓標説たるに、これでは信仰の對象説を採つてゐる。

『切支丹の殉教者』によれば「山口教會の柱石と頼まれた阿曾沼(或は熊谷か)豊前守が主家毛利侯の怒りに觸れて教に殉じた」(一〇〇頁)と述べ、次に、スタイシエン原著ピリオン譯『切支丹大名史』——この本は嘗て萩に在住したところのあるピリオンの譯であり、吾人が今参考にしてゐるのはピリオン氏が自署して秋山某氏に贈られた本であり、二つの意味に於て特に吾人の興味を惹く——によれば熊谷のことを「淺沼豊前守」とし、「この淺沼は宣教師の記録によれば淺

沼熊谷と稱ばれ」と記してゐる。淺沼と書けるは恐らく阿曾沼の誤りであらう。而して阿曾沼と熊谷は全然別人であり、天野元信は阿曾沼家を嗣ぎたるを以て、彼れを阿曾沼と呼ぶならば敢て誤りとは云ひ得ないが、熊谷と阿曾沼を同一人としたるは宣教師の大なる誤と云はねばならぬ。ピリオン氏が、事件發祥の地に來住しながらこれを確かめなかつたこと及び本書には人名の誤譯特に多いこと、例へば、狩野を加納とし、佐世長門守を佐瀬岩見守とせる如きは、甚だ翻譯に不忠實であると云はなければならぬ。而して本書も亦元直は「己が家來の一名に命じて斬首せしめた」と述べ、あくまでも熊谷は華々しく殉教したことに成つてゐるのであつた。

是等の諸書を通覽すれば大體に於て「日本耶蘇教史」の範圍を出でざるものであるが、若し是等の諸書のみを見て直ちに信するならば、恐らくは熊谷の死が所謂立派な殉教に數へ入れらるゝに躊躇しないであらうが、この問題は熊谷が萩城築造に於てたま／＼誅戮さるべき機會に際會したのであつて、決して單に二箇の切腹理由書のみが中心を成すものではなかつた。

三 顧みられざりし史料

これについては先づ事件の核心たる萩城築造について聊か述べて置かなければならぬ、そして事件が實は慶長十年三月と七月の兩回に跨るものであることを明らかにして置く必要がある。

熊谷と天野元信が築城に關係を命ぜられたのは慶長九年六月以降であり、同年七月頃に熊谷は既に萩に來住してゐたことは、その七月十六日に輝元公より天野宗休老に宛てた手紙があり、そのうちに「御方元續番手にせられ萩に被相詰候而可給候、其他益田熊谷其外番手に罷居事候云々」とあつて、また同九年十一月十六日には益田元祥と共に築城の總宰をさへ命ぜられ、同月十八日には天野は井原彈正と共に城東の御門の取入・御船入の南喰違の石垣、北の濱邊の石垣營造奉行を命ぜられてゐるなど、すべて事件は山口と關係を持つてゐない。これ熊谷の所謂殉教なるものが萩に於ける出來事たる

を證するに重要な點である。

斯くて工事は暫らく無事に續けられたのであるが、翌十年三月に至り、天野對益田の爭論を惹起せる「五郎太石」事件が出來した。古文書を以て推察するに城の内部は十年三月初めまでに大體出來てゐたらしいが、尙前記の場所が未完成であつた爲め今度は未完成部に力が向けられてゐたのであつた。

たま／＼三月十四日、天野元信は自分の丁場たる御門入口の松の木の邊りに五郎太石を積み置いたのを、何者かに二三日前より盗み取られつゝあつたが、此の十四日に犯人三名を現場で押へ得たので彼等を訊問したる所、一名は益田元祥、二名はその子益田修理亮景祥の僮夫たることが判明した。そこで三名を元祥の臣栗山三郎右衛門に引渡し、使者を以て、この石は取調の結果七十人を以て盗み去つたのだから夥しい數に上る筈であり、昨日も二十人を以て盗んだこと鐵砲組の者に實見した證人があるから兩日の分を返還せよと言ひ送つた。所が栗山は、このことは主人元祥に傳へる迄もなく本日の分は返還する、しかし昨日の分は鐵砲組の者に見た者があると云ふ位ひの曖昧な證言では辨償し難いと返答したのであつた。

問題の發端は實に爰に在るのであつて、盜石事件そのものはあくまで天野對益田であるが天野が熊谷の女婿であつた爲め、背後に熊谷の活躍は充分推測し得られるのであつた。その證憑は家中の有力者の仲裁があつたに拘はらず、天野は自己の主張要求は頑として曲げなかつた所に見られる。これ當時の一有力者たり且又名門の子孫としての熊谷を背景に有したからであつた。しかしながら、恐らくこれも熊谷の計畫であらうが、事件の進展・訴訟の提起等すべて天野に理由ある如く處理されてゐるのであつた。

毛利家文書によれば三月廿一日附を以て栗山三郎右衛門及び益田元祥の二人が別々の文書を以て奉行に届け出てゐる、それより三日遅れて天野も亦訴狀を提起してゐる。従つて十四日より廿一日までの間に熊谷の活躍があり、天野と益田の

臣栗山の押問答及び仲裁入の調停が見られたのであつた。益田が栗山から事件の内容を語られたのは十六日の晩であることとその訴状に見えてゐる。

事實上では天野に正當の理由があつた、しかるに一般の同情を失ふに至つたのは、調停を試みた有力者の數名に對し、盗み取られたとする「二千百荷」の石のうち百荷は許しても「二千荷」は是非返還せよと主張固執した所に在つた。初め益田側では「千荷」を返すと云ひ次に調停者がこれに五百荷を加へようと云ひ、又別の調停者が更に二百荷を加へて「千七百荷」と提案したが斷じて受け取らぬと云ふのであつた。そこで、この頃主人益田元祥に告げたのであらう。今度は人夫の三名が殺されてその頸を供すと云ひ送つた、然るに首は石に成らぬとはねつたので遂にこれが表沙汰と成つた。

三月二十四日に應訴した天野の訴状に、はじめて熊谷の名が見え、熊谷・中原・三輪・佐波・牧野・天野の連署で提起されてゐる。この訴状には事件の發端より詳述され、更に犯人三名を奉行へ渡さずに私刑したことは、或は益田や栗山が人夫に石を盗ましたのかもわからないのに、これを糺明し得なくしたことは不可解であるとし、また、公事沙汰は法度であり、且つ主君上洛の機が迫つてゐると存じ差控へて我慢してゐたが、益田らが提訴した以上は當方も堪忍出來ないと云ふ意味を述べてゐる。

既述の如く天野側には、多少融通の欠けた所はあつたが、提訴しても勝つて然るべき理由が見られる。しかるに益田側が勝つたことは如何にも不思議であるが、天野の訴状提出後四日の三月二十八日附を以て益田元祥及び修理兩人連名花押血判の誓書の存することは、これに一つの解決鍵を示すが如く考へられる。それには「只今可被仰聞之旨承届少茂他言仕間敷候若此旨於偽申者梵天帝釋云々」として榎本中務大輔に宛て、出してゐる。起請文は重大事件の時に限つて用ひらるゝ熊野牛王寶印の裏に書かれてゐるが、ただこれだけでは如何なることを「被仰聞」たか全く知るを得ないが、これより曩きこの榎本は、天野が訴状を提起するや、可致堪忍之由、雖御異見候云々」とあつて天野らを説伏せんとした事實

があり、それとこれとを連絡するならば榎本が益田の黒幕であつたらしいことが推察されるであらう。

以上が度長十年三月の盜石事件の主要である。當時徳川家に於て家康將軍職を辭し秀忠襲職せんとして兩公の代見到着があり、輝元公はこれを祝賀せんとて豫てより準備してゐた上洛日が、盜石事件の爲め遅延してゐた、そこへ福原廣俊より上洛督促状が到着したので首途を四月二日と定め、その旨天野宗休老へ傳へ、留守中の萬端を宗休に依頼せんとしたらしい手紙がある。天野毛利文書によれば「御出まち申許候、爰元益熊申分を有之不相調候旁以早々被申迄候（中略）上洛之儀明日と存候氣分ちと昨日より取分惡候云々」とあつて卯月一日附であるから、四月二日を出發日と定めたらしい、しかし何日に出發したか徴すべき文書はないが、同月二十二日には伏見城にて家康公に面接してゐる。此の出發が遅延してゐたことは「我々上洛をも數日引留候、公儀一大事存候へば云々」とあるによつて明瞭である。

歸萩の月日も明確にし難いが、次に述べる慶長十年七月事件關係の文書で最も初めのものが七月二日附であるから、四月二日以降七月二日までの間の事柄が明らかでない、しかし輝元公の歸萩は後示の文書を以て推察するに六月二十四日以前であらねばならぬから、この三ヶ月間は三月十四日以降の混雜に引續き築城工事も進捗しなかつたに相違ない、そしてその責任を熊谷・天野の兩人に歸せられたのであつた。而して誓書による益田父子は實に此の間に熊谷討伐の膳立を整へたのであらう。次に示す輝元自筆の罪狀書が詳らかに書き上げられてゐるやうに思はれる。

對熊谷豊前守存分之條々

一 去々年於江戸 公儀普請申付時、秀元妹事我々秀元へ少も不相届、長岡越中へ申合、既自彼方公儀へ被申上候、成下之證跡等到來付而、爲申分及月迫、福原を江戸江差下、御理申上候、段々書のせられぬことも候條、口上より外不被申事、付、右之普請中も、家中之儀とも、惡様外さまへ申たる由、後日聞付候事

- 一 (毛利元清を欺きて佐波廣忠の女を配したこと、及び、許可なくして女を有地小吉に配したことを記してゐる)
- 二 (吉川氏に違約して女を佐波某に約したこと)
- 一 先年於高麗、元政を都へ差出候時、各同前に熊豊可副出之由申候處、散々申破、既罷出間敷に相澄候き、其外之衆中にも申ふらし、元政可失面目調儀候事
- 一 於高麗御普請之時、我々申付きた悪之由上へ可申とたくみ候事
- 一 付、大坂去年普請之時も、右通申催候を益田其外遠慮異見申候而、引留候事
- 一 (釜山にて軍律を犯したこと)
- 一 (大佛木引の時は馳走しなかつたこと)
- 一 宗躰之儀、是非無用之由、内々申聞候へとも、同心候はで、猶增長候て、一類之者とも、又縁者以下まで引くみ仕なし、大段相違之事
- 一 高麗にて村上三郎兵へ田嶋と喧嘩之時、此方へ不申越、上衆へ先注進候事
- 一 (毛利元清の病中己の孫を以て家督たらしめんとしたこと)
- 一 今度當城普請申付候付而、段々最前申聞候處、天五郎右豊前申談、色々みもの者共に申させ候て、我々上洛をも數日引留候、公儀一大事存候へば、以天道仕合よく下國候、悉皆内々對當家不儀之故、申くるはかし、最前以來、元續渡邊、兒若其外奉行之者共數日申あつかはせ、既公事無合點候條、年寄とも奉行とも豊前天五右所へ一禮に可罷出候條、無事之分別仕候へ、さりとては豊前くみ頭候條、引懸拵候へとも、最前より様々申候へとも、豊前も不取合、五郎右も申切候而、不合點候、はしめより拵之次第、悉我々存知候ての儀候き、如此候て、なをく上洛相延候へは、大專存候て、相方申分、押候て上洛儀事

- 一 (廣家の意見を却けて毛利家と絶縁せんとしたこと)
- 一 右成下、此度公事などの儀に付而、此きわ如此申付次第にて毛頭無之候、右如申、分別をも仕なをし候へと迄申聞候へとも、無同心、大小事に付而、家中之煩計を物こと仕候ま、己來當家之儀無違儀候て、藤七郎取立候様にと存一念に相極候、數年我々堪忍之所、以此ヶ條可有存知候也
- 以上

右の文書に日付を有しないが輝元公自筆の罪狀書であり、以下に擧ぐる文書より推して七月三日以前、京都より歸萩以後のものであることが肯ける。而して別に天野元信に對する自筆の罪狀書も在る。

天野五郎右衛門尉違目條々

- 一 五年已前一亂之時、大津城に置候時、不能案内、大坂へ罷下事
- 一 付其後於木津氣遣之節、自彼所妻子を境へ忍ぬかし候事
- 一 (蔚山籠城の時上官の命に従はなかつたこと)
- 一 今度當城普請奉行申付候時、普請中緩之者、又りくつだて共申者候はゞ、申候へ、下知をも申きかせ、普請無異儀成就之心遣肝心之通、數返直に申聞候處、一通を仕候而、墨之ひぬ内に、結句其身りくつたて申破、普請之さまたけ仕候事
- 一 上へ罷上節と申、一大事之儀候條自余之者りくつたて申候共、右之分最前申聞時は、縱其身失面目ほととの儀候とも、時之奉行に出し、是ほとのせんさく仕候條、引かけ無事之あつかい仕候はば、不可有異議候事候を、内々之惡意のつ

もり、又豊前と談合候か、初中後共五郎右表裏を既申及破儀候つ、豊前手前之條數々申候様、年寄奉行共一體に罷出
又は以墨付も、今度堪忍、對公儀御馳走旨可申之由候へ共、同心不仕候、各共如此申候事は、我々直に禮に出候程之
儀候、各終於當家か様之あつかいとも仕たる儀無之候由、年寄とも申候、右條々、國司土佐、木原二郎兵へ使にて度
々之次第、書物以下明白候條、悉可有披見候事

一 (輝元の出仕を延引せしめたこと)

一 豊前と諸事一具に同心候て、家中くるはかし相妨候事、心ある者は悉可令存知候、只今まで之堪忍は、先祖以來、洞
春様常榮へ奉公の筋目無忘却之儀候、然者、當分我々手前を見かけ、兩人共に、折々人をはしり候へ、何事も仕出し
候へなどの荒唐言仕候事、無其隠候是ほと成候事
以上

この罪狀書も恐らく熊谷のと同じのものであらう。今兩者を通じて考へるに、宣教師が考へたほど簡單な理由に依つて
罪せられたのではなかつた。長年に亘る所謂積惡の精算が此の機會に實行せられたのであり、殊に天野元信が老臣の言を
押し切つて主張を譲らなかつた點、黒幕としての熊谷の活動を考へしめ、その熊谷たるや、今まで君命を恐れず、或はこ
れを排しても自己の主張を固持し兎角、主人を主人と思はなかつた振舞が多かつたことがこの結果を將來したと考へるべ
きであらう。

四 慶長十年に於ける殉教者の真相

次に擧げた諸史料は當然前項に入れるべきであつたが、これらの史料は同時に所謂殉教者の真相を語るものであるから
爰で述べることとした。さて曩きに三月の出來事は盜石事件として述べたが、七月事件はそれのみの解決ではなく、むしろ

る在來の鬱積した暗流を一掃せんには、どうしても熊谷・天野一派の誅伐が必要であつたので、それが此の機會に果たさ
れたと見ることが妥當であらう。

然らば七月事件の經過はどうであつたか、既述の外國史料と對比すべき次の史料は、宣教師の記録に有る如く彼等が決
して無抵抗主義ではなく、又、謂ふ所の華々しき殉教でもなかつたことを立證するであらう。即ち多分慶長十年七月のも
のであらう熊谷元直等の誅戮覺書が毛利家文書に残つてゐる。

一 熊谷豊前相果候時之次第、腹を仕候へと申候之處、宗躰とはだてを申候て、綱をかゝり可申候之間、妙悟寺是非と
もしばり候てくれ候へと申、刀脇差をもさゝす、右之うでを妙悟寺とり候て罷居候所を、各押入候刻、完戸彌十郎先
かけ仕候て、初太刀仕候、爲褒美刀并小袖壹重遣候、綿貫九郎右衛門先かけ仕候て相はて候、子に褒美之狀并米拾俵
遣之候、元政内財滿彦兵へ先かけ仕候て相はて候、今一人同前、元政へ書狀遣之候、井四郎右内之もの大田垣先かけ
候て相はて候

一 天野五郎右衛門尉事者、山口用所申付候と申候て、桂三郎兵へ、三浦平右衛門に申付、五郎右衛門やと所に而、だし
ぬき相果候、是も刀わきさしもさゝす居候所を、初太刀三郎兵へ仕、二太刀平右衛門仕候、爲褒美、三郎兵へには刀
小袖壹重、并米卅俵遣候、平右衛門には刀、小袖一重遣候

一 三輪八郎兵へ事、香川彦左衛門、河野太郎兵へに申付候、完戸十郎兵へ右兩人同道仕罷越、門へよひいたし候、わき
さし計にて出候を、だしぬき候て、香川彦左衛門、河野太郎兵へ、あひうち仕候、爲褒美、刀一腰宛遣候、八郎兵
へ一所相勤、完戸十郎兵へ内者一人相はて候。

一 中原善兵へ事、庄原一郎兵へ、山かた市兵へに申付候、是は覺悟仕罷居候所へ、右兩人參候て、双方相勤候へとも、

右の文書の外に、宍戸元富外十名褒美注文の折紙があり、それに褒美品と受褒者を記してゐる。斯くの如く内外兩史料に依つて事件の大略を洞察すれば、奉教者の殉教なる言葉には疑を抱かざるを得ないであらう。従つて『日本耶蘇教史』に見ゆる熊谷・佐世の宗論については毛利文書には似寄りものすらなく、果して斯の如き事實があつたかどうかすら疑はしく思はしめる、事實だつたとすれば前述の罪狀書に見えて然るべき最近の事件であり、また、主君の悪口でもあるからである。

しかしながら熊谷が或る程度までキリスト教の信奉に熱心であつたことは事實である。従つて輝元公より幾度かの棄教勸告を受けたに拘はらず所信を捨てず、且つ前述の如き眼にあまる罪狀重なるに於ては、此の機會絶好のものであつたらう。しかし熊谷一人を討つのに「千人」を以て其の家を包圍したと云ふのは恐らく誇張であらう。彼が切腹の申し渡に對し「信仰の關係上自殺し難き」旨を述べたことは認めるが、これは輝元公の面前に出て何らかの申開きをせんが爲めに繩を受けんとしたと吾人は考へる。何となれば、若し殺されることを眞實に希望としたのであれば、討手に少しも反抗しない筈である、にも拘はらず前記の如く熊谷に斬りかゝつた綿貫、財満、氏名不詳の者一名及び大田垣と云ふ四名が却つて殺されてゐることは、從來の研究書には一切不問に附してゐる。これ熊谷を華々しく殉教さす上に於て最も大なる障害であるからである。況んや彼が禮服に若更へ、祈禱を済し、自己の家來に頸斬らしめたと云ふに至つては、全く宣教師の惡意に依る事實曲歪と云はざるを得ない。

天野元信も、若し欺討されなかつたとすればこれも相當に反抗したであらう。三輪は宍戸の家來を一人殺して後討たれ中原は山縣及び庄原の二人を相手にして二人を斃して後殺されてゐる。

斯くて積年の暗雲は拭掃された、そしてこの事件が七月二日の一日で無事に片付いた證據として、輝元公より福原越後守廣俊（當時伏見に在り）に宛てた七月三日附の手紙の終に「なをく爰元之儀相靜候、可心安候、大篇之事に少も無異儀、則調候、可心安候、本望存候云々」と見えてゐる。そして更に七月十三日に矢張り福原へ宛てた輝元公の書狀には、右の缺を補ふて足るものであり、これに記された所に依れば、熊谷一族の討伐は決して公教を信じたのが第一理由ではなく、家中に於ける横暴振りが常に藩主の意に反してゐたこと書中に繰返して述べられ、のみならず家中の評判として「熊谷はたし候事、他人不及申、家中之者、十年おそく候と申ほどの事に候」とさへ記されてゐる。

また熊谷誅伐後の熊谷の妻についても輝元公は熟慮されたが、結局妻の平常の「悪行無其隠候」であり、若しこれを生かして置けば「なにたる大事可仕も不存候、殊女にて候へば（中略）人の用心仕ことも有まじく候時は、どくがいも可仕事眼前候、一大事存候間はたし候」と成つたので、兩者を綜合すれば夫婦共に平常より不評判であつたことは否定すべくもない。而して、その爲め熊谷自身も家中の憎しみや、相當の恐れを抱いてゐたと見え、外出には極力用心し、輝元公が京より歸秩された時も多くの家臣は出迎へたにも拘はらず、身重臣で在りながら「はくらんと申候而不罷出候」そして、六七日の後、輝元公より總登城を命ぜられて、「やうく罷出候へども用心仕候、又其後談合と申候て、よひ候へ共、又ははくらん心候とて」出て來ないと云ふ有様であつた。其のほか「公事などの否哉申わけ候はゞ、其まゝ各かたまり、可相破覺悟と見候間、彼者共にせんを被仕かけ候ては、一大事と存候而、引切てはたし候」とも記されてゐる。

三月・七月の兩事件が毛利藩にとつて可なり深い印象を與へ、且つ或はこれが爲めに家中の人心に動搖を來しはしないかと恐れられたと見られる事實は、その年の十二月十四日に福原越後以下八百十九名の連署の起請文があり、その第一箇條に「今度熊谷豊前守輕上意、大小事忒振舞候之故、被遂誅伐候」それについて我々は決してその處分を不服と思つてゐない云々と誓文してゐる。

熊谷一派と關係ある者も誅伐直後右の十二月の誓文以前に夫々起請文を出してゐることは注目すべきである、これ「日本耶蘇教史」が、日本では喧嘩兩成敗だのに此の場合のみ一方が助けられてゐると述べて、輝元公の處置に不平の一端を洩してゐるが、事件を喧嘩と見れば詢に一理ある申立てである。しかし、表面に現はれたほど簡単な事件でなかつたことは右の記録の語る所であり、寧ろ喧嘩とか信仰とかよりは、此の場合、上洛を遅延せしめたとか工事の進捗の妨害とかの方が積弊を一掃する最も良い罪状であつたとすべきであらう。

以上吾人は主として熊谷豊前守元直を中心として従來の無批判的な殉教者取扱に反駁を加へ、天野以下の同志には深く觸れなかつたのは、何れも殆んど軌を一にするからであつた。

因に熊谷元直の舊宅は、古圖を案ずるに現在の縣立萩中學校正門北の辻を東入り三叉路の東南角の一地區であつたと推察する。而して妙悟寺はもと周防に在つたが築城と同時に萩に移され、現在の春日神社々務所の西隣の地に建てられたのである、兩者共に現在は何ものも残つてゐない。

五 キリントン遺跡遺物の新發見について

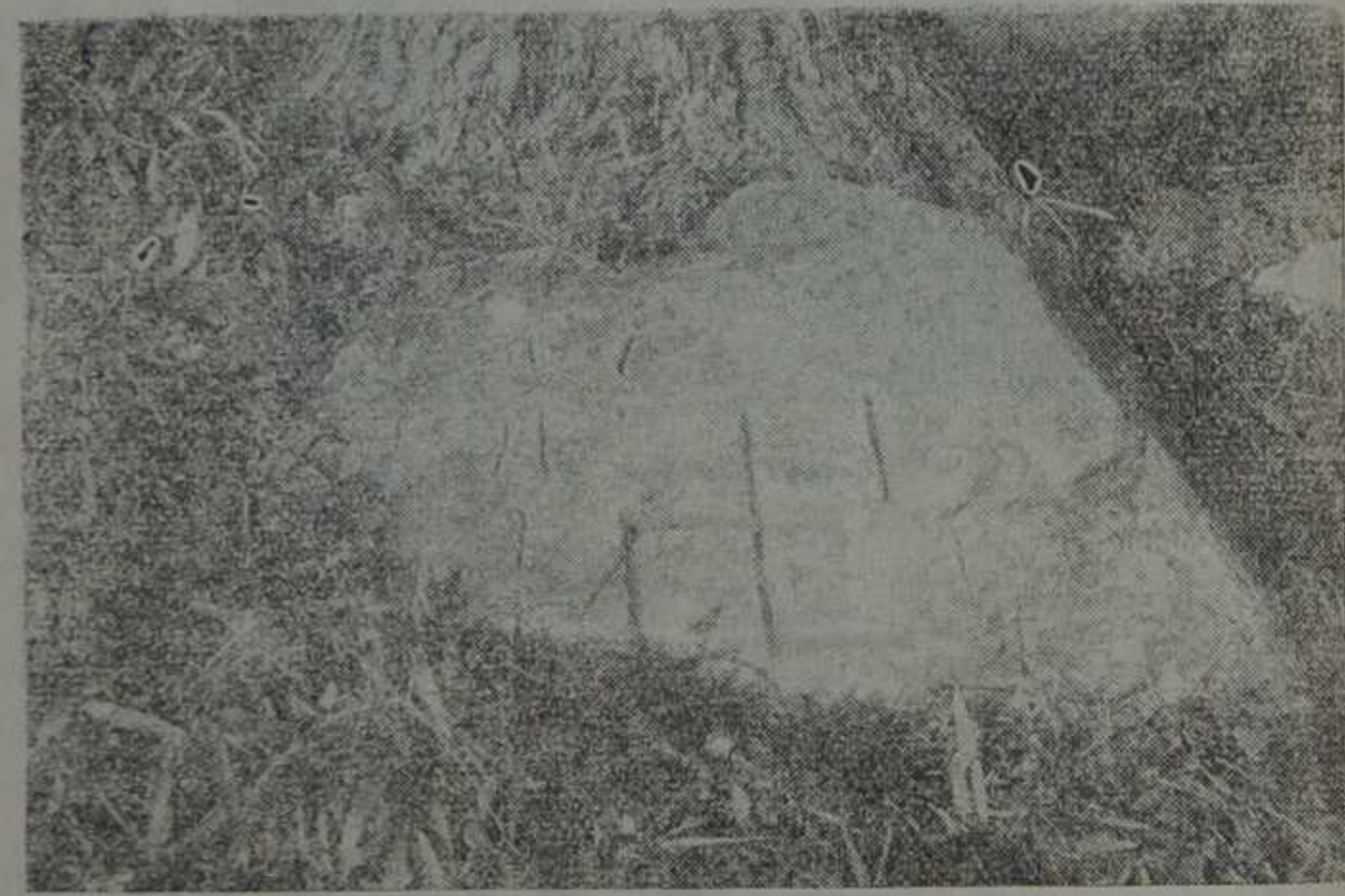
爰に提出する資料は熊谷・天野等と直接關係ないかもしれない、否、尠くとも墓碑は何等關係する所を見ないことは、その在銘の年號の示す通りであるが、遺物の方は、或は關係があるかもしれない、唯その有無を立證すべき積極的證憑が見當らないだけである。

第一圖は萩市御弓町おゆみの長壽寺所藏の人形にして向つて左は寺傳に依ると三代將軍家光の像と云はるゝ嵯峨人形で、高さ二一・五センチ(約七寸一分)美麗な繪具と金箔を以て彩色した木彫坐像、この外今一つ家光奥方の像と云はれて右と一對を處す同形同色のものもあるが、云はんとすることに關係ないから除外した。家光像を熟視するに、當寺の和尚は氣がついてゐなかつたが吾人は冠に陰刻された十字を見出し、或はとの疑念から、他に何かこんな人形はないかと尋ねた所、

こんな人形もあるとて出されたのが第一圖向つて右の黒色の高さ一三・五センチ(約四寸五分)小立像であつた。一見して



形人ンタシリキ藏寺壽長市萩 圖一第



銘年六文寬碑墓ンタシリキ 圖二第

て此れが木彫丸刻の「マリア」觀音たること疑ひなく従つて前者も亦キリントン關係遺物なること誤なしと推察し、爰に提示して紹介せんと欲したのである。

觀音像の著しく不手際なるは素人の製作なるを思はしめるが、將軍像は恐らく購入品に加工したものであらう。而して將軍像に斯くの如き工夫を凝したものは寡聞にして吾人の知らざる所であるが、これ甚だ工夫の存すが、これ甚だ工夫の存す

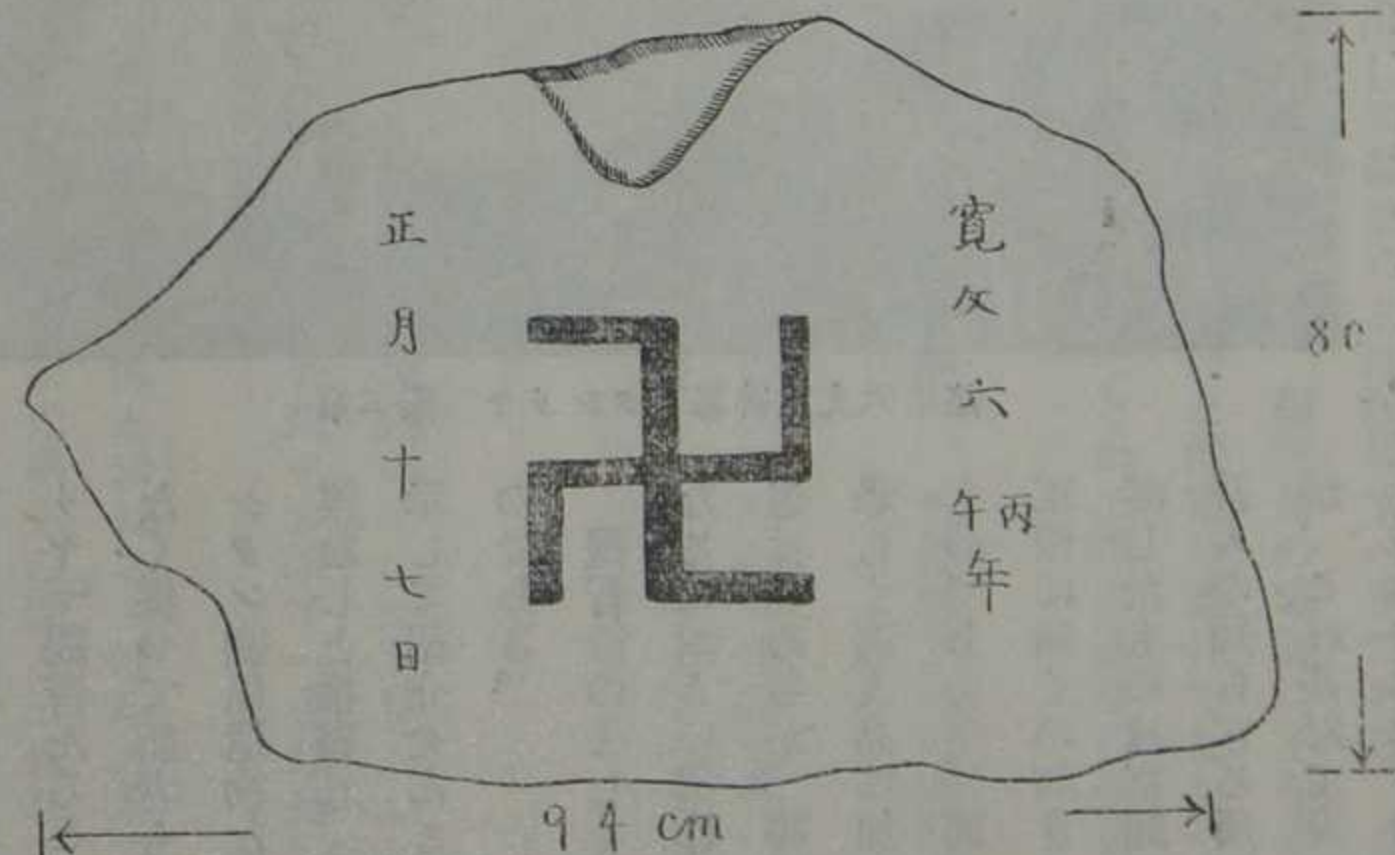
る所であらう。當時に於て將軍家の肖像と云へば、如何なるものと雖も尊敬するであらうし、又其所有者が毎日禮拜する

とも決して怪しまれる事はなかつたであらう。
 右の遺物と共に次の如き新遺跡の發見を附言したい。第二・三圖の墓碑が即ちそれで、矢張同寺背後の墓地に現存する。第二圖には第四圖實

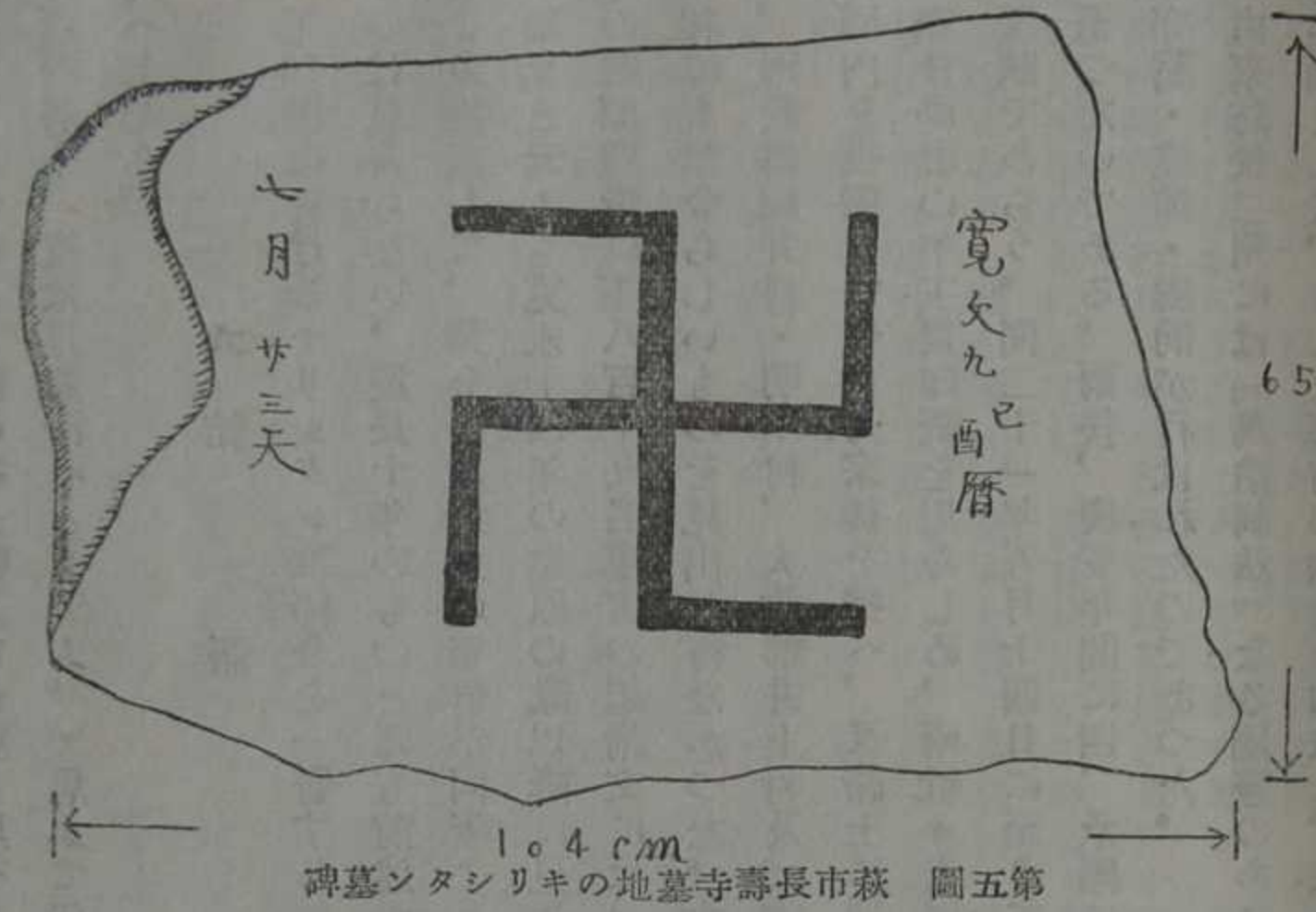


銘年九文寬碑墓ンタシリキ 圖三第

測の如き文字が存し、石は玄武岩質にして約三十度の傾斜を以て南面し表面中央に左旋萬字があり、その右側に「寛文六丙午年」、左側に「正月十七日」と陰刻されてゐる。第三回は第五圖に示す如く、矢張り中央に左旋萬字、右側に「寛文九巳酉曆」、左側に、「七月廿三天」と陰刻され、これも南面して三十度ほどの傾斜ある玄武岩質である。



碑墓ンタシリキの地墓寺壽長市萩 圖四第



碑墓ンタシリキの地墓寺壽長市萩 圖五第

此の兩碑は不思議にも同寺本堂の正北、即ち本堂の正背面に當り、本堂の方に向ひ、本堂と兩碑が一直線上に在るばかりでなく、兩碑の根元には夫々巨大な銀杏の木あることである。斯くの如き事實は、尠くとも吾人には偶然の一致とは考へられない。本堂の背面、銀杏、南面、一直線、同石質、同傾斜、同種彫刻等、其處に隠された何らかの意義があるのではあるまいか。
 由來萬字は佛教徒の好んで用ふる「幸福」の表象であり、我國に於てこそ佛教と密接な關係を持つてゐるが、由來する所極めて古く、地中海に發達したエーゲ海文明にその明徴があり、又印度に存することも周知の事實である。而して洋の東西を問はず「幸福」のシンボルたるは古今を通じて一致する所であり、兩碑にこれを見るのは、恐らくキリスト教信者を辨むるに當つて、このシンボルを以てカムフラージュしたものであらう。
 吾人は兩碑の發見以來萩市に現存する多數の墓地に就いて墓碑の形式を調査し、特に「延寶」在銘以前の殆んど全部を實測し、許多の資料を蒐め見るを得たが、右の兩碑に該當するもの又は類似するものは遂に見出すことが出来なかつた。これ兩碑を以て萩地方に行はれし墓碑形式の異端なりと斷言して憚らない所である。
 曩きに遺物としての二つの人形を提出し、今爰に兩碑を見出すに於て、

或は兩者に何らかの關係あるに非ずやとの疑念の湧出を思ふものであるがこの長壽寺は實に又熊谷豊前守元直の菩提寺で

もある、同寺には元直の過去帳及び位牌も所有し、熊谷との關係の淺からざるを立證してゐる。(彼の戒名は蓮西又は月峯蓮西居士、或は月窓淨心とも云ふ。)思ふて爰に至れば、將來三者の關係を證するものが現はれるかもしれないとさへ考へしめる。

六 結 語

毛利藩に於けるキリシタン取締令を一瞥するに吾人の参考した毛利家文書・毛利十一代史等に依れば、慶長十年以前のものは見當らない、慶長十年のもので雖も前述の如く、熊谷の罪狀書に「宗弊無用のこと云々」とあるにとゞまり、その内容より推察して、禁令又は禁止の布告が同年より以前に在つたらしく考へられるが、これは明らかにし得ない、そして當時禁止と云ふも寛永十四年の島原の亂以降に見るほど峻嚴なものではなかつたであらう。何となれば慶長十年十二月十日附の福原廣俊以下八百十九名連署の起請文には、キリスト教を信奉しないと云ふ意味の誓言は一切見當らないからである。元和にも禁令らしいものを見出し得なかつた。次の寛永十年に入つて『山口縣史略』に依れば「十年、切支丹宗ノ徒ヲ檢ス、阿武郡福井村・明木村、大津郡井上村及び吉敷郡山口ニ其徒アリ、索捕シテ火刑ニ處ス」とあり、又同十五年六月には國內を搜索して切支丹宗徒を捕へ、又諸士に切支丹宗を信ぜざる誓書を上らしめ、その料紙には萩城内鎮座宮崎八幡宮・春日神社の午王寶印紙を用ひしめ、兩社々人に寶印紙一枚錢二文を以て賣るべきことを命じてゐる。蓋し島原の亂に依る反映であらう。同二十一年五月十四日に至りて取締は更に寄港する船にまで伸び、内外共に嚴重なる警戒が加へられるに至つたのである。爾後、慶安年間に四、承應に一、明曆に七、萬治に八、寛文に四回の禁令を發し、引續き延寶以後にも穿鑿・逮捕・處罰が行はれたのであつた。

由來防長二州には『萬治制法』なる國憲のあること周知の事實であるが、泰嚴公の萬治三年九月十四日、元就公の遺法を主軸として、これに幕府の法令を加味し、法典三十三條を制したのが即ちこれであり、一に『萬治條目』とも云はれてゐる、この毛利家憲法とも云ふべき法典の第一條の附則に「貴利支丹宗門堅令停止訖、是又天下嚴重の御制禁也、無懈怠

常々定置所の五人組の者、相談し可令穿鑿自然脇より於露顯は。本人は可準天下之御制法、五人組の者も亂輕重可有其沙汰事」とあつて、慶長十年の熊谷事件以降、數回に亘る事件が、遂にこの制法を作らしめるに至つたのであつた。従つて熊谷事件は確かに大事件であつたに相違ない。既述の如く、豊・徳二氏の過渡期であり、毛利氏にとつては萩城御打入りの草創時代であり、未だ島原の亂を見ざる三十數年以前に既に此の始末たるに於て、若しそれ、果して、谷事件が信教中心の出來事たるに於ては、後世幕府が禁教より鎖國に政策を移した所にも自から明瞭なるものがあらう。鎖國は正に必然の過程であり、我が國民、國家を護る所以でもあつたと考へられる。

最後に熊谷事件に於て誅に伏したのを見るに、熊谷元直及びその妻(妻は佐波越後守廣忠の娘)、熊谷二郎兵衛尉(元直の次男)、三輪八郎兵衛尉元祐(妻は元直の姪)、中原善兵衛尉等であり、この外に、佐波二郎左衛門尉もその時偶々元直の宿所に來合せて害に遇ひ、熊谷與右衛門尉元實(元直の祖父伊豆守信直の孫、元直の從弟)、同太郎右衛門尉元吉(元直の甥)、湯二郎右衛門尉、牧野二郎右衛門尉、天野勘左衛門尉元因、同彦左衛門尉元重等は追放にされ、元直の孫二郎三郎元貞は、祖父の罪遁れ難けれども信直の有功、秀元の甥なるに依り助命せられ、熊谷玄蕃頭就眞入道玄要(元直の叔父)、同息藤左衛門尉元辰(元直の從弟)は元直の一族であるが、彼等に同意しなかつた爲め處刑を免れてゐる、右に關する文書は夫々存するが煩を避けて述べなかつた。

元直の子猪之助は殺されたのであるが、助命された孫の二郎三郎は『日本耶蘇教史』に彌三郎とあり、或本には與三郎ともあるが、幼名かそれとも誤記か明らかにし得なかつた。

附記すべきは『山口公教史』に見ゆる「耶蘇の木」であるが、過日東光寺に赴きその在否を調査したる所、偶々そのことを記憶したる一老人に會ひ次の如きことを知り得た。即ち境内に嘗て存在したがピリヨン氏が來訪して、これを新聞に載せて以來、見物人等多數來るあつて煩に堪へず、約二十年ほど前に我り倒して板を作り、當寺の本堂佛壇の腰板に使用した。そして、その木に彫りつけてあつた十字は縦横約一尺ほどあつたと云ふことであつた。本堂の正面に向つて左側の

腰板が、他より新しいのが即ちその木であつたと云ふ。



第六圖 所謂キリシタン殉教者の全景

ここに建碑の理由、何が「殉教」なるか、その判断に苦しむものがある。

(昭和10、11、12)

長壽寺に於ける二墓碑が吾人の推定の如くキリシタン關係の墓碑であるなら、東光寺の「耶穌の木」も亦墓碑の傍に植えられたものか、或はその木自體が墓碑であるかもしれない、但し、長壽寺の銀杏には十字らしきものは發見し得なかつた。

之れを要するに萩に於ける公教史上の殉教者と看做されてゐた熊谷一派に關する史實は大略右述の如くであり、たとひ宣教師が意識的に事實を曲歪して記述したのでないとしても、現在より之れを見れば、曲歪した報告であると思はれる所が極めて多い。その後元和四年には狩野半平右衛門等の所謂殉教があり、近くは幕末維新に於ける大村崩れの送萩等があり、これも亦宣教師側の記録には一人の棄教者もなしとあれど、反證は無數に存し、所詮宣教師は歴史家ではないが、事實の表裏を腹藏なく書くものでないことを語つてゐる。

考へて茲に至れば現在萩市堀内の舊岩國屋敷跡に、嘗てこの屋敷に大村崩れの幽因された所に在つた敷石を用ひて、第六圖の如き所謂殉教者の追善碑が立てられてゐるが、慶長・元和兩度のものは特に顯著である明治の初期に建てられたときいてゐるが、吾人の研究を以てすれば、ど



祭安藤靜宇先生文

門弟 河野通毅

追悼記

靜宇安藤紀一先生昭和十年七月八日病革り遂に逝去せらる。先生は明治三十二年以後三十三年の長きに亘り本校の子弟教育に盡瘁せられ退職後も防長の耆宿として斯界に貢獻されし事故擧に違あらず。殊に松陰全集の完成には學生の心血を瀉かれ爲に天壽を短縮せらる。嗚呼、然れど一管の筆に報國の赤誠を托する亦大丈夫の本懐ならずや。茲に先生の御功績を景仰し諸氏の追悼記を掲げて先生を偲ぶよすがとす。

時維昭和拾年歲次乙亥七月拾壹日、門生河野通毅銜哀致誠、祭恩師安藤靜宇先生之靈、予於先生、義則師弟、恩則父子、幼孩入於明倫鄉費、初學句讀、夙受提命、進學於中學、再請誘掖、漸知斯道之可尙、既而奉職、日夕呻咻畢、三受提擯、或

草一文賦一詩、每請玉斧、問而無不教、語則常受益、而負托無效、僅守枯株、幸免罪耳、顧予與先生、半生之間、形影相伴、噫、雖義則師弟、恩豈不有父子之親邪、而今先生忽焉而逝矣、嗚呼哀哉、彼茫茫者天乎、彼邈々者地乎、而在茫邈之間、懷無窮之恨、如予者果幾人乎、自今以往、向誰請益邪、噫、悲夫、予之先人與先生之先考相識、予諸叔與先生相親、予也者、既襁褓之間、識先生者也、不知來世又得結未了之緣、先生性謹嚴、好學自力、有古人之風、其學精緻、議論證據今古、諸公要人、爭窺其門、常受口講指畫、操履坐作、必端正、被服牀席、必整齊、遇人渾々、不見圭角、志守端直、莫求於世、趨舍大節、不悖於理、而雖莫位勳赫々、使人瞠目者、其文學辭章、致必傳於後世也、無疑而已、所謂鄉先生而可者乎、向聞訃音、既經三日、每夜人定、慕哀不止、遂不能寢、混迷之裡、纒草斯篇、在天之靈、果爲奈何、先生教予以父祭子之親、乃知先生之不俄相棄、噫神靈冀來饗。

偶感

學半 河野通毅

松下先賢志 流風遺韻傳
育英誰繼述 事局苦屯澶

安藤紀一先生を偲ぶ

舊特別會員 金子乙助

秋雨のふるき軒端の忍ぶ草
しのぶる袖の濡るる頃かな

予は先生の相知を辱うすること多年、殊に萩中學校では、擔任學科を同じうして居た關係より、始終机を並べて事を共にして居たので、爲に啓發せられたことも尠少ではなかつた。先生逝かれて既に四箇月、靜に往事を追憶するに、今猶其の音容に接するの感がある。左に二三の實話を思ひ出づるまま録して、先生を偲ぶよすがとしよう。

(一)

先生は文を屬せられるに一字一句も苟もせられなかつた。従つて人の文章に對せられる態度も可なり嚴格であつた。確か大正八年十月頃の事であつたと記憶するが、指月公園に、舊萩城址碑が建設せられる事が、當地の新聞に報載せられ、且つ其の碑文が掲げて有つたので、先生これを見られて、天下後世の誚を受けることが無い様にとの誠意から、典故を探りて意見書を起草し、關係當局に提出せられた事があつた。其の頃指月公園では、碑面に文字を彫刻中であつたが、如何なる故にか、俄に之を中止して、既刻の文字を磨消しつつあつたのを、目撃したものが有つたとかいふことである。又故田中睦軍大將の平安湖なる別墅は、橋本川に臨み、眺望絶佳の處であるが、前庭に五株の老松が、鬱蒼として枝を交へて居るので、五松閣と號せられたのである。それで大將が東京の有名な某詩人に、五松閣記を作らしめられた。さて其

の撰文を扁額に仕立てようと思つて、其の揮毫を先生に依頼せられたのである。先生其の記文を閲讀せられて、猶推蔽の餘地ありとし、早速意見を認めて作者に送られたのである。所が久しく何等の回答に接しなかつたので、大變心安からず思つて居られたが、其の内漸く回答が有つたので、先生は快く染筆せられたとのことで、今回邸の相間に掲げられてあるのがそれである。これは昭和四年頃のことかと思ふ。

(二)

先生は自ら信ずる所は、侃々として一步も譲らない氣概があつた。

或時某視學官が學校を巡視した際のことであつた。職員一同を集めて、例に依り一場の訓示をした。其の訓示中に防長精神と云ふ語が屢々繰返へされた。訓示後先生は同僚に向ひ、防長精神と云ふ様な語をあの場合に使用するのは適當でない。これは宜しく日本精神と云ふべきであると批評せられたのを、視學官の耳に入れたものが有つたので、先生と視學官との間に意見の交換が行はれ、議論に花が咲いたことがあつた。

(三)

先生の學問に對せられる態度は、誠に忠實なものであつた。従つて先生に面語すると、其の話題の大部分は、いつも學問上のことであつた。病床に臥せられても、談話は猶其の範圍を脱しない。

予は或時先生の病氣を見舞ふたのであるが、先生は其の容態を詳細に語られた、後さていはれる様、人間といふものはしわいものぢや。私はまだかうして居ると云つて、微笑を湛へられたかの如く思はれたのは何ともいへない寂しみが有つた。先生の話は段々と學問上の事に轉ずる。先生曰く、

松陰先生遺墨寫真版第二輯の説明を書くことに就いて、いつぞや市教育會の人が來て、自分が第一輯の説明を書いた緣故から、これも自分に書いてくれとの頼みであつたけれども、自分はかういふ状態なので、到底其の需に應ずることは出来ないで、已むを得ず斷つたが、誰が書くことになつたかと尋ねてあつた。予は知らない旨を告げた所が、睨目久しうして居られた。何でも此事がひどく氣に掛つて居たらしく推察せられたのである。先生又曰く、先日客が來て、素問と云ふ書はどんなことが書いてあるかと尋ねたからそれは支那最古の醫書で、圖書集成に收められてある。圖書集成は萩圖書館にもあつて、自分が其の目錄を書いて館に寄贈して置いたからそれに依つて探索したら直ぐわかると云つて聞かせた。素人が案外あんな事を聞くものぢや。かうして寢て居ると書物の中に在る事を色々思ひ出すとて、蒙求や禮記の中から語句(語句は省く)を抽出して、これらも人の問ひさうなことぢや。若し問ふものがあつたら確實に答へてやりたいと思ふ。自分は云々解釋して居るが猶よく研究して見てくれよ。禮記も朱子の註はなか／＼旨く説いてあるなど語られ、わざ／＼枕頭の書物を開きて一々其の箇所を指示せられ、病氣の身にあるのも知られない様であつた。さて辭去するに際しては、どうか斯文のため益々自愛せよとの注意があつた。其の後見舞はうと思つて居る内に易簣せられたので、此の注意の語が予に對せられる先生の遺言であるかの様な氣がして感慨無量である。

(四)

松陰全集の編纂は先生最後の御奉公であつた。

先生が萩中學校を退かれし後は、一旦京都に轉住せられたが、縣教育會が松陰全集の編纂を企つるや、先生は其の編纂の委託を引受けられ、之を以て最後の御奉公と決心せられ、再び單身萩に歸られ、敢て老軀を提げて其の業に従事せられたのである。爾來二年餘の間、日夕松陰神社の寶物庫に入つて、遺墨の淨寫校合に努力せられたのである。予は其の間三回先生の寓居に訪ねた事があつたが、或は多數の原稿を展げて照合の煩瑣なる様を語られ、或は草體にて認められし原本を開きて難讀文字讀下の苦心を談されるなど、編纂事業の並大抵ではない事が察せられて、同情に堪へなかつたのである。

其の心勞の積れるにや、今や全集の完成を待たずして、七十一歳を一期として溘焉として白玉樓中の人となられた。嗚呼先生逝かるといへども、其の名は永く全集と共に不朽に傳るであらう。先生又以て瞑すべきである。

(五)

先生は努力勤勉の人であつた。

先生中學校に於て授業の暇には、いつも砵々として、讀書をしたり、筆寫をしたり、謄寫版刷をしたりして居られた。嚴冬といへども滅多に暖爐の側に立寄られなかつた。たとひ立寄られることがあつても、手より巻を釋てられない。爐邊の戲談を耳にしながらも、矢張目は書籍の上に注がれて居るのであつた。

(六)

先生の趣味嗜好。

先生の趣味は讀書・詩歌・書道・音楽等であつた。尤も俳句には指を染められなかつた様である。長い間に於て先生句作を見たことは無かつた。骨董癖は知らないが、書籍は先生の生命であつて、之を蒐集せられること多年。積んで二萬卷の書をなし、宛然一大文庫の觀を呈して居る。碁將棋を玩ばれない。謡曲も其の趣味には適しなかつたらしい。喫烟の嗜好なく、酒は眼病に罹られてから全く之を廢せられた。

(七)

先生の書。

先生は能書家であつた。其の書風は、三淵・顔真卿・海屋等と變遷は有つたが、晩年には自ら一家を成した。假名は千蔭流であつた。今先生の揮毫に係る碑の、市内に散在するものを二三を左に録す。

碑名	所在地
贈正四位前田君碑	指月公園内
○百万一心碑陰文	萩中學校々庭
士規七則碑○碑陰文	同前
○右田大夫邸址碑	同前
○皇太子殿下行啓記念碑陰文	同運動場
神事修成の記	春日神社境内
○中村雪樹先生碑陰文	明倫小學校々庭
○中所可乘先生碑	妙元寺境内

附記○印あるものは撰文も先生である。

○ 思ひ出づることのくさくさ、摘み置きぬ

○ ありしむかしのわすれがたみに

(昭和十年十月二十一日記す)

安藤靜宇先生を偲ぶ

四四

舊特別會員 香 川 政 一

靜宇安藤紀一先生の公的閱歴を私は苦心時代得意時代、失意時代、自適時代の四つに區分して見ると面白いと思ひます。明治十八年の十一月に山口師範學校を卒業して、萩の明倫小學校の訓導に任じ、初代校長の中村雪樹先生を輔佐して、能く創業の績を挙げしめ、次で二代校長の綿貫謙輔先生は萩中學校長で、明倫校長は兼務であるので、靜宇先生が全く事實上の校長として骨を折られました。然るに同僚に明治十六年卒業の岡本光之、明治十七年卒業の竹内新三郎といふやうな先輩があつて稍もすれば靜宇先生と對立の姿となり、加ふるに當時の明倫校教員中には正規の養成を経た人が多くないので、之が指導の任に當らるゝ靜宇先生の苦心は容易ではありませんでした。然るに次第に先生の實力と人格とは當局の認むる所となりて、先生が校長の任に就かるの時至り、阿武郡の當路者は明倫校をして種々の研究を行はしめ、之を範として郡内小學校に及ぼすといふ方針を執りしより、靜宇先生の勢力は宛然として郡内小學の指導者なるかの如き姿となり、先生の名聲は大に縣下に響き、先生の手腕は往々郡外にも延びるやうになり、明倫校の聲望實に隆々たるものがありました。之を先生の得意時代といふのであります。然るに明治二十何年かの頃に、白上俊一といふ人が阿武郡長になつて來まして、この人は萩の濱崎新丁の出身で中々遣り手ではありませんでしたが、性格が全然靜宇先生と違つて居つて、兎角明倫校を賞揚することなく、先生の勢力が俄に校内に留ることになりました。次で長野範輔といふ郡長の時に、萩中學校の縣立問題が起り、萩の當局者は明倫校の建築費八千圓といふものを、萩中學校の建築費に寄附することになり、多年先生の計畫であつた明倫校の改築も、當分見込が無いことになつたのは、先生として失意に加ふるに失望を以てせしめた。爰に先生

は斷然意を決して明倫校を去られたやうに思ひます。先生の萩中學校入りは實に私共に意外の上もないことでありましたが、何とも致し方なく、靜宇先生を逃した後の萩の初等教育は實に大きな損失を受けたと思ひます。中學に於ける先生は能く實力と人格とを認めて貰はれたやうで、先生は悠々自適して其の任を樂まれましたことは、誠に先生を識るもの、悦ぶ所でありました。

先生の私的生活を叙せんとするには、第一に先生の孝子たることを言はねばなりません。先生の父友樹翁は國學の大家足代弘訓の門人で、歌人としての名が高く、次の一首は特に世に聞えて居ります。

里 霞

友 樹

春はたゞすみれつばなの萌えそめて

かすみばかりぞ深草のさと

惜哉靜宇先生の幼少の時に翁は失明して、誠に不自由の身とられました。翁は明治三十二年三月に逝かれ、山口の近藤清石先生などは特に之を痛惜して、

安藤友樹が身まかりければ

清 石

雁はよもさそはじものをいかで君

はなと見捨て、雲かくれけむ

といふ一首を靜宇先生に寄せて居られますが、先生の家は神祭でありますので、此の時に翁の葬儀は北古萩の俊光寺で行はれましたが、堂上でなくて、門内の階前で行はれたのであります。其の頃の萩は今のやうに猥に葬儀の盛大を競ふといふことはなく、普通の家では會葬者の三十人もあれば盛んなと言はるゝ位でありましたが、友樹翁の葬儀に會する者は門内に充ちて居りました。靜宇先生はこの多數會葬者の前を廻つて、一々人別に挨拶を爲されたのには誰も感歎しました。

先生は翁に多年孝養を盡され、私が或時山口へ行き、近藤清石先生を訪ひました時に、之を安藤に遺つて下さい悦ぶであらうと言つて、本朝孝子傳を贈られたことがあります。私が大正九年一月に萩の孝女明石くのために萩の名玉と題して小傳を書きました時に、先生は喜悅の餘り、次の一詩を賦して私に貰われました。

明治洪恩表淑良。石中美玉發幽光。久長孝德天人感。仁化鄉童及万方。

先生は色々の孝子傳を集めて悦んで居られました。必ず家に傳はつて居ると思ひます。萩の吹上に須子平十郎といふ人が居つて笙を吹くに妙を得て居ると聞き、先生は就いて學んで秘傳を受けられました。私が明倫校に於て先生部下である時に、數名相議りて先生に笙を聴かんことを請ひました。先生は父に吹いて聞かす外に吹いたことは無いが、特に吹きませうと言つて明倫校へ笙を持つて來て一度吹いて聞かせられたことがあります。以て先生の人と爲りが俥ばれます。

先生の母堂は又た至つて賢母でありました。常に甲斐々々しく勤勞して、幼兒を育て、盲目の夫に事へられましたが、以前には先生の御宅は江向で、平安古に近い所でありました。其の頃私の宅は平安古の滿行寺筋で祖父清香軒が薙刀の道場を開いて居りましたが、母堂は幼少な靜宇先生を道場へ連れて來て、遊ばせて置いて、自分には、宅へ歸つて家事に拮据されました。其の頃又た、田總百合之助先生の養父田總楸蔭齋先生が、矢張靜宇先生の御宅の近くで學塾を開いて居られましたので、母堂は又其處へも常に靜宇先生を連れて行つて遊ばしめ、以て自ら文武に近づき、無益の遊戯に耽らせぬやう氣をつけて之を鞠育しられました。私の小學時代には萩に八九校の小學があつて統一して居りませんでした。而して私は土原の養正小學に學んで居りますと、明治十八年の夏に、諸校が中村雪樹先生の手で合併しられて、初めて明倫小學と稱することになりました。斯くて私は靜宇先生の歸萩前の秋十月に退校して他郷に出でましたから、明倫校出身ではありませんが、靜宇先生との師弟關係はありません。種々の場合に於て誠に御世話になり、又た比較的先生の御閱歴を知つて居りますので、僅かに其の一端を記したのであります。或は多少の記憶違ひがあるかもしれませんが。

靜宇文庫整理中の諸感

伊 東 素 芳

靜宇文庫それは二三の土藏に足の踏み場もなくピツシリと納められてある。その數萬卷の圖書目錄の照合文書を済ましたが、決して容易な業ではなかつた。この圖書整理中に受けた教訓は寔に尠くないが、其の一二を掲げて先生追悼にかへたいと思ふ。

實に先生の抱負識見とでも申す様な事はこの文庫に遊んではつきりする。勿論平素の御性格そのまゝが現はれてゐるといつてよい。何から何まで整然たるものであつた。所がどの本を見ても一枚開ければ其の書の要領が別記してあり、時々自分の意見などが平易に力強く記止めてある。又他人より讓受の書にはそゞゝ其事由が記して印が捺してある。先生の勉強は筆寫が多い。それに自編のものも相當澤山ある。總べて系統的に秩序正しく而もその各部各冊が至極貴重なるものである。研究の方面も決して一言にはならぬ所謂士農工商各般の古今に亘り頗る廣範圍なるものである。殊に古學の研究、松陰の研究などは先生の尤も心を用ゐられたものらしく感興も亦寔に深いものが多い様に見える。靜宇編拙居抄中の古道大意抄に

(中略)一體道といふものは實事の上に具つて有るものである。然るを兎角世の學者などは盡く教訓といふことを記したる書物でなくては道は得られぬかの加く思つてゐるものが多いで、こりや甚だの心得違いなことである。教と申すものは實事よりも甚だ下い物である。其故は實事が有れば教はいらぬ。道の實事がなき故に教といふことがおこる「大道すたれて仁義あり」と孝子の申したのもこうした場合を見ぬいた語である。殊に教といふものは人の心に親しくはシミヌもので

ある。それが武士の傳記や忠臣藏の事實などの話であるとしみじみと身にしみて髪も逆立ち涙もこぼれる程心に深く染むものである。(中略)殊に教といふものは其の心さま其人となりの宜しからぬ者が言置きたる教訓で書に記して遣つてあると何さま尤もらしく見ゆるもので唐の教の書物といふものには是がけしからぬ多い。或は君を殺して國を奪ひたる者などの言つた教さへ誠に金科玉條といふ様になつてゐる。(中略)この様なことは皆空言といふて實がなく其書き列ねたる處ばかりが立派ではそりや山賣の能書を見たやうなもの。(中略)世の常の學者や道學者などと言ふ輩がそればかりを唱へてゐる。といふは片腹痛いようである。唐でも此等の訣をよく心得てゐるのは孔子一人のやうである。扱てこそ其申した語に「我慾載之空言不如見之行事之深切著明也」とあるを見てもわかる。(中略)孔子は教書とは一部一冊も作らずに唯春秋といふ記録をしらべて正しく何の某は斯る悪しき行があつた。誰々は斯様の善事が有つた。といふことを有のまゝに記してその記録を読めば自ら其中にチャンと悪をこらし善を勧めることを人の氣のつくやうに書取つたもので實に孔子生涯の骨折といふものは此の春秋である。以下略

同國體論の末尾に

伊藤仁齋こいつ思ひの外の奴さん也(中略)

紀伊殿へ書を奉つて天無二日とか申候が日本には二つの日これ有るに依つて號令一ならず宜しく帝位をば將軍に踐なされ天子をば大和公になされ候様にと申上候。

紀州様殊の外御怒りなされ斯様の妄言江戸へ申上候はゞ死刑にも可被仰付候然れども御慈悲を以て默止なされ候以來斯様なこと筆は申すに及ばず口にも吐き申す間敷旨御制戒被成候

(これは靜宇拙居抄表紙裏に◎として別記せるもの也)

松陰研究の中より

松陰先生の報告は業家時代と浪人時代との二つの時期あり、業家時代の教育は明倫館教則の下に行はれたるものにして先生獨特の技倆はありても後に傳はる程の著しきもの觀るべからず、浪人時代に及んで始めて觀るべきものあり。古人志を得れば其道を天下に行ふことを得べく志を得ずして窮すれば退きて其身を善くす。先生の浪人時代は即ち失意窮窮の時にして其位に素して行ふべきは唯だ教育の事業あるのみなり。松下村塾の役是也。今の學校教員は一旦職を失ひて直に教師たるの操持を棄て俗子と相伍して往時の面目少しも存せざるものあり。松陰たる價は其の失職の後に在り、教育者の教育者たる價もその窮阨の時に顯はる。吾人の常に留意すべき所也。

又松陰先生の教育は英才教育を重んぜらる。是は古今同様の事なり今の教育の劃一制度によつて行ふ故にこの事忘れられ易し、小學校兒童中より中學生を選び、中等學生中より高等學生を選ぶも亦この意に出づるものなりと雖その一學校に於ける教育にても英才教養の精神は忘るべからず。(中略)

松陰先生の武士道とは義によりて勇を養ひ、誠を盡して死を畏れざるなり。先生の教育は總べて之に立脚せらる。以上其教ゆる所節々妙あり通徹して又力ありといふべきである。其他奇僧賈洲の事蹟の調べについても、五松閣の記の事情にしても先生獨特の御性格の嚴格さと絶大の御抱負とをうかゞふことが出来る。特に五松閣の記については第一通信より第十一通信まで悉々整理保存されてある。これを見るもの其の達識と嚴肅さとに畏敬の念なき能はずである。誠に日本的の大人格者の感がわく。

靜宇文庫整理の任に當つた余の希望としてはこの尊き内容を持つ文庫がこの故ある萩の地に於て又因縁深き場所に於て獨立の建設を見るならば、獨り安藤先生のためのみならず、萩としても最も權威ある一施設なることを喜ぶ者である。希くば郷黨之諸士高弟等之御斡旋と時代の御力とをまつものである。

安藤先生追憶の記

卒業生 大村武 一

五〇

七月十一日。午後一時より萩市公會堂に於て安藤先生の葬儀行はる。病床に在つて参列するを得ず。哀悼の意を捧げ靜かに瞑想して先生の思ひ出を辿る。

——日記帳を繰りて——

確かに四年の終り頃だつたと思ふ。同級のFが「なんでも紀坊ではいけない。坊を様に言ひ更ようぢやないか？」と提議したことを覚えてゐる。之が安藤先生に對する一番初めの思ひ出である。此の提議以前から紀様と言つてゐた人もゐるかも知れないが大體吾々を堺として以前の卒業生は紀坊と言ふ人が多いし以後の卒業生は紀様と言ふ人が多い様に思ふ。

第二の思ひ出としては減多に笑はれなかつたと言ふ事だ。「おい此の前の授業時間には紀様が笑ふたアーヤー。」と他の組の者に話す程安藤先生の笑ひ顔は珍らしかつた。一見接し難い冷徹孤高的の様に見える先生だつたが、冷たく光つてゐる白い鐵ぶちの眼鏡を通して見える瞳には温行なやさしみを泌々と汲みとることが出来た。學生時代の思ひ出として残るものは先づこんなもので人格者であり學者であり孝行だつたと言ふことは最近知つたぐらゐのもので、學生時代にはちつともわからなかつたと言ふ方が私の心を詐らないかも知れない。勿論學者だと言ふので口では言つてゐたけれど。僕が安藤先生と交渉を持つ様になつたのは先生晩年の三四年である。それも先生が京都より歸られて松本に借住居をしてゐられた時からが深い。極く近かつたものだから時々話に行つては紅茶かコーヒーかをよく御馳走になつて歸つた。僕は先生を儒の醇なるものと言ひ度い。決して自分の學問を銜はれるでもなく世の多くの人がする様な賣名的行爲は微塵も

なかつた。終生を讀書の裏に過されたのだ。あの七十の老體を以てよく圖書館まで來られてコッ／＼研究せられた。又その借出の圖書量に於てもとても常人の及び難いものがあつた。その研究は正確で徹底的のものだつた。松陰全集編纂の時などは氣の毒な程努力せられた。これが先生の死期を早めた大きな原因になつたに違ひないと思ふ。何事に依らず先生は几帳面だつた。圖書館の本などでも皺になつた所があれば丁寧にして還された。一寸したことだけれど先生の全貌を伺ひ得ることが出来る。嘗て小學文篇三冊をかつて漢文に作り直したことがあつたが、先生に借つた本故カバーを作つて用ひなければならぬ程氣兼ねだつた。此の時誤正を先生にして貰つたが如實に先生の學問の造詣と研究の深さを知ることが出来た。今少しみづちり先生について勉強しておけばよかつたと思ふけれど空しい繰言となつて仕舞つた。

さきにも言つた様に學生時代には減多に笑はれない先生だつたがお宅ではそうでもなかつた。漢詩を作つて先生に添削して貰つたことがその時「酒」「醉」など言ふ語は何んな時でも間に合ふがそれだけ欲になり易いので氣をつける様に。和歌に「それにつけても金の欲しさよ」と言ふ下の句をつければ何にでも間に合ふ様なものだと言ひながら「秋の田のかりほのいねのともあらみそれにつけても金の欲しさよ」と言つて御飯の中の砂を嚙んで折られた前歯を出して笑はれた顔が深く私の腦裏に焼つけられてゐる。

又安藤先生は琴や笙が上手だつた。此の話は香川先生から聞いたのだが此の話聞いた時「あの先生にして」と奇異を感じた。然し先生が琴を習はれた動機が盲目のお父さんを慰められる爲であり、又お父さんの亡くなられた後は決して彈奏せられなかつたと言ふに至つては先生の御孝心及びことの本末を誤られない思爲に對して深く自ら額たれるものがあつた。(因に香川先生の著に靜字元生零話及び續靜字零話があるので見られたら先生の美しい逸話が載つてゐる)昭和九年の正月二日、新年の挨拶をかねて先生の徒然を慰める爲に土原のお宅を尋ねて尺八を吹奏したことがある。その時藝事は兎角亂れ易いものであるからとて座を改め僕を床の間の前に坐らせて先生は正座してきちんとして私に向つて聽かれた。その

時先生が何事に依らず如何に眞摯だつたかと言ふことを深く肝銘した。その時高砂と千鳥を吹いたが翌日先生から一葉の端書が届いた。

五二

昨日の御演奏誠に面白く拜聴致し候。腰折御目にかけて候

ことほきの笛のしらべのたかさこは、その松かさもこもりてやふく

笛竹も君が代いはふこゑすなりさし出のいその千鳥かなで

今ではこの端書も先生の片身の一つとなつて仕舞つた。餘談ではあるが此の話を瀧口明城先生に話したところ藝事に対する安藤先生の崇高さにいたく感激された。僕が此の話をした二三日後新堀の中村剛太郎先生のところへ新年宴會に呼ばれて行つたことがある。その時明城先生もゐられた。いゝ加減に酔つたところへ尺八を持出されたので何の氣なしに一曲合奏した。その時はもう安藤先生の所での先生から受けた肝銘を忘れてゐた譯だ。數日して瀧口へ行つたら奥さんから懇々と注意があつたが冷汗三斗の思がして以後は酒の席で合奏はしないことにして仕舞つた。愚物は過を二度しなくては曉ることが出来ぬらしい。明城先生の御依頼で涙松集の註釋をしてから一層可愛がられてゐたが、明城先生もなくなつたし學問上色々と教へて下さつた安藤先生も昇天の人となつたし自分にとつて重ねの不都合だつた。又社會にとつても大きな損失だつたと思ふ。

御病氣になられる前何か記念に書いて貰ふ約束でお願いしたところ快く承諾せられたが間もなく藥餌に親む身となつて他界せられて仕舞つた。返す／＼残念だつた。書畫狀にある激勵の文と不思議なことに先生の大書の横額が親戚にかゝつてあるのを貰つて先生を忍び自分を磨く片身の品とする。

逝く人を導く色に夕螢

白無垢に逝く人送る衣がへ



生徒作品

我が家

一年 大島 宰

統營港の内灣を前にした我が家は、小高い山の上にある。夏は涼しく、冬は暖いので自分ながら好い場所だと思つてゐる、然し一番困るのは數十の石段がある事だ。小學校時代に歸宅する時、重い足をひきづり／＼して、又此の段を登るのかと思ふと、いやになつた事も幾度もあつた。

前庭は近頃になつて涼しさうな花が咲き亂れてゐる。

僕は夏の夕方が一番好きである。庭一面に水をあびせかけ其上に玩具の漬水を見ては、夕焼に色づいた西の山の空を

眺めるのも、又一段の涼しさを増す。

冬は庭全體銀世界となるが、此の様な日もいつしか過ぎて、美しい春花朗かな春が我が家へ訪れて我等の心を慰める。斯様にして我が家は四季とり／＼の自然の恵みを肆にしてゐる。

故郷

一年 浅原 榮

故郷を遠く離れてこそ始めて故郷の有り難さが分る。僕は故郷を去る何百里といふ程遠い此の萩の地に來てゐるの

である。

僕は朝鮮で生れた。然し純然たる日本國民の一人である。内地に來ると時に朝鮮人／＼と馬鹿にするかのやうな聲を聞くことがあるが、斯様な排他獨尊的な言は、天孫民族の襟度の大を表す所以ではない。心すべきことだと思ふ。此の頃は漸く萩になれた。然し毎日／＼故郷のことを思はぬ日はない故郷のあの山このことを思へば、又次の山が浮んでくる。かくて次から次へと聯想は続く。早く嬉しい冬休は來ぬかなあと思ふ時がたま／＼ある。やはり懐しい郷土は忘れ難いものである。

海水浴

一年 元木朝徳

海へ／＼出た、／＼泳ぐ人も泳がない者も、紺碧の波を慕つて。今水郷、萩の海は夥しい人の海だ。夏場限りの人の山だ。まるで映畫で見る南國の土人の部落のお祭の様だ。渚は眼の届く限り遠く、水平線に白帆が二つ三つ。

沖の漁火も霧につゝまれ、天地唯寂寞として梅雨の世界を物語る。

そして此の梅雨の後は、あの暑い眞夏の日が聯想される。

夏の朝

一年 金子泰

柱時計が五時を打つた。雨戸の外で蟬が鳴いてゐる。昨夜は暑苦しかつた故か。見れば弟は眞裸だ。蚊帳の外の暗い隅では蚊がぶん／＼と鳴いてゐる。そうつと起きて外へ出た。

清い冷い朝風を吸ふとまるで生き返つたやうな気分がするので、思ふ存分に深呼吸をした。

裏へ廻つて見ると、畑は一面しつとりと露で濕つて居る。とりわけ里芋の葉には大きい白い玉がころ／＼して、時々ばら／＼と下葉にこぼれる。顔を洗はうとして小川の岸まで行く間に、着物の裾が大分ぬれた。すき通つた水の

「おい早く飛込めよ。」「よし」僕は砲彈が水中に落下する様に飛込んだ、僕はどうかだ鮮かだらうと鼻うごめかして言ふと、友は「いや實に上手だ。まるで犬が飛込む様だ」と微笑する

ビーチパラソルの下で海を眺める人、ボートをあやつる人、最も楽しい、海水浴は正に最高潮だ、我等は海國男子だ。さあ又飛込まう。

梅雨

一年 池部涉

或時は怒り又或時は歎きそして我が住む下界に降り來る雨が梅雨なのだ。どんよりとした黒雲と共に六月の青葉がくれに見える桃の實も色づいたしと／＼と初夏の青葉に何か長い歎きの私語を囁きかけるかのやうに降りかゝる。

此のしと／＼とした梅雨を待つて百姓は野に山に梅雨にぬれた青葉を刈る、母が家に在つて可愛い我が子に温い恩愛の籠つた着物を縫ひ與へるのも梅雨の中だ。

底には綺麗な小石が轉つて、目高が五六匹浮いたり沈んだりして居る。ばたつと足音を立て、見たら、あわて、何處かへ逃げた。川の岸ではもう小父さんが草を刈つて居た。磨きたてのよい鎌と見えて両手の動くにつれてさく／＼と氣持のよい音がする。

夏の朝

一年 山根松壽

波は爽やかな朝を讃へるやうにひた／＼と渚を洗つてゐます。冷やかな風は潮の香を一杯含んで頬を撫でてゐます。

網を運ぶ人の聲や、發動機の音がしめつばい露の中から間近に聞えます。

「さあ今日もやるぞ。」といふ希望に満ちた喜びが出船を急ぐ漁村の朝に溢れてゐます。

父を見送りに出た少年は其の逞しい身體を見て、早くお父さんのやうになりたいと思つてゐるのでせう。一隻又一

隻準備を終へた發動機船は、つき／＼軽快な音を立て、沖に消えて行きます。

一日遠足

一年 町原俊雄

急に焼きつく様な日の光が、野や山を照りつけた。遠くの青い連山の向ふの入道雲がむく／＼と動き出したかと、思ふと暑い空気が山や野や村落の上を流れて行つた。

白く續いた街道には、旅人の姿も見えなかつた。唯僕達の隊列が、真すぐに進んで行くだけであつた。僕達は何處までも歩いて行つた。

川島の葉櫻を見ながら、菓子袋を開いたのは午前十一時頃だつた。川岸で水に遊ぶ人達、木に登る生徒、話し乍ら夏蜜柑の皮をむく生徒、皆のさわめきも何となく楽しさうだつた。

松下村塾で充分に松陰先生の偉徳を慕ひ、更に誕生地に達したのは丁度十二時。町のサイレンが微かに聞えた

らう。足がうつすらと、赤くなつてゐた。何だ夢だつたのか。

病の一日

一年 室田實

痛い／＼と云ひつめて、目には雨のやうな涙を一杯湛へながら、お母さんに連れられて齒醫者の門まで行つた。

この前に一度来てひどい目に逢されたから、どうしようかと思つたが、仕方がなかつた。硝子障子を開けて這入つた母は醫者に「又齒が痛い／＼といつて、夜もよく寝ませるので、今日も又つれて来ました。」と言つた。その時とんで逃げようかと思つたが、まあしやうがないとまご／＼してゐた。胸は早鐘を打つたやうにドク／＼とだん／＼／＼早くなつた。院長は「さあこちらへ。」と言つた。

腰掛に坐つたものゝ「何が何やらさつぱり分らなかつた醫者は「ア、ン」と言つて先の光つた物で齒に挟まつた物でも取るやうに痛い齒をよけコツリ／＼とつゝいた。

五六

萩市街を眼前において辯當を開いた。丁度生きた海を、食ふ様に感じた。吐く息と共に轉び出る自分の希望が、日本海の上を真直に進んで行つた。

誕生地を降り東光寺へ參詣して、我等一行は松本橋で解散した。沈んだ太陽の名残りが西の空に漂つてゐた。

夢

一年 弘中六彦

「ざぶん」といふ音が突然松本川の方から聞えた。附近の人でも、泳いでゐるのだらう。僕も俄かに暑さを感じて泳ぎたくなつた。すぐに着物を改めると、もう家を飛び出して、川の方に行つてゐた。

川の方を見ると多くの人が楽しさうに騒ぎながら、あちこちらと泳いでゐる僕もすぐに着物を脱ぎ捨てると、川の中にざぶんと飛び込んだ。

「痛い」。僕は思はず飛び起きた。見ると弟が僕の傍に笑ひながら、立つてゐた。足でもつねつたので痛かつたのだ

雨の日の教室

一年 石光正芳

教室の隅の方で鉛筆を削る音が忙しく、陰氣な空気をふるはす。ぽとん／＼と水溜に落ちる雨垂の單調な音。先生の顔が薄暗く見える。黒板の上の字がぼろ／＼と白く浮き出て跳つてゐるやうである。

先生も生徒もいやに黙りこんではづまない。先生が静かに質問される。それにつれてあそこ此處から「はい」「はい」「はい」と何本も手が上がる。僕もそれにつられて上げる。先生が指さされる。皆の顔がさつと緊張するが直ぐ又もとの静けさに返る。ぽかんと何思ふとなく窓外を見てゐるものがあるかと思へばペンを持つ手を急がしく机の上に見つめて何か書いてゐる者もある。先生は本をじつと見つめて何か考へてゐらつしやる。「あゝ」と誰かど内證で欠伸をした。

秋雨は何時止むともなく、びしよ／＼降り續けてゐる。

五七

防空演習

一年 守重 哲真

けたたましいサイレンが一分間。鐘を敲く騒がしい音。上級生が部署に就く雑音。今までの静肅さは忽ち破られた。僕等の教室も俄かにさは／＼し始めた。

警報班が「皆講堂に避難せよ。」と傳へた剣道部の者は手に／＼面を被り他の者は手拭などで口や鼻を覆つて講堂へ避難した。途中瓦斯地帯があつて晒粉がそこう一面に撒いてあつた。講堂の中はむさ苦しかった。

やがて爆撃機が去つたのか空襲解除のサイレンが鳴つた。間もなく授業も終了したので家路についた。途中田町の所で青年學校の人達が瓦斯彈の炸裂によつて濛々と擴がる煙の中で勇ましく防毒作業をしてゐた。翌日長州や大毎の山口版を見ると萩市の防空演習不良とあつた。何と情けない文句ではないか

旅行

一年 柳井 茂

「ガタン、ガタン」カーブを曲つた動搖の烈しさに頭をいやといふ程打ちつけて眼がさめた。眼を半分開いて暗くなつた窓外を見ると、もう「あいらぎ」である。「よく眠つたなあ」と兄さんが笑つた。

汽車はやがて、「下關」についた。人混みの間を通つて連絡船の待合所で待つた。やがて乗込むのだ。「いやになつてしまふなあ」と人の多いのに兄さんがこぼす。やつと事で連絡船に乗り込んだ。

船の中は人の息でむつとしてゐた。僕は氣分が悪くなつたので甲板に出た。門司と思はれる邊は電燈の光が美しく輝いてゐる。暑苦しい船室に下りて人の寝てゐる小さな間を探して小さくなつて横になつた船の動搖に、弱い僕は參つてしまつた。ふら／＼する頭で朝の甲板に出た。懐しい釜山港、山が……「ビー」と汽車の聲がする。

下船する時、足がふら／＼した。

「特急のぞみ」に乗り込んだ懐しい禿山、白い鮮人の服廣い座席、僕の胸は歸省の樂しみで一杯だ。

何か胸につかへた。「あつ」と思つて窓の外に苦いつばを吐いた。何も食べないのではくものがないらしい。「弱いなあ」と兄さんが笑つた。又何時の間にか、うと／＼と眠つてゐた。再び眼のさめた時には「秋風嶺」に着いてゐた。「もうあと一時間」だと兄さんがいふ。胸の苦しさも歸省の喜びがごつちやになつた。うつら／＼する頭に父、母、弟の顔が浮ぶ。

萩の春

一年 池田 勳

櫻の花も何處かに姿を消して蓮華、タンポポの盛りとなつた。

縁先きに腰を掛けて庭を眺め渡せば白い椿の花が緑の葉の色に映り合つて美しい。畠には胡瓜や西瓜の苗が植えて

ある。隅の柿の木はみづ／＼しい薄緑色の芽をふき出し始めた。どの木もこれより葉が茂るといふ賑やかさが籠つてゐる。

ぽか／＼とした温い日を體一杯に受けて、芝生の上に横はると、何となく眠い様な氣になる。何處からともなくブーンといふ蜂の鳴くのが聞え、春は本當に長閑である。

菊ヶ濱に出て見ると、遠くの島や山は霞に包まれて、紫色をなしてゐる。ざあ／＼と磯に打よせる波はさながら春の喜を歌ふ様である。

田の道を歩くと、畠には黄色の菜の花が一面に咲いて大層綺麗だ。田に生えてゐる毛氈を敷きつめた様な蓮華草も菜の花に負けない程美しい。其の外は青々した草や麥が生えてをり、春の田畑は誠にのんびりとしてゐる。今まで冬籠りをしてゐた蛙もそろ／＼這ひ出し、池や沼にはおたまじやくしが眞黒にかたまつてゐる。

飛行機より下を見ると紅黄緑の三色でもつて描かれた一幅の繪の様な田畑は、地上で見るとより尙更綺麗である。

夏の朝

一年 伊東泰治

まだ消えない月影を踏んで、あちら、こちらを散歩する河に出る。冷い朝風がひやりと頬を撫でて、氣持のよい朝だ。

天地はまだ夜の幕に銷されて、空には星があそこゝと一つ二つ黄色の光を投げてゐる。草葉の白玉が光り出すと金剛石のやうな星は、清らかな風に一つ二つと消されてゆく。

東の空が大分白んできた。農夫が草取器を肩に、茶瓶をさげて田に行く。

日は東の山を、離れて、光を天地に投げた。今日もよい日和であらう。

暑

さ

一年 山崎正一

太陽が空の真中に來ると、我々は苦しうな吐息をする

きながらゆれてゐる。背後の墨染の濃い松蔭と月の晃々と光り輝く空と清らかな水とは實に好い對照をなしてゐる。

此の光景こそ月夜のみ有する美の一ツである。

何といふ明るい月だらう！

仰げば松の葉々々が白金のピンを數ふる如く讀まれ、俯むけば砂には又一葉々々の影が黒く鮮やかに讀み得られる。松の幹にもたれて、しばらく其の景色を眺めてゐると何とも云へぬ美感が心の奥底から湧いて來る。

静かな田舎

二年 中村大十郎

朝朗かな鶏の一聲に床を蹴り、日西山に没する頃、長き夏の勞動を終へ夕飯の團欒に就く平和境の氣分はあらゆる惱を解き、すべてを解決して行く力を持つてゐる。

四方の連山を越へれば物騒がしい都會の雜音が恐ろしい悪魔の様に聞える。

平和境！ 乳と水の流るゝ星よ！

六〇

そして往來は焼けるやうに熱し遠くから近くへと水屋や金魚賣の聲が響く。

アスファルトの舗道に戯れる子供等の額からは玉のやうな汗がにじみ出てゐる。家の中に居る男は熱帯に住む土人のやうな裸體で色の黒きを誇り、人々があふぐ團扇の手の動くのも忙しさうである。

空にはむく／＼とした白雲が太陽を背にし大地をじつと睥睨して立つてゐる、

打水をする音、電車の響、總てが酷暑を物語つてゐる。眞夏は今が頂點である。

月夜の美感

二年 坂本 淳

何といふ良い月夜か？

雲一ツ無い空にのみ照るかと思へば水中に天あつて其所にも月は玉の如く光つてゐる。又何といふ清い水だらう！その清い水の面に月は白金を鍍ばめた如くきら／＼と輝や

村はだん／＼と發展して行く、然れど、都會の風は流れ込まないだらう。

村民の皆が堅き信仰の下に活動してゐるから……。

其の日村の水車はくるり／＼と廻つてゐた。盡きせぬ村の歴史を語り、傳説多き此の村の首を語りながら「若物よ働けよ」と！

秋

二年 森重龍馬

炎熱焼くが如き夏の暑さも過ぎ去り「天高く馬肥ゆる秋」となつた。

秋日屋外に出づれば、金色の波の彼方より吹きくる風は快く頬を撫し、勇ましき百舌の聲は、秋酣なることを告げるが如くひびく。すい／＼と飛び交ふ蜻蛉の影もいとのどかにして、里芋の大なる葉のゆら／＼とゆれるも、又心地良し。月光清く庭の面に輝き、虫の音滋く聞ゆるも、又秋の表徴なり。

六一

一點の曇り無く澄み渡りたる秋空は、實に我が大和男子の表徴として、朝日に映ゆる山櫻と共に擧げられしは、實に清く氣高く曇りなき故なるべし。

秋、此れこそ我が身心の鍛錬に修養に努め秋空の如き心を持ちて、此の非常時國家、否世界人類の爲に盡さねばならぬ。

月夜の美感

二年 伊東義男

風涼しげに稻の葉をそよがせてゐる。其の後の小高い松林の向ふに眞圓い月が繪のやうに昇つてゐる。其の月が松の木々の梢の間から美妙な光線を絲のやうに林の中に亂して小暗い樹下道を照らし、又穩かに靜止した夜の河水に兩側の倒影を驚くばかり鮮明に映してゐる。

月は大分上つてきた。あかす其の明鏡に瞳を送つてみれば雲の行く脚も速く青冷めた明鏡の光がいかにもこれを押すかのやうに見える。あゝ、その美しさ殆ど譬ふる言葉を

知らず。

萩の上葉を撫でる風、月光を帯びた白いうねり雲、むくく動く入道雲、その下の山の松、満月その對照の雄と美、實にくく月夜は夢の世界だ。天國だ。

秋の朝

二年 白石明

空は青く又高く、風は清く又滑らかに右の窓から靜かに又靜かに白いカーテンを動かして左の窓に越えて行く、秋だ、秋だ秋の朝はもの靜かだ。

彼處、此處の梢で屋根で鳴きかわす小鳥の聲が輝き初めた日光を横ぎつて「ちりり、ちりり」と聞えて来る。合間々々ペンが紙を撫る音がかすかに耳に入る位だ。そばの校舎は大きな蔭を地に投げ、ちぎつて投げた様な白雲はあの空を模様づけて居る。神秘の秋だ！校内の木々も城山の木も身に着けた着物をぬぎ初めるのももう近い内だらう。

夕の河岸

二年 山田松華

四人を乗せた小舟は何時しか橋本川の真中に乗り出して居た、水は薄氣味悪い程青くどんよりしてゐる、渡し舟が勞れた姿に客を一人乗せて船頭も重さうに棹を取つて居る點々と明りの着いた玉江の家々が暮れて行く、ゴーンくと暮れを告げる南明寺の鐘が淋しく響く。

川口の空には晚霞が棚引いて夕日に映へて其の美しい光を常盤島の松に投げて居る。「ポツ」と貨物列車が重たい足を引きづつて「ゴトゴト」と過ぎ去つた。

海邊の朝

二年 山本一夫

東天仄かに白み、折からの暗い幕をぬぐひ去る海邊の朝山の一角に現われ出でたる朝日は五時に未だ早き時を神々しく神秘の限りを盡くしたる如き姿を雄々しく現はし始め

る。

空も海も一體となりて續きし如く爽かな處に朝の光により一層色どられ其處には赤紫、點々として色づく間を始めの青は色鮮やかにくつきりと見え初める。

東天正に紅なり。沖ほのかに浮ぶ白帆此れ又雄か？否絶美か其の燦たる中に描き出されし舟こそ自然の粹をあつめて美の極なり。

雄大なる太陽も此の朝に於ては「神秘なる紅の魂」の語によつて盡く。

色爽やかに雄々しく、勢凄まじくさし出づる朝の美、凜として輝けり

海邊の朝就中晴天に於ける朝こそ我等の心を爽快ならしむるものにあらずや。

秋の夕暮

二年 田中貞雄

うち續く屋根瓦は金色の波の様に光つて見ゆ、一片の雲

もなく晴れたコバルト色の秋の空も、夕日のために赤色に染まつた。

向うの畑に、夕日を浴びながらしきりに働く老農夫見ゆ「坐せる農夫は立てる紳士より尊とし」と。言つた偉人の言が思ひ出さる。一般に農夫は朝は霜を踏み夕は星を背にして歸へつてくる一鍬々々打ち耕やさるたびに、赤黒色の土はくだけ行く、

山の端にかゝりし日今は落ち一面淡黒色と化した、あちらこちら見る間にさきの農夫も去つてしまつた、月は東天に上り清らかな光を投げつけてゐる。

秋の夕暮

二年 内山 博

發止と打込んだ鍬の後に深く黒い穴が見える。暫し鍬の手を休める。

今迄働いた汗の結晶はうね／＼と黒く續いてゐる。自分半裸體で今斜陽を浴びて立ち、その影は黒く長く……、

でて轉づるが如く、我は更に歩を進めり。

「花に清香あり月に影あり。」

妙なる音又一段高く響ける時、我が耳は後方の二階家に注意を拂ひぬ。げにも流れの音かと怪める音は此の二階より洩る、「フオノグラフ」の音なりき。

其の人達は我の境遇を知つてか知らずでか。

「無情の夢」を浴びせる。

我れは暫時我を忘れて耳を翫て、居りしに男女の影を見るに至つた。

空には星猶強く光りて、水の音ちよろ／＼と響く。

夕立

二年 石田 光美

ぼつり、と一つ庭の池に音を立て、波紋が段々擴がつて行く、空は綿を引きちぎつた様な雲が、西から東へと走つて行き、其の切間から、にこ／＼と太陽が微笑んで居る、飛んで出て着物を入れる、と同時に涼しい風を前觸にさあ

冷々した氣の肌を掠めるのを感じる。

燒けた西の空其の美妙壯嚴な様は夕陽に映ゆる周圍の木々建築物、死の如き靜寂と相俟ちて一大神秘境に入つた感じがする。

想は走せて遠く雲中に飛入り、凜然たる姿を現して空中を飛翔するかと思えた。

やゝ經ちてはつと吾に歸れば其所には呆然とした自分を見出だし、薄暗いカーテンを閉ぢ終りて、身にそゞる寒さを感じた頃であつた。

鳥の聲が微かに耳に入つた。

月夜の美感

二年 水津 明

「月無き空に星光る」

河岸に立ちて、淺瀬になる小さき流れの音に耳を澄す。

流れの音やがて神のすさびの如き美妙なる音色と化す。

高く低く、細く太く、金鈴を振るが如く、黄鳥が谷間を出

／＼と屋根も大地も破れん許りに降る。「土砂降り」とは此の事であらう、野菜島を見れば先日芽を出した許りの白菜が、見る間に、土まびれに成つて行く然しそれも餘り長くは續かない又さつと遠山目指して走り去る。夕立！夕立だこうして自然に接すると夕立の語をしみ／＼と味ふことが出来る。

草木は元氣づき、折りからの微風に庭の青桐がさわ／＼と揺る如何にも涼しさうだ、池の鯉は水面に浮び来る遠く山々の霞は空へ／＼と昇つて行き、一時我々に夏の苦勞を忘れさす。「良い潤がしました」「ほんとうに……涼しくなりましたね」と此處彼處で夕立讚美の聲が聞える。

秋の夕暮

二年 岡田 清

僕は阿武川端の近い松原へと歩を進めた。何處から下つて來たのか、底の浅い舟に船頭を乗せ、流れるともなく流れる阿武川の面を通りこした。観音院の方に目をやればは

や黄色い霧の中に浮んでゐる。何處でなるのかおぼつかない汽笛の音が僕の耳に聞えてくる。その時は夕日は落ちて夕暮の幕が鎖されようとしてゐる。その時黒蜻蛉が一二匹河の面をかすめるやうに飛んで行つた。僕は砂洲より腰を上げ我が家へと歩を進めた。僕は歩みながら歌を歌ひつゝ松原を通り越した。その時東方の山より月がぼかりと浮び上つた。月光は河の面を照し我が顔をも照し此の地球上の何物をも照らすやう。近くで蟋蟀がなきだした。

夏の夜

二年 中島 淳一

ふと勉強の手を止めて外を見る六時頃だらうほんのりと暗くなつて烏がカー／＼と鳴きながら啼へと歸つて行く電燈のスイッチを切つた、暗闇から明るみへ出た時の様に目が眩ぶしい。

眩を立て、ちつと外の風景を眺める、今はもう先程より

も大分暗くなつてゐる。

窓越しに見へるお月様は半形なれど其の美麗なる容姿を雲の間からボツカリと現してゐる。又お月様をかこんで五ツ六ツのお星様がルビーの様に光つて点在してゐる。

涼風がすうとは入つてきて勉強に疲労した頭をさつぱりとさせる。多くの小虫が電燈に集つまつて来る。可愛想な彼等は電燈の下の水入の中に落ちて死んでしまふ。

又窓下の庭では夏虫が今を盛りとありたけの聲をはり上げて歌つてゐる。誰かゞハーモニカを吹いてゐる庭に歌ふ虫の聲或はハーモニカの音は僕を夢路に誘ふ子守歌の様である、机にうつぶしてゐるとついとろ／＼となつてしまつた。

秋の夕暮

二年 阿武 弘愛

庭の櫻の葉がほろ／＼と静かに散りゆく秋の夕暮。遠くなり渡る山寺の鐘の音は淋しい秋の夕暮を語り。空には夕

燒雲が漂ふて二三羽の鴉が鳴きながら飛んで行く。一陣々

々と吹く風は軒下の風鈴をならし淋しい秋の夕暮を歌ふ。

淋しい芒の野道を行けば風ふく度に白い穂はあたりに飛びて、野を飛び廻はる蝙蝠は、虫と思ひてかそれを啄ばむ天高く馬肥ゆるの秋の一日も静かに暮れ行きて、蝙蝠だけが飛んで行く。あゝ静かに暮れ行く秋の一日よ！

夜の霧

二年 波多野 保

彼方から此方から濛々と霧が立罩めて来る、野山を罩めて音無く襲ひ来る。眼前の電柱の火がぼんやりと微かに見え蛙の聲のみ寂しく響く、ほんのりと浮立つ人影彼は寂しいのであらう口笛を吹きつゝ姿を消す。

薄暗く散ふ夜の帳の中をコツ／＼と聞えてくる靴の音コロリ／＼蟋蟀の聲一匹鳴けば其れにつれて他も鳴く時に霧が過ぎ行く。

静かだ突然静けさを破る自轉車のベル其れも亦霧と暗の

中に吸はる。

人が石を川へ投げる石も寂しくとぼん／＼と聞ゆ。

「オーイ」「オーイ」人の呼び交す聲二度で止む。彼も寂しからう向の山の中腹にチラリと火が見えた。多分辨天様の御堂の火だらう。

蘭

三年 佐伯 哲郎

蘭、私はそれを何んだか厚つぽい、それに雪の様な純真さと言つたら少しもない、支那人を思はせる様な花だと信じてゐました。

私の家の庭に、その脈の縦に通つた、葉ばかりの植物がありました花は一度も付けた事がありませんでしたが、その厚い葉に、何んだか親しみが持てましたので、時折水を遣つてゐました。

或朝、それは夏でしたが、私は、朝の太陽の投げる心地よい光線にひたつて、涼しい空気を腹一杯吸つて居ました

その時の私の心は朝陽に戯れてゐる雀の心でした。唯欲も希望も、なく今！今を祝福しながら、瞬時に、しかもその瞬時を楽しみながら生きてゐる雀の心こそ、私の心でした。

深呼吸をし終へた時、私は庭の隅にきれいな花がたつた一輪、多くの厚い葉に囲まれて、しほらしさうに、朝露に濡れて咲いてゐるのに気が付きました。それは今迄見た事のなかつた花でした。しかし、それを見た瞬間私は深い馴染に會つた様に感じました。「おい」と聲をかけてやりた

い程でした。私はその花の前にしやがみました、そしてそれに見入りました。

僕等の村の自動車

三年 白井輝夫

僕等の村にはほんの最近から黒塗の所々ペンキの剥げた舊式のフォードが萩から通ふ様になつた。その自動車が僕

等の村へ入つて來るといつもおきまりの様にガタ／＼とぼろくさいエンジンの音を立てながら重そうにラツバをプウ／＼／＼と鳴らす。そうすると村の人々は皆さま／＼な姿で道に出て見る。子供等は自動車のあとのバアやタイヤにぶらさがつてあぶない事も思はず喜び勇んできやあ／＼云つて笑つてゐる、人がとめても申々おられない、とう／＼運轉手がおりにきて叱るとやつとおりるが又すぐのる。中には村の若い衆がラツバをならさせてもらつてさも得意そうな顔をして變な眼つきでまわりの人を見廻してゐる。しわのよつた爺さんや婆さんは不思議な怪物でも見る様に年寄りらしくもないとんきような聲で話し合ひながら自動車のまはりを見て歩いてゐる。そうしてゐる内に例の自動車は元氣を回復した如く勇ましくエンジンの音と共にくさいガソリンの匂をのこして又もや山又山の奥へ隠れて行く。そこに居た人々は云ひ合した様に鼻をピク／＼うごかせながらさもよい臭ひだなあと云ふ風に顔を見合つて再び前の仕事に取りかゝる

可部

三年 野村男次

日の暮方小蒸汽が可部へ着いた時馬鹿に淋しい町だなと思つた。浅橋には旅の商人らしい者がたつた一人船のつくのを待つてゐたばかりで、其の他に二人の荷揚人夫が夕闇の中に立つてゐた。水田の曲つた細道の向方にちら／＼と灯の見えるのが町らしい。

浅橋を出て堤へ登る。自分を今廣島より運んだ船が上可部の方へ向つて水を騒がせながらだん／＼遠くなつて行くのを見送つた時には、何んだか暗い淋しい土地に一人置きざりを食つた様な氣がして心細かつた。

船尾に附けた赤い灯が全くかくれてしまつたのを見て旅館の方へとぼ／＼と歩いて行つた。二、三時間の後湯に入り夕食をすまして宿の二階の欄干にもたれてからすゞんで居ると下の街道を姉らしいのが三味線をひき妹と弟と思はれるのが歌を唱ひながら一軒々々まわつてゐる。宿にも入

つた様だが叱られて追出された様だつた僕は可哀想に思つて、二十錢玉を紙に包んで二階よりなげてやつた。やがて三味線の音が夜の町をだん／＼遠ざかつて、行つた時に「ザア／＼」と夕立の音がして、前の堀割で「ギーギー」と櫓の音がきこえた。

散髪屋の鏡

三年 植村一良

散髪屋の鏡と云へば數個の電然に燦然と輝く夜のクインを想像する、然し又みすぼらしい鏡も面白いものだ。みすぼらしい散髪屋其に似つかはしい鏡、あはれにも破損してゐたが丹念に、綺麗に硫酸紙で接いであつた。鏡の前の純白の百合はすゞけて茶色がかつた鏡に清楚な姿を映してゐた。それに映る愛嬌の良い親爺さんの顔が朗かに映つて居るのも面白い對稱だつた。僕はその貧しさに何となく親みが持てた。何とも云へぬ感で鏡へ向つた。歸りにちよつと振り返つて見れば三十燭の電燈の光が名

残を惜むかの様に淋しく光つてゐた。

祭のあひやわ

三年 田邊 武彦

秋空高く晴れて、稲穂も黄金に波うつ、豊作の喜びの内
に村祭がをとずれる。鎮守の森に轎が秋風にはた／＼とな
びく、神殿は一層掃き清められて秋の新鮮な供物が三寶の
上に整然と積みかさねて上られる。小砂を敷きつめた神苑
は掃目も新しい。御獻燈の灯提が列んでゐる参道の兩側に
は祭禮をあてこんで集つた商人が店を造るに忙しい。荷車
をひつばつて来る者、果物のあき箱を置いて戸板をなげた
簡単な店を擴張終つて人々の手傳をして居る者、今からふ
し面白く客ひきの聲をはり上げて威勢を付けて居る。神殿の
厳かさに引かえてそう／＼しい。見世物、赤い天幕、サー
カスの高いやぐら、屋根に看板を上げたり、テントを張つ
たりしてゐる。赤や白地に太々と何々曲馬團と書いた轎が
魅惑的に風になびいて居る。村の人達は早目に仕事を切上

七〇

げて汗と力の賜の豊作をめでつゝ團樂のまつ休養の我家に
足もかるく歸つて行く。魚屋さんは荷を全くからにしてか
るがると歸つて行く。夕食には大きいまんさくが上る事だ
らう。父や兄をまつ家は母の戦場だ、澤山のごちそうが出
来る小供は夢だ、用も無いのに母の廻りにまつはり付く。
晴着は美しい、空は夕暁、明日も晴だ、つるべ落しに秋の
日が落ちると獻燈に、軒の提灯に火がつく軒を並べた店も
明るくなる神殿には燈明が上る嚴な御宮太鼓がなる、サー
カスの樂隊の中に商人の客ひきの聲がやかましくまじる。
樂しめ！今夜から明日一日の村祭だ！祭の夜はふけて
行く豊作の喜の祈りもすんで家内安泰の色も漂ふ。樂しさ
を充分あじはつて祭も明ける、祭の前にひきくらべて一種
の淋びしさが来る田に出る人達も昨日の夢がある。鎮守の
森が秋風に淋しくなる。
掛小屋や露店の塵芥が淋しい中にちらばつて居る、皆跡
かたすけに急がしい。晴着もしまはれる、商人の次の祭を
もとめて旅立つ姿があはれである。又村中に一日の生活が
始まる。

溺れた時

三年 井關 正次

僕は元來金槌だ。つまり泳げないのだ。毎年々々決死の
覺悟で濱にいや／＼ながら人に誘はれて行く。今年の夏も
覺悟を定めて濱に行つた、と必然として起るべき事件では
あるが、又偶然に起つた。勿論溺れたのだ、大波がざつと
來たその瞬間あつと呼ぶ間もなく目は青い氣味の悪い海の
水そして鹽からい水それがまぢかまへてゐた様にのどをお
しこめる様に通るその苦しき、その時もう此の世と別れる
のかと思ふ氣や、助かりたいと思ふ氣や、其の他色々の種
々様々な氣持が心で争ふ。其の時誰か僕を助けに來る。本
當に佛の姿佛の聲の様だ。感謝の念がつかれた體の奥より
出る。これが溺れぬ人には味はれないだらう。僕の溺れる
時の氣持だ。

小學校

三年 杉山 純一

臺灣から歸つて既に四つの春を送つた。然しやゝもすれ
ば臺灣の事が頭に浮かぶ。
僕の初めて入つた學校は清水尋常高等小學校である。
清水は臺中州のあの大甲帽の出る所で本島人が多い故か公
學校は立派な二階建に反して小學校は平家のたつた一棟で
ある。僕はこの小學校時代を考へると、苦笑を禁じ得ない
この小學校は生徒八十四名先生は校長先生夫妻と若い女
教員だけである。それに教室は三つ、しかも第三の教室の
三分の一位の所に壁がありそれが教員室である。第一の教
室に一、二、三學年が、第二の教室が四、五、六、年最後
の教室が高一、高二である。そして式日には第一、第二の
教室を合せて式場と早變りするのである。授業は一時間に
三つの學年を教へるのだから國語の時間に同じ教室の五年
の歴史を聴くといふ風であつた。が兎に角統整がとれてゐ
る。かゝる教室で僕等は先生の故郷新潟縣の雪國の話を珍

七一

しく聴いたものだ。

こんな學校は臺灣にはまだあるであらう

祭のあござき

三年 澤本良秋

もう後二邊寝るとお祭だよと母から言ひ聞かされて彼は飛上つて喜んだ。さうして座敷中飛び廻るのだった。

然し今の彼はそうでなかつた。明日が御祭だと言ふ晩になつても彼の心は一切おどらなかつた、たゞ氣の抜けたサイダーの感じを味ふのだった

彼は幼時の心持に今の自分を置かうと努力したがそれは無駄だった。

人！人！それは鳥居前の一寸した四ツ角で渦を巻いて拜殿へと客を呼ぶ聲や参拜者の下駄の音等に色付けられて流れてゐる。全く人の渦……。遠くでサーカスのラッパの音も聞える。

参拜者の群の間で彼は一人の少年が燈籠にもたれ、拜殿

をして、「あゝ」と言つた、その時の顔青柿の様に、眞青であつたらうと思ふ。

歸るまで

三年 田中大資

學校に來て學課を學ぶ時は一時間が我等にとつて大變長い様な氣がした。しかし遊んでゐると夢の様に月日は立つてはや四十日間の樂しかつた夏休は今すでに終りに近づいた。又萩の地に留學する様な氣で汽車にのつた。ぼーつと汽笛一聲汽車が動きだした時にはいひしれぬ悲しさが胸にこみあげて涙が出た。そして段々と汽車がホームを出るに隨つて涙が澤山で、手をふつてゐる父母友人の姿がにじんで見えそして汽車が急カーブして父母友人の姿を僕の目から奪つてしまった。又一年振りでないとおへぬ故郷の山川がしだい／＼に遠さかつて赤い夕日ははや滿洲の曠野に没せんとしてゐる。行きとちがつて歸りは實に寂寞の感を感じた故郷の事を思ひ續けてゐる間に我等の急行「光」はぐ

七二

へ顔く人々をじつとながめてゐた。寂しさうな目だった。彼はそれを見て何故か祭の済んだ時の事が頭に浮んだのであつた、唯々拜殿も燈籠が此の間の騒ぎはもう忘れたと言つた様な、あまりにも寂しい光景を……

治療を受けるまで

三年 土屋康紀

いたい／＼と思ひきつて、目には雨の様な涙を一杯たへながら、父につれられて、齒醫者の門まで行つた。〇〇齒科醫院と書いて有るガラス障子を開けた。入口に下駄の多く並んで居るのを希望してゐたが、生憎一つもない。すぐ室へ入ると父は醫者に「齒がいたい／＼と言つて、夜も寝ないので、つれて來ました。」と言つた。僕は跳んで逃げようかと思つたが、仕方がない。まご／＼してゐると、醫者が「さあ、こちらへ。」と言つた。腰掛に坐つたものゝ何が何やらわからぬ。たゞ、横にある器械の青白い光と胸の早鐘とが感じられるだけであつた、醫者は平氣な顔

ん／＼と走つて安東についた。安東では安中の友人や姉が見送りに出てゐてくれた。大變うれしかつた。話中に夢中の間に發車は迫つた。いよ／＼滿洲とさようならだ。安東を去る時も泣けて／＼仕方がなかつた。鴨綠江を渡つてから日はくれた。僕は日中の別れを思ひながら京城まで一睡もしなかつた。京城に着いた時ねむたい目をこすりながら親類の人とあつた。京城を發車して汽車はしばらく京城の市中を走つた。赤や青のネオンサインが目にはらついた。郊外を出た汽車は暗黒の中を走つた。空には銀の星や、月が滿天に輝いてゐた。この月をやはり父母も見ただであらう朝になると汽車は廣い田圃の中を走つてゐた。暖い夏の光線を浴びて稲はすこやかにのびてゐた。そして山には新緑の林が立ちこめその間に圓形の墓が饅頭の如くならんでゐた。大邱をすぎて汽車はスピードを増して釜山へと向つた。正午近くの夏の日はず日までの曇天を忘れたかの如く思はれてなんとなく僕の淋しさをなほしてくれた。僕は釜山の連絡船に乗つた。デッキに出て見ると水面は鏡の如くおだやかだつた。連絡船中には學生が多くやはり僕の境遇と

七三

同じ様な人もその中にまじつてゐる事と思ふともう淋しく
なくなり来るべき二學期の奮闘を心に期した。動くともな
く動いてゐた汽船は玄海灘で大いにゆれて多數の人はよつ
てゐる様だつた。そろ／＼と日ぐれになり後一時間で下關
着だ。僕は荷物を持つてデツキに出た。一月ぶりの下關の
山々や半島岬が目につつた。ほんのりと下關町が見えて
町のネオンサインが又見えた。二日間の道中無事に内地に
ついた時も又故郷の事を思ひ出した。その晩の夜行で下關
をたち最後のコース萩に向ふ汽車の中で僕は故郷の夏の思
ひ出がちらつて眠れなかつた。

柿

三年 大田 頼久

今まで青い葉の上蔭にこの世を憚る如く、顔を隠してゐ
た柿が漸く赤い顔をのぞかせた。赤くはち切れそうに充實
した顔何んとなく力強く感じる顔、其の柿が姿を現はした
のだから我等少年は新しい喜びが湧いて來た。

七四

秋を秋らしく飾るのは柿が一番だ、そして柿と云ふ字を
見る時に秋と云ふ輝かしい季節の様子をはつきりと頭に浮
べる。活潑な中にもおだやかさがある秋の陽光の中に、つ
や／＼した緑がかつた黄色の濃い丸い實が何とも云へぬ色
合を見せてゐる。其の下に子供等が口を開いて見上げてゐ
る。

紺碧の空は清く澄んでゐる

かはいそさうに

三年 玉 木 博彦

今朝みれば籠のカナリヤが死んで居る。昨日まであんな
に元気で囀つて居たのに。僕を見入つた可愛いあの目は白
く閉ぢ、僕の朝寝を誠しめる様に良く囀つてくれた嘴は硬
く結ばれて居る。柔かい感じを與へてくれた胸毛だけが昨
日のまゝに空しく風に揺られて居る。

昨日裏の叢から取つて來て入れて置いた露草の水色の上
に安らかに身を横たへて居る。嗚呼！その眠はいつまで

も續く事であらう。何か此の露草と離す事の出來ない因縁
がある様である。花は名もない草に生れ出で、一生を終へ
鳥は兄弟の姿も知らないで狭い籠の中で大空の一部分を眺
めるのみで……………

あはれ！ それならばお前の亡骸を水色の露草で飾つて
葬つてやらうそして此の小鳥と此の名もなき花とが一緒に
永く天國で生きて行く様に祈つてやらう。

僕の好きな學課

三年 藤 山 紀元

僕は學課の中漢文が好きだ、中でも詩文が好きだ、何故
好きか、僕の父は元來漢文を相當勉強したものらしい。庭
の隅に建つてゐる壁のはげ落ちた土藏の中に行くとい十八史
略や唐詩選が中央にしまつてあるのが見える。二年の夏休
みに唐詩選を持ち出して父に講義してもらつた。又六才
の頃だつたと思ふ。近所から中學校へ行つてゐた人が休み
にはよく父の前で漢文を讀んでゐた聲をかすかに覚えてゐ

る父が僕にその頃その人の聲を眞似してゐたとよく言ふ事
がある。このやうに子供の時から漢文といふ名前を常に聞
かされて漢文に對して好意をもつてゐたから今でも漢文が
好きだと思ふ。

庭木の剪定

三年 江 原 行 正

雨後の太陽は雨に色艶を増した庭木の葉に和かい光を投
げてゐた。校内の茶室では朝から閉籠つて父は碁の研究に
餘念なかつた。手入せぬ庭木は伸び放題に超スピードで矢
鱈に型を崩して四方八方に擴つて平然と構へてゐる。父は
いたつて趣味本位の道樂者で庭木の剪定と言つた様な細心
を要す仕事は全く無頓着だ。短歌、碁が父の道樂。以前は
植木屋に來て貰つて居たが剪定したと言つても名ばかりで
自分の丹念こめた手入で無くては庭木として趣が薄い木々
の零くの落ちた頃父の許しを受けて僕は剪定を始めた元來
剪定と言ふものは氣にしてゐないのだから僕がしてやると

七五

言へば直ぐ許す。喜んで許してくれた。母が何の爲めに買ったのか此の間からチョコ／＼見受ける剪定鋏を探し出して来て弟に手傳つて貰つて、先づ低いもの躑躅、山茶花檜松、羅、漢柏等の手入、植木屋の様に詳しい手入法は知らないが美しい方がよいので球形、角形、三角形、矩形に段型と言つた様なまるで幾何の圖を作る様な形につんで行つた、長く伸びた枝が何本も一度にパチリ／＼と切り落されて忽ちにして型が出来あがる。鮮かに迅速に出来る心持良さ。鋏のきつぱりした快音が指先の神経を通じてモースル信號の如く脳裏に傳はる。

嗚呼、何と見事に剪定されたる庭木よ。短時間に面積は狭いしかも自分の最上の努力に依つて征服された此の庭内の木々に吾は微笑む急に整頓美に輝いて来た庭木の中で僕は一つ大きな深呼吸をしたが庭の木々は、此の爽快で清涼な雰圍氣に充滿した庭内で僕の姿に怨んだ眼を光らして居る様に思はれて来るのだつた。

夏休み中の思ひ出

三年 新谷勇二

暑い／＼身體をやきつくすやうな炎天の近づいた頃、暑中休暇を迎へた。多くの宿題も何のそのと、非常な意氣をもつてこれに當つた。併し、この意氣込も一日二日は續いたが三日目頃からだん／＼衰へて行つた。

何といつても永續性がなければだめだと思はずにはゐられなかつた、流石に、夏休に入つて暑さは絶頂に達して色々の病氣は流行したが、幸に僕は一度も病氣にはかゝらなかつたことは、休中僕に取つて唯一の收穫で、少々暑さにはへこたれない自信が出来た。

或る時は、木蔭の涼しい下を弟の爲に蟬取りをして昆蟲採集の手助けをして、蟲に小便をかけられたり、炎熱砂を焼くやうな暑さをもつともせずとんぼ取りをしてやつた日もあつた。

だがそれよりも楽しく愉快だつた事は忘れもせぬ僕等バ

休みのある日

四年 小橋安次郎

長い夏休みも愈々終りに近づいて、兄の上京が明日に迫つて来た。

三箇月の休暇で大學生活の最初の一學期の疲れを癒したらしい兄は明るそうに元氣よく明日出發の支度をしてゐる。盂蘭盆すぎの夜とは云ひながらも、まだ暑い、机に向つてゐればペンを持つ手にまでジツと汗ばんで来る。縁側に机を持ち出して暗い空に星を眺めてゐると、いつか良い氣持になつてしまふ。それも束の間で又もや受験参考書と睨つてをしてみると憂鬱な生活が次ぎ／＼に思ひ出されて来る。兄の激勵と指導とで苦しい中にも朗らかに暮らすことが出来たのに、その兄を遠方に送り出すに當つて、これから後の暗い限りない受験生活の想ふと、今更兄を奪ひ去ることが何ともいへぬ腹立しい氣がして来る。

急に明るくなつて来た。前裁の梢越しに降るやうに月の光が射し込んだ。

スケットの同志九名が青海島でキャンプをした事である。

一 靜波の上を快よく速るモーターボート。青海島の中部にあたる十六羅漢の小高い地よりの展望、吾等三日間の假寝屋であるテント。晝は水泳や魚釣や、或は小蔭での讀書、夜は親しき友と話し合ふ楽しさ。そして歸りの汽車。今なほ目のあたり見えるやうである。

併しさうしてゐるうちに、永いと思つた日はいつの間にか過ぎて、休も終りに近づいて愈々宿題の整理にかゝつた中には何も手のつけてゐないものもあり、閉口した。この様にならうと知つてゐたら早くやつておいたのにと、後で後悔するばかりであつた。

あゝ思へば惜しい夏休を取り逃がしたものだつた。

清く澄んだ大空には、赤とんぼが一面に秋を物語るかのやうに、身輕に氣持よく飛んで、草むらからは、虫の音がこぼれるやうになつた。

愈々明日から學校だ。一生懸命勉強して休中の分を取り返さうと思つた。

休みのある日

四年 梅屋 薫

今年夏休みの課外授業に本気で出た。特に英語が少し解りかけた様な気がしたので興味を持って出席した。

所が英語の四日目に、今日は模擬試験をするとの事だ。少しは解つたとはいへ、今迄に英語の應用問題には碌な點をとつた事の無い僕だ。不安だつたが出て見た。答案がくばられた。一高の問題だ。目をつむつた。容易に落着けなかつた。徐ろに目を開け、一讀した何んだかぼんやりと解る様だ、しめたと思つた。それから繰返して讀んだ段々落着けてどうやら答案にした。始めて、これならと思ふ答案を出した。

此の日は終日愉快だつた。心の底から嬉びが湧いて來る様だつた。何んだか英語がすきになつた様な氣持もした

或日の失敗

四年 藤重 清

或る爽かな夏の一日、心地のよい朝風を受けながら二階の縁端に長々と寝そべつて雑誌を讀んでゐたが、間もなくとろ／＼と眠つてしまつた。ふと眼を覺ますと階下の方で人聲がする。どうやらお客さんらしい。「はい」と返事だけは元氣よくした。大きく欠伸をして眠い頭をふら／＼させながら階下へ降りて行つた。

「義太の一の糸一掛下さい。」

「はい」

と返事はしたものの、さて困つた。日頃賣付けぬ品物だけにその定價がよくわからない。が何思つてか、

「十錢です」

と言つて差出した。客は一揖して立去つた。が後でつく／＼考へるのにどうもおかしい。ぼうとしてゐた頭も段々はつきりとして來た。

「あつ、しまつた」

何と定價表には一掛二十錢と書いてあるではないか。何といふ錯覚だらう。半値で賣つてしまつては元も子もない此は父母に言へば叱られると思つて言はなかつたが、何ういふ理由で十錢と言つたのやら今だに分らない。時折その當時を思ひ出して獨り苦笑する。

休みのある日

四年 弘長 巍 一

僕の甥は一成といひ初めての誕生日を迎へた許りだ、名は古臭い様だが兄即ち一成の父が他郷で一成の生れた日に不思議なる哉夢で見た名前だといふのである。

八月十六日朝一成を抱き起して外へ出るとそこにはもう一成より五月許り早く生れた下の家の剛ちやんが待つてゐた。しばらくすると朝飯だ。一人を一緒に抱いて飯臺の傍へ下す、と剛ちやんは歩いて行つて御飯を指して「ウマ／＼」といつて催足する。一成は逼つて行き臺を持つて立上るや否やあつといふ間もあらばこそ、すにぐ御飯を盛つ

てある茶碗へ手をつゝ込み、握りしめて口へ入れやうとするがなか／＼はいらないので頭の邊からなで下ろして口へ入れる。半分は顔全體へ點々として付く、それを、又御飯粒の付いた手でなでる。その時の顔といつたら、その方へ氣を取られてゐると剛ちやんが醬油をひつくり返す。もう飯臺の上はさん／＼な目だ。が然し子供の事だから、面白く可愛らしいので腹などは毛頭立たない。今迄御飯の時少しも笑ふ事もなかつた一家が此二人の爲に急に明るく愉快に食べられるやうになつた。

然し一成の父が廣島文理大卒業後直ちに、鹿兒島の伊作高女に赴任する事となり一成も鹿兒島へ行つて仕舞つた。

一成を見る爲に遙々鹿兒島へ行かうと思つて冬の休暇を待ちに待つてゐる。

努力

四年 菟原 和平

古來幾多の偉人傑士の残した跡は凡人にとつては不可能

のものとしか思はれない。然し吾々凡庸人でも奮起如何に依つては一見不可能の如き理想の高峰も征服し得られるのである。その征服法は何であるか、此れ即ち努力の二字である。

立志傳中の巨人奈翁が無名の一士官より天下に覇を唱へるに至つた経路を見よ、彼はその境遇々に最善を捧げたではないか。總てその努力の結晶は一顆の珠を生み西洋史上に異彩を放つに到つたのである。未來の政治家を夢みる前に書物を熟讀せよ將帥を憧れる前に身體を鍛へよ、そうして自己の現實に對して最も忠實であれ。さすれば如何なる貧者如何なる弱者でも努力如何に依つてはどの様な大人物にもなり得るのである。我々の憧憬の的たる大人物は皆かくしてなつたものである。乃木將軍然り、リンカーンにしても亦然り、その他古今内外朝野の名士も努力に依らないで功を爲し名を遂げたる人々は一つもない。努力は吾々人類を發展させ幸福へ導くのである。努力は大小に拘らず尊い。

我々は常に努力の二字を腦裡に刻み込んで萬事に勇往邁

勇は義によりて長ずといはれたのもこの意味ではあるまいか。

郷土愛

四年 津村對介

「住めば都よ我が里よ」と木の間を流れて來る木挽の力藏の歌をよく下宿の机に倚りかゝりながら思ひ出す。

緑の野と青い山の外は何一つ美しいものとはなく、都會のやうに時代の新空氣も通はない我が郷土に、しかも無限の魅力と情愛を吾々は感じてゐる。

郷土愛に乏しい者に、どうして祖國愛があり得よう。由來祖國愛の強いのは日本人の誇りであるそれであるのに近來郷土を捨て、農村から都會へ憧れ走る無智な人々が可成多い。こんな人々に幸福が望まれようか。その大部分のものは都會の黒煙と悪氣流の中で激烈な生存競争に敗れ果ては一片のパンにも見はなされ棘の道へ、悪思想へと無抵抗に流れて行く運命にあるのではないであらうか。

進すべきである。

自信

四年 田村正好

自らを信ずる事程偉大なものはない。自らの眞の能力を知り之を信じて之に基いて、善を行へば失敗する筈はあるまい。

アレキサンダーの大帝國建設の東郷元帥の日本海々戰。皆必勝を期して戦ひ而して勝つた。自信の力だ。ナポレオンの自信に至つては「余の辭書に不可能の字なし」と言はしめた。世に名をなすやうな人は皆確固たる自信の持主である。自らの力を信ぜられないやうな者に何が出來やう。臆病者。此は自分の力を信頼出來ぬ人だ。自信のない人だ。不眞面目なもの、自己の價値を信じ得ないからである。さて自信を大にするには、一にも努力、二にも努力である。理想とまで行かすとも、心魂を打込んでやれば何事も出來る自然自信は強くなる。松陰先生が義は勇によつて行はれ

純朴な郷土愛者は健康な氣力と體力により青い大地にしかと立脚し、神のやうな幸福の農夫として一生を過して行くことが出来る。この郷土愛の持主はやがて忠實な祖國愛者としていつも中堅國民として立つてゐる。

質實の氣風

四年 岡村大一郎

現代の學生は一般に質實の氣風が缺けてゐる様に思はれる我々は學生である。

學生であるから我々は學生らしく、男らしくせねばならぬ。然るにどうかすると表面ばかり飾り、質實といふ様な事は少しも考へない様な傾向がある。金錢を浪費し衣服を飾るのが偉い様に思はれてゐる。然しこれ程つまらぬきたない根生はあるまい。現在の社會は衣服等の表面によつて人を差別するのであるが、花やかに表面ばかり飾る様なものより質朴な田舎の百姓の方がどれだけ頼もしいか知れぬ。

「質實。」實に男性的な言葉である。學生は學生としての務を眞實に盡くせば質實となる。「質實」は實によく我々生活の標語である。質實な學生こそ學生らしく。男らしく、頼もしい。

林先生の講演を聴いて

四年 西島愛三

自分は大の不平家である。それが今日林先生のお話を聴いて今迄の不平の生活から脱して感謝の生活に踏入りたい様な感がし出した。

我々は本當に不平を云へば限がない、又その上に不平をいへば自分の心も不愉快で随つて仕事も出来ない。それに反して感謝の生活をすれば心も明朗となり、人生を愉快に暮すことが出来る。その感謝の生活に入る方法として朝早く起きて神佛に向つて「どうか今日無事に自分の務を終へられます様」とお祈りをし決して他人に反對することなく夕には又神佛に向ひ「今日は神佛様のお蔭で務を終へるこ

とが出来ましてどうも有難うございました」とお禮を云ふこれがそも／＼感謝の生活の第一歩であると話された。自分はこれを絶好の機會として、すこしなりとも不平の生活から出来得る限り脱して感謝の生活に入りたいと思つた。

橋の上

五年 野村正次

カラツコロツカラツコロツ夜の岩國町のネオンは冷やかな光を歩道に於て居る。舊友と二人で立ち止つた岩國川のほとり。そこにはそろばん球を集めた様な錦帯橋が兩岸から輝いてゐるサーチライトによつてくつきりと優雅な姿を浮び出して居る。それはちやうど彼方の山からこちらの町へ淺瀬を渡つて出て來る一大銀蛇かと思はれる。五つに曲げた彼の體を靜かに水にうつした姿は實にバラダイスの花園に在るフラワーブリッツェが、月を背にした姿よりも一層美しいだらう。

カラツコロツカラツコロツ一段々上つては下る僕等の頬を、櫻の香を乗せたるすら寒い春の夜風は靜かに氣持よく吹いて去つた。垂れ櫻の葉先を濡らす水の面に白く浮かんだボートが二つ三つ……一匹の小犬が僕等の足のまわりをうろついた首の小鈴をちよ／＼ならして、欄干に持たれた二人の影は細く長く水上を亂舞した。

おぼろ月夜の月影と共に……

燈火管制の夜

五年 藤田正

私は、一寸走つては足早に歩き、又走りして春日を抜け新道路へと急ぐ。身體は、二三日からの風邪熱がむく／＼して足早に歩くのが全身倦い感じ。

燈火管制の夜——私は今夜は機關銃隊の一員として配備につくのだ。子供々々した様な嬉しみがあつた。

友人が七八名で、市役所の方向へ、がら／＼砲車を引いて行く。私は直ぐ駆け出した。

「おーい藤田が來た、藤田が」

私を期待してゐた様な友人の語に私は意氣軒昂の態。

秋の夕風そよ／＼と云ひたいが、もう今夕の風はナツバ服の下のトレーニングシャツを通してひし／＼寒い。

夜更けには月が出るのだらうか等と思ひつゝカーバイトを籠に詰める。……準備完了。

我等の出動……ウオー、ウオー。非常サイレン。瞬く間に全市は闇。その闇の中をシルエットの如く人はスウ／＼と無言で通る頼もしき我が砲車の進行！がた／＼がた／＼

我が機關銃についてゐる者他に二名。(熊野居田)

第二管制に入つての、我々の活動は、電光石火の早業で着々事を處理して行つたが、その前の四五十分間の休みこそ私には嬉しい限りであつた。

夜目にはしかと物體の存在は知れないが、そんなものに腰を下ろして先生二人と夜空を見上げ秋の夜寒をしみ／＼語る。

私はうつ／＼と人の語る語を聞きつゝ、大きな建築物の窓

の灯さてはぼーつと空に映ゆる明るさを見てゐた。さうして實戦なればなんてな事も慥思つたと記憶してゐる。

蟋蟀鈴虫と云つた虫が啼いてゐる。

月の出が戀しい。

ナツバ服の肩の邊をやはらかく撫で、見ると、夜露がしつとり。

第二管制に入つて、私等三人と白神の隊は、グラランドの草原の中に入り、右へ左へ、前へ後へと、闇の中を駆け廻り、實戦そのものゝ如く戦ふ。

パリ／＼／＼／＼。その都度、バツトと吐く銃火。愈々私等三人は忙しく活動し始める。

綿の様になつた身體で、指月橋の上に私がたつた時は淡い光りの秋の夜の月が東にあつた。

窓

五年 香川 朝政

僕の書齋は二階にある。その書齋には窓が東北西の三方

に開いてゐる。この三つの窓は僕の幼い時とちつとも變つてゐない。従つてこれらには小さい時の懐しい思出が今も猶明らかに残つてゐる。毎日これらの窓々から外を眺める度に小さかつた時の印象が再び頭の中に甦つてくるのが常である。正面の通りに臨んでゐる窓が東側で低い欄干が附いてゐる。小さい頃にはよくこの欄干に寄りかゝつて「朝早く昇る太陽を眺め、手をたゝいて讚美したものだ。又十五夜の晩に一家そろつて月見をしたのも此の窓である。北側の窓は一番大きくて又一番見はらしが好い。屋根の重り台つた向ふに海が見える。右には笠山がゆるやかに裾を引き續いて茶碗を伏せた様な九島を始め肥島、羽島、尾島、相島が少しの間を置いて紺碧の海に浮んでゐる。尾島のかげには見島も一部分見える。天氣の良い日には藍をとかした様な海上に風をはらんでちら／＼と浮ぶ白帆が目立つて美しい。嵐の日には灰色の海面に立ちさわぐ白波に無限の憧憬を感じ又一方では不思議な恐怖を感じて來たのがこの北側の窓である。就中最も印象の深いのは、夏の初めから秋の終りにかけて暗夜の海上にちら／＼と明滅する漁火であ

草

五年 刀彌彌 太郎

る。波のおだやかな夜は海面に映る火影に深奥な美しさを感じ、又、波の高い夜はちら／＼とあわたゞしく明滅を繰り返す無数の火によつて淡い哀愁を引きおこす漁火には子供心にその美しさと神秘的な情趣に打たれて來たものである。實際それは詩的情趣を多分に含んだ美しい眺めであつた。その頃から幾年もすぎた此の頃でも窓際の机に寄つて波間に明滅する漁火を見る爲に、「うちの父さん眞夏でも沖は寒いと云つてゐた。」と云ふ藤村の詩の一節を思ひ出して何とも云へない深い哀愁を催すのである。三つ目の西側の窓は小さくて少し高いので、小さい時はあまり覗いて見なかつた。然し正面にお城山が見えるので此の頃はよく覗いて見る。其他まだいろ／＼の事があるが、思へばこれらの窓を通して幾多の思出が次々と甦つて來て勉強に疲れた僕の心に潤ひをつけてくれてゐる。僕が書齋に此處を選んだのも一つは窓が懐しいからである。今後もこの三つの窓には數へ切れない程、多くの思出を残すことになるだらう。

八月の太陽は屋根を通してじり／＼と照りつけシャツ一枚の肌もじつとりと汗ばんでゐる。丁度私は私の一番苦手の代數の宿題をやつて居た。考へれば考へる程氣分がいら／＼し蟬の鳴聲が耳につき益々暑さを募らせる。終にやり切れなくなつて鉛筆を投げ捨てて庭に下りた。庭には幾何かの植木鉢が並んでゐた。私は偶然にも一つの植木鉢の下から名も知らない一本の草が生えてゐるのを發見した。勿論鉢の下であるから養分も餘り無く、又先月以來の日和續きで其の上時には夕方水を植木にやるのさへ怠つてゐる位であるから地面は勿論鉢の中迄も乾き切つてゐる。普通の草花は皆萎れて鉢の中のは今にも枯れさうなのさへあるのにその草は流石に黄色味を含んだ弱々しさうな葉ではあるが何處かに伸びやうとする力を持つて敢へて早魃に對抗して來てゐるのである。或は根を深く土中に挿入して地下から養分を取つて居たのであらうかと思つて一寸引張つて見

ると矢張り普通の草と同様にすぐ抜けて別に變つた所も見えない。良くも今迄枯れずに居たものだと思ひ乍ら其の儘室に歸つた。夕方ふと思ひ出して又行つて見るとまだ晝過ぎ抜いた儘になつてゐてあの小さな黄色を帯びた若芽もすつかり萎れて居た。此處に於て私は突然悪い事をしたと思つた。「何だあんな草位、」と思ひ乍らも何か心を引かれ、終にそれを空いてゐた植木鉢の中に植え水を充分にやつて置いた。いふまでもなく元の通り生き返るとは少しも思つては居なかつたが罪の無い草を抜いた爲の一時の氣休めと退屈な餘りにしたゞけであつた。翌朝はもうすつかり忘れて仕舞つてゐて晝頃ふと思ひ出して行つて見ると驚いた事には昨夕のあの枯れかゝつた様子はちつとも見えず、葉も生氣を帯び青味さへ加つて居た。更に水をやり、夕方もう一度行つて見るともう前日の様子はすつかり消えて双葉の間からは可愛らしい若葉さへのぞいてゐるではないか。此處に於て私は一種の恐怖と感動とを感じざるを得なかつた。あゝこの小さな名も知らぬ雜草ですら己を生かし生命を保たしめてゐるではないか。世の他力により生存し生活

難、不景氣と喘いでゐる人に知らしめたならば果して如何なる感があるであらうか。草は汝々と伸びて行く。而して我等にも果して時々進歩があるであらうか。誰かの言の如く、やがて地球は植物によつて覆はれて仕舞ふのではないだらうか。

自然と人生

五年 田村精作

人は世の中に生れ出ると直に自然と結びついて切つても切れない關係に置かれてしまふ。況んや地上を舞臺として活躍する以上、自然に制壓されることを覺悟し、此の自然を巧みに利用して、思ふがまゝに人類の理想に邁進しなければならぬ。

大自然は人間の考も及ばぬ復雜極まる偉大な神秘な力を持つてゐる。或る時はやさしき女神ともなつて、人類に至大の幸福を齎らす。又或る時は惡鬼と化して萬物の靈長と誇る人間を、我等が築いた文化の建築もろとも、目茶々々に

くのである。所謂地人相關である。

民族

五年 能美陽一

人民の種族の集合を民族と呼ぶ。例へばアジア民族歐洲人種等々。そして同一民族は一丸となつて他民族に對してゐるものである。

抑々第三紀内至第四紀の洪荒紀に中央亞細亞に人類の發現を見、氷河時代に至つて現在人類の祖先はインド地方の熱帶地方へと避難して以來幾星霜を経て地球上の各地に點在し自然に制約され將又還境に支配されて種々様々の民族が構成されたのである。

而して全世界に數幾十もの民族が現存し各民族特色の文化が發達しそれに伴つて思想的にも多大の變化を來らしめてゐる。一例を擧ぐれば彼のマルクスの社會主義等だ。是等は彼の屬する民族間に耳通する主義かも知れない、我々大和民族間には適應しない主義だ、併し西洋かぶれして一に

こわして何處ともなく消えてゆく。不思議な人智を超越した事實が朝に夕べに降りかゝつて來る。然し我等が萬物の靈長と誇る所以のものは何か？此の惡魔、彼の試練に挫けぬ意志と奥深くして測り知る事の出來ない智慧を持つてゐて、自然現象より得たる科學の力によつて、即ち自然を利用する事によつて、これに挑戦し、これを征服してゆく。惡辣なる利劍の刃を一枚々々折つてゆく、強い、尊い精神があるからである。

人間は一方では自然と戦ふが、片側ではこれと親しみ、これを愛してゆく。人間の美的情操はこれによつて養はれ助長されてゐる。自然の美しい景色を見れば「あゝ美しい。」と心から叫びたくなる。自然にあこがれ自然美に陶醉して一生山野を跋渉して歌を詠み、詩に歌ひ、俳句を作つて楽しんで變人的な風流人もある。

「自然と人生」此の二者は互に敵であり味方でもある。人類は或る時は冷酷な或る時は温味のある、微妙な動きを持つ自然界に抱擁され、自然は我等が人類より親しまれ利用され、かくして自然と人生は結びついて人文は發達してゆ

も西洋二にも西洋と言ふ輩は或る一種の物珍らしさから此等の主義に共鳴するが是輩は別だ。彼等は最早神聖な大和民族を離脱したる者だと断定し得るのである。

今や民族自決運動が唱導されつゝある。具體的に言へば印度の獨立運動然り得又一世を風靡し盡した世界大戦も民族自決運動の發露ではあるまいか。然り民族の自決を目標にセルビヤの一青年がビストルの引金を引いたのである。そして遂にドイツオーストリアは敗れ結果は？チエツコスロバキヤ、ブルガリヤ等々……小さいヨーロッパ、バルカン半島に多數の獨立國を見たではないか、各民族が一團となり一小國を建設せしものなのだ。

又民族と民族との關係は實に深遠且微妙なるものがある。現在盛んに報道されつゝある伊太利、エチオピアの風運急を告げ何時戰の幕は切つておとされるか分らない時に當つて私は思ふ「民族の争だ」と。ちつぽけな國に住む伊太利民族は廣く／＼伸びんとしてゐる。此れに反して三千年と云ふ歴史を有するエチオピアの黒人種のおくまでも他民族の侵入を防がうとするのだ。民族の争鬭なのだ。

ある。然し自然の感境に依つて一時的に變化される事はなにとも限らないが、その本質は決して變へ得べからざるものである。

全世界の平和は破れ世界大戦が起つた時に一個の柔弱な男でも雨と降る彈丸の中を物ともせず敵中に切り込んで行くとして花と散る潔い死を遂げる意氣又一旦不正の恥を受けた時、女性の貞節を盡くす誠心かくの如く會つて見た事のない偉大な力を生じ又美しい精神が起るのは我が國民の傳統的精神であらう。君の爲、父母の爲、又友の爲子の爲には命を惜しまぬ日本男子、潔く他人の爲に死ぬるといふ事は我が國民の他の國民に見られない特殊な傳統的精神であらう。

世が進み外國の甘い文化が國民の精神を捉へ墮落へ導き込み得ないのは武士道といふ昔からの我が國の傳統的精神の餘りにも明瞭なるが爲であらう。又我が校にして見ても我が校訓の精神は三十有餘年の久しき間嚴として變つてはゐないであらう。此れ知らず／＼の内に受ける傳統的精神の發露である。

又例を猶太民族に取つて見よう。ヂューと呼ばれる、國のない猶太民族は各民族間に混じて世界革命を爲さんとしてゐる。「世界の富は汝に與へられん」と言はせられたエホバの神の言を信じ彼等は汝々として務め他民族より金を奪ふことに醜態としてゐる。

ソビエトの大部分は猶太だ而してマルクスも亦然り。此の如く考ふる時、全世界を平和に作り上げるには如何にすべきか？の間に對して自分は思ふ一國民族と最も關係の深い民族を相互に理解し合ふのだ。「理解」それは不可能であらうか。否決して不可能ではない。然し苦心は必要だそして遂に来るものは努力だ

傳統的精神

五年 玉井義照

過去から現在へ現在から未來へと無意識の内に遺傳的に發展して行く精神が傳統的精神である。傳統的精神は我等人類が先天的に備へてゐるもので、容易に犯され難いもので

今や時代は非常時の危機に直面してゐる。この時代を此の尊い我が武士道の傳統的精神を以つて望む事は現在の時機に相應しい事といふべきである。

自然と人生

五年 福田寛雄

古來人類は自然に支配されて來た。古に溯れば溯る程自然は絶對的のものであつた。然し人類も穴居生活をし、石器を使用して居た時代より自然は人類の良き利用物であり又指導者であつた。古代エヂプトの文明はナイル河の氾濫によつて創造された。メソポタミヤに發した文明はチグリスニールラエスの兩河に乗つて流れ全世界に廣まつた。自然と人生とは常に密接不離の關係にあり、衣、食、住一つとして自然を元としないものはなく一つとして自然に支配されないものはない。

人類にとつて自然は屢々災害を齎して來たが人類は人生を一層有意義ならしめる爲にはてしない人智と不斷の努力

を武器として自然の暴威に對抗した。そして又之を生活に利用して來た。例へば電氣を發見し雷の正體を發き避雷針を發明し、又世を機械的にした。燃ゆる猛火も人類の手にかゝつては文化を進める原因となつた。天候に對して氣象學を研究し天災の豫防に努めた。この様に昔より次第々々に自然征服に努力をして來たが大自然の威力には尙打勝つ事が出来なかつた。彼の關東大震災を想へ。一瞬にして花の都大東京も阿鼻叫喚の谷とかはつたではないか、又昨年の近畿の風水害を見よ、人も家も只自然の荒れ狂ふがまゝにまかせねばならなかつたではないか、又自然には人類に不可能な時の把握と云ふ利権があるがどれほど人間が騒いだ所で百年足らずの人生ではないか。それに對して自然は廣大なる宇宙の廣さと共にすべてが悠久の世界ではないか、それに比する時の人生は。噫人生僅か五十年只春の夜の夢とも喩へられる様なものだ。この微々たる人生は自然の前に屈服しなければならぬのであらうか。人間には自然の大きさ廣ささへも想像外にあるではないか。自然征服は永久に不可能か、否、々一個人としての人生は短くとも自然

民族

五年 石村 豊徳

母國の今日世界に雄飛してゐるのは何故だらう英國の内政に腐心してゐるのは何に原因するのだらう。外面的の差障には頓着しないとしても内面的に弱點をもつてゐるものには、押しが利かない。根本的原因是に人種の多寡優劣の程度融合の如何に負うてゐる。歐米諸國は内面に潜む民族自決運動によつて絶えず脅迫觀念に襲はれてゐるのである。其れ故に強國の要素は強固なる中心的民族の存在することである。

今日世界に數多の民族が存在してゐるが太古黄河、ガンジス河、チグリス、ユーフラテス河の流域を搖籃地とする絢爛たる文明も。時代の變遷に伴ひ、或はギリシヤ文明の發祥を來し、或はローマの物質的實用的な文明を建設し延いては西歐文明の原泉ともなるに至つた。古來民族間に幾多の生存競争が繰り返され嘗て東洋人の優勢な時代には遠く西涯に至る迄悉く其の馬塵に蹴散したが、民族の頽廢と

九〇

に對するには又無限の連りのある事を忘れてはならない。人智は其の極りを知らずと云はれるではないか。それを傳へ傳へて人智と努力の炬火を掲げて必ずや自然と對抗する事が出来るのである。自然も遷る。人生も流れる。然し人生と自然との關係は常に不可分だ。峨々たるアルプスの山頂も會ては海底であつたとか決して自然も常住不變ではない。恰も人生の榮枯變轉の常無いのに似て居る。萬物流轉の世に何時迄も自然の暴威に、人生の無情を歎く事があらうか。

自然に對してこれに打勝たうとする力人が人生を動かし文化を生むのである。自然と人生の争ひあるが故に世は進むのである。人生を幸福ならしめる爲に自然と争ふのだ。然しその將來は何時迄も未知數だ。そしてこの自然對人生の争闘は永劫に消滅しないであらう。

共に、漸時その勢力を失つた、民族大移動に伴ひ、東西に流浪した歐洲人も、文藝復興の氣運に乗じて、機械的、物質的文明を創造し、新大陸の發見に従事し、東洋及び世界の南北の果に至る迄、その勢力範圍を擴張して、今日の現狀を形勢する近因を作るに至つた。民族自決の思想は、遠い昔より行はれてゐたが、殊に歐洲大戰以前より其の色彩は濃厚となり、大戰中には大小數多の獨立國を生じ、尙その運動の繼續は印度に於て可なり盛に行はれてゐる。

顧みるに我が大和民族の世界的地位を占有する迄には、二千有餘年の星霜を経過してゐるその間、變轉極りなく繰返されたが、概ね固有文化を保持し、民族間の融合を計り我が、民族の全統御をなし給ふ 皇室の御稜威を中外に宣揚した。茲に於て萬國無比の團體の建設を見るに至り、延いては大和民族發展の根據をも作つた。

次に我が國の現狀を見るに、アイヌ族は、すつかり同化してしまつたが、未だ朝鮮民族に關する大問題が我等の前途に横たはつてゐる。同胞一億を包含する大日本帝國臣民として朝鮮民族を屈辱的な態度にて視る様な卑劣な行のあ

るのは我等の大いに反省すべき箇所である。又さうあらねばならぬ。翻つて眼を世界に向けて見給へ、歐米人の我國に對する猜疑心は遂に黃禍説となり、米、支に於て盛に排日が、叫ばれるに至つた。民族間に激烈な軋轢のある今日我等のなすべき義務は何か。將に覺醒の氣運に乗つてゐる亞細亞民族を一團として、大亞細亞ブロックを建設して、毛唐を舊大陸より悉く驅逐することだ。一小部分のみに着眼すれば、内鮮融和、臺灣民族同化の問題を解決することであり、此の非常難局を打破する光明は、民族の鞏固なる團結より出づるものと信ずる。

長門峽行

特別會員 久永祐藏

青葉若葉かゞやう谷や音を澄みてたぎち流るゝ水の眞白さ

山川のたぎつ瀬ごとに影うつり今さかりなりあけの躑躅は

青樹うつろふ谷の水底に影さやかなる若鮎の群

春深く山川の瀨の鳴るなべに藤の垂り花岸にゆらぐも

風渡る河原楊の色深きそよぎの中のうちひすの聲

山藤の垂り花うつる谷川に河鹿啼くなり春深くして



卒業生通信

神宮皇學館を語る

同校 中原正久

在校生諸君、今や將に天高くして馬肥ゆるの時古臭い言葉か知りませんが將にその通りです。

梧葉を訪づるゝ風も冷やかに覺え、吾々の愛する秋は訪れて來ました。この好季節に諸君は或は勉學に或は運動に御精勵の事と思ひます。

眼を轉じて歐州に向けますれば、今や累卵よりも危き状態に各國とも息をつめて居ります。あの醜き争鬭は何でせう。退廢期にある歐州文明のそれに伴つて、くづれ行かん

とする状態の現状維持にとめる哀れな姿に外ありません之に反し見よ！興隆日本の雄々しき姿を！この目覺ましき活躍は全世界動搖の動機と云へませう。此の隆昌日本はそもく何に原因するでせう？その裏面には實に國民が吾國體に目覺めつゝある喜ぶべき思想潮流が波濤つてゐるのであります。復古の大精神に蘇りつゝある現象であります。

こゝに、大日本精神即ち建國の精神の研究が叫ばれ、行はれて神道の使命は益々重大さを加へて來ました。その神道の中樞たる皇太神宮の御膝下に於て私共に毎日皇學を擧ぶの幸福に充たされてゐるのであります。日本臣民たる以上は、皇道を體得し國威の發揚に努め、忠良なる日本臣民

たる事を期すべきであります。

今日、日本精神は高調されて來ましたが、果して眞の復古精神を體得してゐるでせうか、今日の世界的風潮に乗つて流行的、皮相的で内實味を缺いて來はしないでせうか。

かく觀で來れば吾々の双肩に重き責任のかゝつてゐる事を感じないでは居られません。來るべき日本の指導者たり良き臣民たらんとする者は皇道體得に須臾も躊躇してはなりません。

薄れ行く霧の中にほのかに浮ぶ朝熊山の崇高な姿、そのもとを水靜かに流るゝ五十鈴川の小波の音を後に、前には神都山田の明をひかへ、遠望すれば右の彼方に伊勢灣の靜かな平和な波が寄せ、世の喧噪を他所にして理想に進まんとする吾等若人の學舎學館は倉田山高くそびへてゐます。志ある若人よ、來れ！二百の健兒は待ちうけてゐます。第二の松陰先生が母校より出すべきではありませんか。現在學館内は神道科、歴史科、國漢科に分科されて（尤もこれは二年からです）神職界は勿論、教育界に進出出来るので、本科生（中等學校卒業生）は二百名ばかりゐますが、

配は要りませんが忠實に譯す事です、意譯も、直譯も好みません、小野圭さんのをやつて居れば大丈夫でせう。兎も角、點數の差が之で決るさうですからあまり氣を許さない様に。

試験については凡そこんなものです。確實に記憶して置く事です、落つてやれば何でもありません。

時將に燈下親しむ可きの候です。晝は拭へるが如く空は晴れ渡り、一點の曇りもないすばらしい天氣です。僕らは庭球に、ピクニックに、或は弓道に劍道に思ひ思ひに天地の大氣を擅に吸ひ身心の鍊磨にいそしんでゐます。而して夜は靜かに思索に耽るのです。何と愉快な生活ではありませんか。日曜日は寮生殆ど辨當持ちで二見行、鳥羽行、魚釣り、山登りなどやつてゐます。

二見鳥羽は非常に景色が良く神宮參拜客は參拜を終えると決つてこの方面に出かけます。丁度今頃は參拜客が多くなつて來ました。

諸君もどうぞ奮發して來春は美事、合格の慶を味は、れん事を希望します。

母校出身生は小生一人で山口縣人でも四人のみです、心細い限りです、九州方面は毎年頗る多いのです。奮つて入學されん事を希望します。

入學試験について一言

先づ漢文は白文ですから、よく練習して置いて下さい、今まで熟語が必ず出てゐたのですが、今年はどうしたものが出なかつたのです、來年はどうなるか分りませんから、之も充分調べて下さい。國語は普通にやつて居れば大してむつかしい事はありません。

作文は分り易く平易に書く事です、讀む人にとつて内容がよく分る様に書かなければなりません。主眼點が明瞭である様に難しい熟語を並べ立てるのを最も嫌ひます（相當點は辛いのです。）次は歴史ですが西洋史も東洋史も大きい問題は必ず出される様ですから御注意下さい。點數の開きも外國史と英語で決るさうですから。日本史は今までの傾向としまして外交との關係がよく出される様です。將來明治時代も出される可能性が多分にある様です。

英語は他の學校に比較して、易い様ですから、あまり心

取急ぎまして文が前後錯雜しましたが悪しからず、終に母校の隆昌と諸君の健康を祈つて擲筆します。

陸士を語る

同校 淺原昌佑

士官候補生！KDの歌！日本精神の高調される今日、精神的に亦肉體的に躍動して居る昭和の此の年、何といふ痛快な餘韻を吾々に與へることであらう。然り千二百の魁々たる候補生の搖籃として、帝都の東北皇城を西南に仰ぎ俗塵を高く超脱して、儼然市ヶ谷臺上に聳ゆるものはれが士官學校の輪廓である。武士の花咲く神州に、君の惠の霧うけて、馬前の譽なつかしく、國の干城と雄々しくも、衡天の然もて集ひ來つた吾等の住んで居る修養道場である。

劉々として朝の靜けさを破る喇叭の音に耳を驚かされ、猛然床を蹴立て、日朝點呼を受ける。時將に五時三十分、我呼べと彼答へずの、大都市の靜けさ。之から一日の訓練は始まるのである。朝食前、雄健神社に參拜し、皇城次い

で伊勢大廟家郷を遙拜し、一家の無事と武運の長久とを併せ祈る。清爽なる朝の空気を胸一ぱい吸ひ頭を低く垂れる時には一の妄慮なく一の邪念もない。

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

とは西行法師の歌であるが、身は宛ら神鳥に負はれて神の懐に入る様である。

朝食後晝食時に至るまで教授部授業を受ける。時としては夢の天國に昇つて行く者も見ろ。此の點に於ては流石の陸士も諸君の學び舎と變りはないと思ふ。

午後になれば術科である教練、體操、馬術、劍術、柔道、訓育部學科皆然うである。勉強の嫌な者にとつては午後の術科は愉快であらう。特に馬術等は中學時代に経験した事のない事であるから、初心者にとつては相當楽しい事である様に思はれる。柔道の二教官の對照も習技者の發見する面白い現象であらう。背の高いのと低いのと………然し起床の號音に始まり午後の術科が終る迄、規律的な嚴格な訓練を受ける吾等には、夕食後自習時間の開始までの

三十分間程楽しいものはない。ドヤ／＼と食堂を出て來ると中には尚ほ飽き足りないで酒保に走つて入る者もある。又有りもしない聲を擽つて號令調聲（指揮官となつて號令をかける際のその號令を練習して居るのである）をする者もあり、さては校庭を逍遙する者もある。この三十分間は我等に取つて如何程自由で且つ如何に愉快な天地であらうか。

先づ酒保に足を入れて見よう。或は健啖を誇りながら饅頭に飽き、或は酒ならぬ牛乳瓶を並べ或は重からぬ財布の底を叩いて乾菓子に胃を充す等、他に見られない場面が展開されるであらう。更に集會所に入つて見よう。此處は又喧噪な酒保と全く異つた別天地、沈黙の處である。或者は古書を繕いて聖賢の道を尋ね、或者は偉人傑士の傳記に感奮し、或者は新刊の書籍に依つて新智識を求むる等何れも皆溫良な君子の集りである。

校庭に出て見れば流石は天下の陸士と唱はれるだけ、號令調聲をする健兒達此處彼處に散在して殷々轟市ヶ谷を震撼させて居る。南側の樹木が茂つて居る所へ行けば又變つた

情緒を味ふことが出来るであらう。巷街の灯を望んで三々五々或は談笑し、或は詩を吟じ、さては遠く思ひを故郷の空に馳す。斯んな夜に月が出て來たならば、其の趣も又格別である。斯の様にして自習時間の號音響けば、黒い影は皆生徒舎内に吸込まれ市ヶ谷の天地は再び靜かになつて行く、兎も角夕食後の三十分、是れ吾等が生活の樂地奮發の動力であつて、又何物にも優る唯一の慰安である。

然しこれらのことが吾々の生活の全部ではない。即ち日曜祭日には外出が許可せられる。腰に所謂「牛蒡劍」なるものを吊して颯爽と俗世間に飛立つて行く。人生の無情、浮世の辛さを味ひに行くのであらう。或る者は親の懷に飛び込んで充分に乳を吸ひ或は親戚を訪問して六日間の疲れを休める。と思へば當ともなく下宿に彷彿ひ込むものも居る。兎も角修養道場に教を受ける吾等にとつて日曜は最も嬉しい日なのである。惜むらくは只赤丹（吾等の肩章は星、條もなく只赤地ばかりである故赤丹と唱へて居る）のみ。土曜日の隨意自習これ又吾々にとつて楽しいものである。「日頃思つて居ることを今宵こそ」と心に獨り楽しんで、

足取も早く食堂より歸り卷紙を取り出して老親、兄弟、故舊に消息しようとする。萬感無量、人々の溫容が目に浮んで、眼瞼が次第に熱くなつてくるのを感じずには居られない。故山の風物が眼の前に映つて追憶は又胸に滿つ。一句一行、心は彌猛にはやるけれど筆が進まないのをどうすることも出来ない。漸く書き終つて更に見返すこと五六回人知れず微かな笑を洩しつゝ封をする。「嗚呼此の手紙は何時頃父母の手許に達するであらうか」等思つて、沈思するものも又一つの慰安を増す。

今自分は寢につかうとして居る。屋上に上つて自分は故郷の空を懐しく望み見る唯語げたいのは、臺上の雄々しい武士にも「センチメンタル」になる時があるといふことである。最後に本校の四大綱領を述べて参考に資する。

- 一 尊皇愛國の至情を養成すること
- 二 軍人たるの志操と元氣とを養成すること
- 三 健全なる身體を鍛鍊すること
- 四 文化に資する智識を、くこと

海軍經理を語る

同校 岡田 寛

中秋の冷い風が訪れる頃となりました。諸兄はさぞかし来るべき聖戦に向つて日夜その準備に餘念がないことと思ひます。帝都を貫流する隅田川の岸邊に嚴然と聳ゆる聖なる殿堂こそ將來帝國海軍を双肩に擔つて立つ我等が母校であります。八十名の生徒は常に聖訓を奉體し、精神を修養し、體力を鍊磨し、學業に勵んで、他日主計科士官としてその任務を遂行し得る所の實力を養ひつゝあります。

私達は身體を強健にする方法として種々の運動が強制的に課せられてゐます。例へば短艇、水泳、陸上競技、庭球、野球、柔道、劍道、角力等はその主なるものであります。其の他行軍、演習等が數日に亘つて行はれます。そして私達は主計科士官としての基礎を固めつゝあるのもであります。故、上級學年に進むに従つて、其の修得する學術も特殊の専門的なものが課せられます。其の中で法律、經濟、語學は最も重要視され、これらには夫々専門の博士、大學の教

授達が親しく教鞭をとつて居られます。

學校の生活としては、入校した當初は境遇の變化に由つて、規律正しい軍隊的生活が少し辛い様に感ぜられますが一箇月位経過しますと嚴格な規律生活が却つて自由な生活よりも快く感ぜられるやうになります。教官と生徒、上級生と下級生との間には實に親子、兄弟の情愛が充満し、同級生同志は互に戰友として非常に打融けた「俺、貴様」の關係で生活してゐます。本校生活中最も楽しいことは毎日曜日、祭日、其の他の公休日の外出であります。スマートな軍裝に身を包み、腰間の短劍をひらめかしながら帝都の中心地を堂々と闊歩する時には、我々經理學校生徒ならでは經驗し得ない所の一種の誇を感じずには居られません。又時に行はれる乗艦實習に於ける各地巡航も、我々海軍生徒のみが味ひ得る所のものであります。

入學試験に就きましたは、二十五名の採用者に對し千七百名の志願者が殺到し、身體検査の結果、學科試験を受けける者は千名餘になりますが、尙競争は相當激しくあります併し要は平素の努力でありまして、最後までよく頑張るも

のが遂に榮冠を獲得します。學科試験の時、初日の科目の成績が少し位悪くても決して悲觀せず、最後の五分間まで大に頑張りが抜くことが必要であります。採否の決定は總點數であります故、自分の徳意の學科に於ては特に頑張つて置くことが肝要であります。尙本校に就いての詳細は直接私に御手紙下されば出來得る限り盡力する考へであります最後に諸君の御奮闘を望んで擲筆致します。

靈南ヶ丘を語る

旅順工大豫科 新谷 幸治

秋も漸く酣となり諸兄には日夜御勉勵の事と存じます。扱て御依頼によりまして、本校に關し二三紹介させて戴き何等か諸兄の御參考になる所がありましたら幸と存じます申すまでもなく我が旅順は日清、日露兩役に尊き血を流した聖地、東洋中興の發祥地であり、近く新興滿洲帝國を眺め、北支、中支を窺ひ、ふり返つては母國日本を大觀し得る絶好の位置にあります。周圍の山々は凡て同胞の血に彩

られた尊いもの、港口また閉塞隊勇士の眠る所、白玉山表忠塔は日常崇敬的、是れ皆我等を叱咤鞭撻せざるはありません。市街は新舊の兩市街に分かれ我が大學と寮一全部寮に收容の事一のある新市街はアカシヤの並木に飾られ、白聖の建物がその間に散在し、且つは境の如き西港を前に紫雲棚引く老鐵山を彼方に眺める等、詩的、ロマンチックに富める美の街であります。

而して我が興亞寮は此の旅順の西端、靈南ヶ丘の上に旅順口を瞰下する事、工科學堂創立以來二十有餘年の輝しい歴史を誇る、傳統の譽れ高い寮であります。大正十一年大學に昇格し愈々基礎を固め、卒業生は全滿及び中國工業界の原動力として活躍され、在學生即ち若き日本の丈夫と新滿洲の健兒、復興中華の志士は互に手を携へて、興亞の大使命に向ひ邁進して居ります。豫科生の頭に戴く櫻花の大和心の櫻葉三葉は智德體、白線は文武の象徴であり、その大理想は今述べた興亞の大業であります。抑々興亞は皇國の國是であり東洋諸民族の念願であり、世界平和、文化を將來せんとするものであります。我が寮は此の名を負ひ、

我等はこの理想に生き、共に寝ね俱に食ひ、肝膽相照し、名に實あらしめんと努力して居ります。實に寮は興亞精神の道場であります。

今や滿州帝國興隆の秋、皇國非常の時、北滿亦漸く平靜ならんとし、此くの如く恵まれた、時と地が他にありませんか。學べ聖地旅順の地に！

入學試験については特に變つた事ありませんが、數學は級數の得意な先生が居りますからそのつもりでゐて下さい。物理化學は制度の變つた爲本年から問題の傾向も變つた様でなんとも言えません。次に國漢は和歌のすきな先生ですから、何かの形式に十中八九迄出るものと思つて下さい。概して國漢は容易なものができます。數學は五問中四問やれば大丈夫ですが三問位でも、あとは物理化學が級落の境目だと思ひます。それから身體検査、之は近眼など心配無用ですが、大學の理想が亞細亞を興すと言ふ遠大なる使命を帯びて創立され、豫科生ほとんどが何にか運動をして體力を養つてゐる位に重要視されてゐますから、身體の悪い人は豫め斷つて置きます。本校出題の傾向は最近の

問題を熟讀して戴けば良く分る事と思ひます。次に萩中卒業生の在學者は私と豫科二年に波多野さんが居られるのみで寂寥にたえません。遠く東北地方、更に海を越して北海道からはる／＼やつてきてゐる今日、すぐ近くの巴城の地からたつた二人では若人の意氣を疑ひたくありません。申し落しましたが學費なども他校に比較して安價なものです。要するに身體の強健な普通の人なら大丈夫です。滿蒙工業界に雄飛せんとする志のある方は、曖昧な憧れを捨て、確固たる決意の下に來れ、聖地旅順へ！

尙詳細は小生又は波多野さん宛御一報下されば御返事致します。終りに諸兄の御奮闘を祈ります。(旅順工科大学 興亞寮宛)

第五高等學校を語る

同校理科 阿部 浩

燈火親しむべき候となりましたが、上級生諸君は目睫の間に迫つた聖戦への準備に多忙な日を過して居られること

と思ひます。

さて今度は校友會雜誌の方から御依頼を受けましたので拙文を弄する事になりました。若し此の駄文が諸君の御參考の万分之一にでもなれば欣快の至りです。

我が第五高等學校は西海の一聖地熊本に據を占め五十年に達せんとする長き歴史と傳統と、剛毅木訥の精神より醸された獨特の校風は他の高校の追従を許しません。半世紀に亘る長い歲月の間には或は多小の變革を見せたかも知れません。併しこれは本校の中心生命たる剛毅木訥の精神が時潮に調和し新生命を創造したものに過ぎません。其の校風と云ふ點から見ると半世紀昔しと現在との間に何等の差違も無いことを斷言します。九千人に及ぼんとする卒業生は現代日本の中心人物となり斯界樞要の地位を占め各種の方面に亘つて目醒しい活躍を續けて居ます。現内閣にも二人の大臣を出してゐることは特に本校の名譽とするところです。かゝる状態にある爲その入學者の如きも相當優秀な者が多く、小生の如き者がパスしたのは僥倖を擲んだ爲だと思つて居ります。

入學試験問題も可成り難問が多い様ですが、近來餘り了解に苦しむ様な問題はない傾向を辿りつゝある様です。それでは課目に分けて説明を加へて行きませう。

國漢、これは毎年相當考へさせられる問題が呈出されます。或る受験生は此の課目で致命傷を受け遂に失敗の憂目にあひました。國語は單語をしつかりやつておくことです。今年も歌が出ましたが來年は疑問です。兎に角國語の八波教授はひどい近眼ですから文字を大きく書く事です。漢文は白文が出ては狼狽しない様に練習を積んでおく事です。五高に八波、高森兩教授のゐる間は受験生相當苦しまなければなりません。國漢で百二十點(二百點滿點)とすれば結構です。

數學、此れが試験の運命を大體決定するかも知れません。問題數は六題、代數、幾何が大體半々となつてゐます。三角が今年から入りましたがこれは餘り重要視する事はないでせう。二次方程式の根に關する問題は毎年出てゐますから充分研究しておく事です。一人とてもグラフの好きな教授が居りますからこれも出題された場合狼狽しない程度に

やつておく事です。數學は文科なら四題、理科なら五題以上やつておかないと安心出来ません。

英語、英語は大低英文和譯が五題。和文英譯が二題ぐらいです。川瀬教授が小説文を好む故か毎年二、三問は小説文が出てゐますから此の方面の用意も怠らないことです。注意を用するのは書取のある事です。點數から見ても四十點入りますから平常から充分に練習しておく事です。

暗記物、此れは未だ確定しませんですから省略しておきます。

課目に就いては以上の通りです。最後の月桂冠を得る者はやはり平常より人一倍の努力を拂つてゐる人です。聖戰迄五ヶ月、此の間の諸君の努力如何が五ヶ月後には有形の物としてあらはれて來るのです。頑張り給へ！諸君の青春の血潮に燃ゆる熱と意氣とを以て。小生は諸君の御成功を衷心から御祈りして筆をおくことにいたします。最後に一言述べておきたい事は現在在熊の萩中卒業生は高工に阿武兄藥專に白上、行本兩兄、五高に指山兄と小生の五人で至つて振ひません。且來春は白上、阿武兩兄は卒業されますの

で結局残る者は三人です。これでは中學會も出来ない様な事になりはせぬかと今から不安を感じてゐます。來年こそ新しい希望に燃へてゐる諸君が大舉來熊せられることを期待し意を強くしてゐる次第です。幸ひ小生が柔道部の春合宿の爲三月十日から三十日迄居る筈ですから出来る丈の御心配は致します。ではこれで御別れ致します。

第一高等學校を語る

同校 西本春男

菊屋嘉十郎

一、移 轉

長い間、寮歌の放吟と朴齒の音で本郷通を賑はした一高生は、此の九月、幾多の有能なる先輩を育み來つたあの舊寮に別れを告げて、此處、駒場の新天地に移轉して來た。附近は靜寂で樹木多く、七萬坪にも餘る域内には、時計臺聳ゆる校舎を始め、南北中の三寮、野球グラウンド、庭球コート、陸上競技場、雨天體操場、弓道場、無聲堂（柔劍道

場）、圖書館、食堂、浴場等諸設備が完備して、嘗て全國第一に機かつた一高は、一躍全國第一に立派な學校になつたとして。其等諸設備は、一高生の旺盛な讀書欲、運動欲を満すに充分である。有名だつた、あの時計臺も、此の新校舎に復活して、朝夕に其の威容を誇つてゐる。此處に上つて見渡すと、さしも廣い武藏野も一望の中に展開し、云ひ知れぬ爽快さを感じしめる。土地變り、寮は變つた。併し舊向陵五十年間に培ひ來つた輝しき傳統の精神、一高魂は永遠に變る事が有つてはならないのである。

二 一高の特色

一高の特色を一言にして言へば「皆寄宿寮制度」である即ち三年間、特別身體の弱い者を除いては全部寮に入らねばならぬ、否入る特權を有すると云ふ事である。之を聞いてよく人は「窮屈でしょう」と同情する様に云ふ。それは一高の寮生活を知らぬ人達の言だ。一高の寮は、世間一般の寄宿舎とは、其の成立の由來から大に異つてゐる。即ち明治二十三年自治創立者、木下校長が、生徒を一堂に集めて言はれた文中に、

「壞敗せる風俗の世に生れ此の放肆の書生と下宿を同うし而して行の修り徳の進まん事を望むは猶木に縁りて魚を求むるが如し決して得べきの理あらざるなり苟も此の惡風に染まざらん事を欲せば宜しく此風俗に遠かり此の書生との交際を絶たざるべからず而して此目的を達せんが爲めには籠城の覺悟なかるべからず云々」と。此を見ても分る通り我々の籠城生活は、確たる主義精神も無く、漫然と爲されて居るものではないのである。一高魂の發源地は此の寮であつたのである。一高即寮、寮即一高。學校と寮とは、一高に於ては到底別々に考へる事の出来ない存在である。俗世を避けて、此の丘に營む吾等の生活こそ、最も純潔、完全なる生活であると確信し得るのである。次に寮の生活を少しく詳述して見よう。

三 寮の生活

イ、自治の制度 本郷では八寮であつたが、駒場移轉後、南、中、北、の三寮となり、總計九十三の室が有る。各室から總代を出して總代會を組織し、之に依て寮内の總ての事が審議される。そして各寮からは六人づゝの委員が選出

されて、正副委員長の下に一切の行政と司法を掌るのである。此が自治制度の大綱である。總代會は、寮に於ける唯一の立法機關である。そして其の發展と沈滞は向陵精神の盛衰に重大な關係があるのである。彼の朴齒を踏み鳴し、寮歌を高吟して、如何にも散漫に見える一高生も、一度、總代會に臨むや、其の冷靜な頭と頭とは火花を散らして戦ひ、舌端火を吐き、夜半も何のその、總代會の終るのは大抵夜中の一時、二時頃である。先日も對三高戦問題に就き委員の提出した議案の審議の時の如きは、夜明け方近くなつて始めて終を告げた。校長の口癖たる「やる時にや、やる」一高生の眞面目は、此の總代會に如實に現れるのである。最適なる向陵を建設せんが爲めに、自己を没却して、眞剣に討議するあの向陵愛、此こそ、過去五十年の傳統の本源ではあるまいか。自治寮の礎、其は總代會である。

ロ、各部屋の生活 寮の部屋は運動部屋と一般部屋とに分れて居る。端艇部は、文端、理端、併せて七つ、柔剣道部は夫々三つ、等、各運動部は専有の部屋を持ち、部員は、此處に合宿的生活を營む。次に一般部屋と云ふのは、部

入つて居ない者の部屋、で一年生は、文科、理科、ごちゃ／＼に混合はされて、所謂一年部屋を作つて居る。二年、三年の一般部屋は、例へば文乙二年部屋の如く、學校に於ける同學級の者のみで一室を作る様になつて居る。其の他樂友會、陵禪會の如く、文化團體で一室持つて居るものもある。何の部屋にしる、奇しき縁で、日本各地から集り、居を同うする人達の間には、寮歌に曰ふ、「友の憂ひに吾は泣き、吾が喜びに友は舞ふの清純な友情が湧いて来る。其の美しい友情が、自治寮の生活を強固にしてゐるのである。

四 一高年中行事

四月上旬、試験合格者の發表がある。喜びに包まれてゐると、其の晩遅く、運動部の連中が家に押しかけて来る。「君は是非ラグビー部に入つて呉れ」とか、「ボートをやつて呉れ」とか云つて、一時間、長いになると二時間位玄關に頑張つて勧誘する。彼等が歸つた後で始めて、俺も一高に入つたのかなあと云ふ様な氣がする。十日過ぎになると寮の部屋も次第に賑はしくなり、一年部屋では、初對

面の人達と、いとも町重な言葉で挨拶してゐる一年生の姿が多くなる。だが之も一週間も経てば、俺お前の仲になるから面白い。上級生の寮歌教授、委員長の演説の五六時間も續く入寮式、などが有つて、やうやく自分が一高生であると云ふ事を自覺する様になる。そしてコムバなどやつて朗かに騒いでゐる中に一學期も段々終りに近付いて行く。六月上旬、第一學期全寮茶話會が有り、對三高戦選手推戴式がある。一學期中で一番愉しいものは全寮晚餐會であらう。此の日は、何時も穢い食堂の机も眞白な布が敷かれ、有能なる食事が其の上に並べられる。咽喉を鳴らして居る中に、諸先生、先輩が入つて來られる。委員長の演説を始めとし、寮生、先生、先輩の演説が引き切りなしに續けられ十二時過ぎやうやく「嗚呼玉杯」の呪詛を以て晚餐會を終る。六月中旬には對三高戦の應援の練習が始まる。「戦はむ哉時機到る」の歌が響き出す。慌しく、併し愉快に、一學期を送つて行く中に試験が来る。日頃あれ程怠け者の一高生も此頃になると十二時の消燈後も、蠟燭の光を頼りに、煎餅などポリ／＼やりながら、蒲團から頭だけ出して

頑張つてゐる連中が多くなる。かうして慌しかつた一學期もロソクの臭を残した儘、終を告げて愈々楽しい夏休が始まる。

夏休中には、向陵年中行事中の最重要事の一つ、對三高戦がある。既に此處二年、四部（ボート、陸上運動、野球庭球）全勝の榮を得、三高は最早一高の敵ではないのである。今夏三高側の卑劣なる態度から遺憾な紛擾を惹き起したが、今一高ではやうやく對三高戦の根本的意義の熱心なる再検討が行はれてゐる。來年からの對三高戦はどうなるか未だ判明してゐない。又夏休には富士山麓、山中湖畔の一高嘯雲寮、伊豆、宇佐美の詠歸寮（水泳部合宿）で暑熱を避けて、勉強に運動に勵む連中も多い。二學期が始まると、遠く故郷に歸つてゐた一高生も夏休の愉快さを顔の黒さに現して、元氣に歸寮して来る。二學期には、ボート部秋季大會、運動會、行軍。三學期には、各部の寒稽古、二月一日、二日の記念祭等愉快な行事が多い、が未だ僕等は二學期、三學期は経験してゐない。之は又次の機會に御紹介しよう。斯くして向陵の一年は、あの豪快な寮歌の呪詛

の中に明け暮れて行く。

五 寮 歌

今一高には二百數十種の寮歌がある。その調には、時流に對する一高生の態度がよく現れてゐて面白い。明治三十七年、今の東大教授穂積重遠先輩の作られた「都の空に東風吹きて」歌など露國に對する烈々たる一高生の意氣を反映して居て、當時の一高生の氣概を察するに足る。吾等が此等寮歌を高唱ふ時、往時の諸先輩の氣持に知らず／＼同化され、限り無き愉快を感じるのである。一高に於ては、寮歌を離れての寮の生活は考へ得られない程、寮歌は重要な意義を持つて居るのである。

六 最 後 に

以上で大體向陵生活を述べた様に思ふが、此處にお願ひが一つある。其は一高を眞に理解したら、是非やつて來て呉れと云ふのである。一學期、一高山口縣人會を行つたが出席者の殆ど全部が山陽道方面出身の人達で、日本海方面の出身者は僕達二人だけだつた。どうか／＼受けに來て呉れ。特に、入學確實な學校があり、入れたら一高に入

中の應用問題の書取に「ミスーツニツ位」なら充分。英文法は學校の教科書を充分やつて置けばよからう。數學も、黒川主任教授が去年死なれたから、次第に易しくならうと觀測されてゐる。それだけ完全にやる必要がある。數學を全部やると云ふ事は、入學の成否に多大な關聯を持つてゐる。最後に暗記物、之は絶対に山をかけぬ事、歴史なら大きな時世の流れと云ふ様なものに注意して、答案に時代錯誤など無い様にすべきである。要するにコツ／＼、併し頭を機敏に働かせて、無駄の無い勉強をされる事が必要である。今や燈下親むべき時、大に頑張つて、來春、四月、夫れ／＼の志望校に凱歌を奏されんことを祈る。

(附記) 一高には共済部と云ふものがあつて、家庭教師などに、世話をして呉れるから、普通の學校程、學資の心配は要らない。

尙も少し詳しく一高に就て知りたいと思ふ人がありましたら遠慮無く左記へ御便下さい喜んで御返事しますから。

東京市目黒區駒場第一高等學校

北寮十九番 西 本 春 男

中寮三〇番 菊屋 嘉十郎

りたいと思つてゐる人にすゝめたい。尙ほ、例年、旅順工大、北大豫科の試験は夫々一高の入試の前後に一高に於て行はれてゐるのであるから、東京だけで、上手くやれば四つ位受験出来るであらう。「二兎を追ふ者は云々」の諺も試験の場合は無視されてもよからうと思ふ。次に、一高受験に對して重要だと思はれる點を各學科に就て少し述べて見よう。第一に、一高に於ては、各學科平均に出來ないと成功覺束ないと云ふ事である。國語なんか特別勉強しなくても、實力で大丈夫だと嘯く連中がよくあるが、其實力なるものが怪しい。試験官は意外に辛い點をどし／＼つけるものである。國語では文法が大切。文法は文法として勉強せず、解釋の武器として實際に働かす事の出来る様に勉強して貰ひたい。どうしても解釋は文法的にしなければ正確なものとは得られない。漢文は、論語、孟子の如き基本的なものが大切である。一高の英語問題は傳統的に短文である高校中では難文に屬して居るから充分勉強しなければならぬ。單語の難いのは無いが、文の内容の理解が難しいのである。和文英譯は「時」に注意して呉れ。英語書取は、萩

萩 雜 詠

特別會員 久 永 祐 藏

花あかき釣鐘草をたちくどり兄をたづぬるをさな
子のこゑぬりかへしペンキあかるき山の家いで湯
あふれて晝しづかなり
橙のかげのプランコゆきさぶりて吾子のあそぶに雨
と降る花阿武川の川上遠き山峽にけさも雲立ち晴
れつゞくなり



京阪地方修學旅行記

四年 熊谷正雄

三月三十日 曇後晴

夜がやつと明け終つた頃、一同は東萩驛前に集合、六時四十分發の列車に乗り込んだ。皆前途に希望をかゞやかせて車中は中々賑かだつた。

大井、奈古、宇田郷、須佐と見覚えある驛を通り、田萬川を渡つていよ／＼島根縣へ入る。車窓から見てみると、蜜柑の樹の數も次第に見られなくなつた。だん／＼萩の勢力範圍を脱しつゝあるのだ。濱田に到れば、全く島根縣の勢力圏で、殆ど赤瓦の家ばかりであつた。聞く所に依れば雪を滑らせて、冬季瓦の割れるのを防ぐ爲ださうである。

砂丘と松原の間にある小さな漁村の驛を飽きる程過ぎた。曇つてゐた空も次第に晴れ、遂には窓から日光の射し込む程の晴天となつた。

長々と續く白砂と青松の向ふに、黒雲の如く島根半島の海中に突出してゐるのが見えた。聽て我々の汽車は、神門川、斐伊川の鐵橋を渡つて、廣々とした出雲平野に進入する。流石、そのかみ出雲文化の榮えた土地だけあり、肥沃な大平野である。正午近く今市驛着、大社線へ乗換へて、二十分許で大社驛へ達す。その間殊に珍しかつたのは蓮華草のやうな植物が、高い畝の上に植ゑてある事だつた。多分水分が多い爲か。桑畑の籬が松であり、家屋の棟の兩端

が高く上つてゐるのも出雲平野の特色らしい。

大社驛に降りると、直ぐ乗合自動車で所謂門前町の間を縫つてお宮の前まで行つた。運轉手の案内で天下に名高い大社へ參拜するなるほど大社は一風變つたお社である。拜殿が小さく神殿の方が大きく、而も拜殿の側面に附いてゐて御神體は向つて左向きである。厚々とした檜皮屋根も大黒様の昔をしのばせた。再び乗合で大社驛へ、それから汽車で今市驛へ。山陰本線に乗換へれば思ひの外満員で辨當で腹ごしらへをする所か腰をおろす場所もない苦しい目を見た。小波騒ぐ憧れの宍道湖を目の前にして汽車は走つた。

松江着、市中を通り松江城や、ハーンの舊宅を観る。萩より大分賑かだ。斐伊川に跨る水の都、夢の都である。豫定より汽車が遅くなつたので、松田君と斐伊川の岸で海風を寒く受け西は薄赤い夕陽を浴び城を仰いで握飯を食べた。七時過に京都市の列車に乗り夜行で一路京都へ向つた。

三月三十一日 曇。

夜の十二時過よりうとり／＼してゐたが、二時半より四時半までは熟睡した。五時前よりそろ／＼下車の仕度。車窓外は未だ眞暗である。京都近くへくると嵯峨とか、花園とか、天皇様の御名と同じ驛を過ぎる。嵐山の電燈、沿線住宅地の電燈、ケーブルの電燈など、諸所に一條の帯を爲す。京都二條驛、丹波口驛その沿線には兩側に煙突が林立し、黒煙を吐いてゐるの見える。大きな倉庫がある。此れぞ京都の工業地帯だ。黒い幕は漸く去つて、遠く東山がなだらかに眠り、大きな寺の堂宇も、ぼかり／＼と見え始めた。汽車はガチャ／＼とレールを勢よく蹴て、京都七條停車場へ滑り込んだ。

「さあ、下りるんだぞ。」と口々に言ひながら、大きな立派なプラウトホームへ下り立つた。京都驛も久し振りである。大分變つた様だつた。未だ時計は六時前を指してゐて、少々肌寒く感じた。廣々とした驛前廣場を出迎人の案内で奉公館宿泊部へ入る。緩くりと顔を洗ひ、温かい朝食を御馳走になる。

輕装して市中見學に出かけた。案内人が先頭である。電

車の音も耳なつかしく感じた。先づ東本願寺。それから七條の大橋を渡り、三十三間堂。長い坂を登つて清水寺。なんだか眠つて歩く様だ。旅の心境とは、斯んなものか？

芭蕉の、「馬に寝て残夢月遠し茶の煙」である。豊太閤の清水の舞臺上の大志も、亦夢か？舞臺上より望めば京都市街には一面に朝靄が下りて、所々にばかり／＼と寺の大堂宇が浮いてゐる。坂を下りて、帝室博物館、豊國神社大佛殿と廻り歩く。大佛殿は彼の有名な國家安康の鐘のある所だ。大きな鐘で突けば、ウン／＼と唸る。次に八坂神社、圓山公園、知恩院と廻る。八坂神社の朱の色と緑の極彩色は、お宮らしい感じがしなかつた。人里離れた南禪寺へ行き、平安神宮に詣る。結構装麗であるが、色彩がペンキの様な塗料で、現代的の感じがするお宮だつた。併し神域は殿めしいものであると。一千七十餘年も榮えた平安京の基を開かれた桓武天皇に對し奉つては深く追慕申し上げた。電車で北野神社へいつたのが丁度正午で中食。

午後はまづ裏手の新開道路を通り、松の木蔭の金閣寺へ至る。金閣と言ひ、庭園と言ひ、夕佳亭と言ひ、贅澤の極

みである。足利義滿はよくも逸樂に耽つたものだと思つた歸りに向ふの東山三十六峯の眠つてゐるのを望んだが、藤原氏權權時代源平時代、吉野朝時代、室町時代、戰國時代徳川時代、御維新時代の戰亂、悲劇を物語る様であつた。最後に、京都の中心點たる御所を拜觀、それより解散、各自奉公館へ歸る。僕は疲れたので、電車に乗つた。

夕食、入浴、それから丸物百貨店へ、散歩に出た。屋上庭園より、今將に西山へ沈まんとする眞赤な夕陽を望んで、明日の日和を聯想すると同時に、故郷萩、小野田の事が思出された。暗くなつた頃歸館、日誌を付け、明日の事を考へながら眠る。

四月一日

ぐつすりと眠つて起きて見れば、もはや夜は明け、東から眞赤な大きい太陽が昇りかけて居た。館の屋上で、朝の空氣を呼吸して運動。すぐ前のバス等も既に一日の活動準備をしてゐた。朝食後ゲートルを巻いて表通りへ出て見れば、出勤姿の人々がどん／＼と歩いて通る。今日は奈良を見物して大阪へいく豫定である。ポー／＼といふ電車の音

を後にして、京都七條驛より奈良線に乗り桃山驛に下車。立派な參道を通り、朝日が杉の梢を漏れる爽快な氣分に、桃山御陵參拜。現代日本の基を開き給ふた明治天皇、昭憲皇太后に御ふさはしい莊嚴清淨の神域、一同謹んで御靈を拜す。次で乃木神社に參拜。雑誌で讀んだ事のある、すが／＼しい氣分がする。報徳會本部の前を通つて驛へ戻つた驛は全く御陵の爲の驛である。續いて奈良線に乗り、宇治木津を通過して奈良に至る。

奈良は昔の平城京の跡であるから、京都とも似た點があつた。併し京都の加茂川に比して、奈良は猿澤の池、何れも海に遠い都の大宮人の最良の遊園地とされたものだらう。奈良では鹿が特色である。猿澤の池から奥へと、坂を登れば、それは一面の大公園である。春日神社、三笠山、二月堂、三月堂、正倉院、大佛殿、博物館、興福寺と皆その中に含まれてゐるのだ。春日神社は餘り、威嚴のあるお宮とは思へなかつた。嫩草山（俗三笠山）は若草が萌えて奈良情緒を深からしめた。次に東大寺だが、流石奈良の呼物だけあつて、大佛殿は大きい／＼。高さは日本一と思はれる

大堂宇であつた。周圍にはお城の如く厚い石垣が廻らしてある。誰か「何の爲に斯んな大きな大佛殿を建てられたんだらう。」と疑問を起した。僕はそれに對して斯う考へたのである。「聖武天皇は篤く佛教を信ぜられたから、佛に祈つて國民の幸福を願はれ、且國民にも佛教を普及させて國を安らかに治めて行かうと爲されたからである。」と帝室博物館では、餘りにも澤山な國寶があつたので、覺え切れなかつた。最も印象に深く残つてゐるのは、埴輪と名刀と五重の塔である。興福寺では、日本第二の五重の塔と奈良氣分の深い南園堂だけだ。

關西本線により奈良驛から大阪湊町驛に至る。途中、法隆寺を遠望す。生駒山脈を横斷すれば、見渡す限りの大阪平野に出た。遙か遠くに林のやうに煙突が一纏位に見え出した。次第に沿線の兩側に煙突が見え始め、家屋が多くなつたと思ふと、早くも大阪市内に入つた。京都より、奈良より、情趣には乏しいが、確かに勢がある、實力がある現に活動しつゝある都市だ。汽車は高架線を走る。連なる軒は敏速に動いて行く。東京の省線電車にでも乗つた氣分に

なつてゐると、湊町驛へ着いてしまつた。

驛へ下りると稲田家族館の旗を先頭に、ヒヤ／＼しながら懸命の思ひで、道頓堀、稲田家族館へ着いた。宿は大阪でも最も賑かな所だ。ゲートルを解いて足を楽にし、夕食を済ます。岡君、山川君、森重君と大阪見物の散歩に出掛けた。先づ地圖を頼りに心齋橋筋の散歩道路へ出て、銀ブラの気分となる。通りは狭いが、人通りは大したものだ。大丸は休業。十合百貨店を少し見た。そして大丸の下から地下鐵に乗車した。地下何十尺といふ深所を走るのであるから動搖は感じないけれども、速力は大分出てゐたのだ。暫くの間に淀屋橋、河下を通つて梅田へ着いてしまつた。約五分だつたらう。市電なら十分は掛るのだつたらうに、阪急百貨店へ至り、一階より順次に見て行く。そして七階迄だが上つたら、既に網張りがして上れなかつた。エレベーターで地下室へ下りた。地下室には食料品部があり、各種の肉、佃煮、漬物、青物、食べたいと思ふ物は大抵何でもあつた。唯見られなかつたのは萩の様な鮮魚である。僕は筍や蕨はあるまいと思つたら、思の外、立派なものが陳

降り、中之島公園へ入つて見た。庭園を散歩すれば、兩側は川である。涼しい／＼。水の都の公園。小さな橋の架つてゐる所迄来ると貸ボートが澤山索いであつた。今は淋しいけれど、夏になつたら大阪市の人々は皆競つて此處へ来て遊ぶであらう。併し噴水の池の面には煤煙が浮いてゐた時計を見れば、八時半。大急ぎで、日本橋筋を歩き、既に閉居した三越、高島屋を見て、日本橋東詰の稲田屋へ歸つた。足は棒の様だつたので、足を洗つて就床した。

四月二日 晴

五時起床。ぐつすりと約四時間餘り睡眠す。今日は伊勢参宮の豫定である。まづ顔を洗つて、屋上へ散歩に出た。屋上といつても物干し臺と兼帯で、足が相當冷たかつた。大阪城を遠望する。葉書と日記とを書いて朝食。六時半頃に旅館出發。大軌電鐵の参宮線で、上本町六丁目より山田驛へ。電車は二輛連結の急行電車で、東京小田原急行電車や阪急の様なよい乗り心地である。驛を出ると兩側は二階屋ばかりである。大阪市内に於て一驛停車し、それから櫻井驛まで、田畑の中を急行である。小高い丘陵に到れば

一一一

列してあるではないか。實に抜目の無いのには驚いた。以前には斯んな青物類は賣つて居なかつた筈です。そして四人共に大阪名物「粟おこし」を買つて出た。歸りは徒歩で大きな歩道を急ぎ、大江橋、淀屋橋を渡つて淀川の夜景を眺めた。一帯に大きな役所が立並んでゐた。併し建築物内は死人の世界でしんと静まり返つて居る。四人共不思議に思つたのだ。日本銀行も地圖により此邊だと探したが外燈の光も暗くて見當らなかつた。後で聞けば死の世界の様な役所は市役所で、日本銀行が見えなかつたのは電燈を何の爲か消してゐたらしい。そこで、晝間の大阪大經濟主腦部も夜になると役人達は皆郊外の方の住宅へ歸つてしまふのだと分つた。

難波橋を見る爲に進路を東へ取り、人通りも少い暗い大通りを進んだ。難波橋は旅行出發前に父から大阪第一の大橋と聞いて居たが、成程立派な大橋でした。半分を見れば短いけれど、實は此の橋は真中は中島公園上を通つてゐて二つの川に跨つてゐるのである。中央の側面には石段があつて下へ降りられる様になつて居る。そこで我々は石段を

兩側は桃畑、葡萄園である。葡萄は産額日本一といふ。その中に千早城で有名な金剛山が見え出した。その聳えた地形は楠公の昔を今に思ひ出させた。電車はフルスピードで大和平原に突入する。神武創業の太古の歴史ある、神々しい畝傍山が拜せられる。その先には少し低目な香久山。線路の直ぐ北手には耳成山が望まれる。電車は耳成山の直ぐ山麓を通つて過ぎた。北方を望めば、實に廣い／＼大平野で土地肥沃。成程此の平和な、大自然の恵深い平野こそ、正直な温順な日本文化の搖籃の地となり得たのだと感じた。昨日の淵ぞ今日は瀬になるといふ飛鳥川も、此の地形では自由自在に曲りくねつて流れる筈だ。長谷寺前を過ぎる頃より、電車は山にさし掛る。笠置山脈である。そして暫く山間を走つた。名張驛、神戸驛と停車。次には青山の隧道をくゞつた。此れは鈴鹿山脈を横断したのである。一隧道を出れば、電車は急に速力を盡した。後を省みれば、高い／＼錐の様に聳えた大山脈を横断してしまつてゐるではないか。急に氣が晴れ／＼した。伊勢平野に出た。此れも亦中々廣い平野で、目のとゞく限り平野である。本居宣長先

一一三

生の松阪を過ぎ、我々の電車はいよ／＼目的の伊勢、山田驛へ着いた。電車と汽車の停車場は続きで、電車を降りると汽車の停車場を通つて驛前に出た。

直ちに外宮参拜。外宮前より電車に乗つた。そして内宮へ向つたのである。電車の警笛も小さく上品な音である。運轉手、道行く人までも襟を正した服装をしてゐる様だ。廣い参道を餘り自動車飛ばさないのも不思議だ。斯くて電車は内宮前に着いた。下車整列して宇治橋へ向ふ。嚴しい門衛があるではないか。小學校時代から何度も寫眞を見ては想像して居た宇治橋を渡る。下の水を見れば、一點の濁りもない鏡の様に清らかで、實に誠の流れである。日本一の清流である。恐らくは上流に人が立入らないからであらう。宇治橋を渡ると、右手に折れて、五十鈴川に沿つて奥深く入つて行く。白木の大きい鳥居がある。僕はその間に、「我が日本の國の大根本の御先祖は何故に、女神であらせられるんだらう。伊弉諾尊、伊弉册尊が弟神の素戔嗚尊の殿めしい武よりも、天照大神の高天なる天日の様な御仁徳の方が「治すの政治」を以て將來の瑞穂國の御經營基

修學旅行中であるといふ事を意識し、友達の顔も見分けが付きだした。

宇治橋を渡つて電車道路に出た。停留所の兩側は、お土産屋が澤山あつた。電車で二軒茶屋などと風流な名の驛を通つて、二見ヶ浦へ出た。流石、伊勢海沿岸だけあり、海老が兩側の店先に多い。海岸に出て久し振りで潮風に會つたが、實に伊勢海の氣がする。向ふに霞んで見える知多半島等を見てゐると、その向ふには中部地方、その先には東京ありと考へられた。成程、宇治山田まで來ると大分關東の氣分が多少する様にも感ぜられた。夫婦岩は餘り感心する程のものでもなかつた。二見で中食。電車で、今度は大軌の宇治山田本驛まで歸つた。再び参宮急行電車で、フルスピードで紀伊半島を横斷し、大阪上本町六丁目の驛へ歸つた。五時であつた。特別仕立ての電車で、夕暮の大阪城を望みながら、内本町二丁目の有田音松社會部に向ふ。有田ドラックの宿泊部といふのは、内本町から少しばかり小路に入つた所にある銀行の様な建物で、入口は大きな鐵の扉がある。周圍の鐵筋混凝土の壁は非常に厚く、一つの

礎を築かれるに、頼りになると御信じになつたからであらうか。」などと考へた。併し五十鈴川の冷たい／＼清らかな水に手を清め、心の底迄平靜になり誠の人間となり、原始林とも言ふべき大きな檜の立並ぶ参道を奥へ／＼と進んだ。十段位の石段を登る如何なる。神様がお祭りしてあるかは知らないけれども、自然と頭が下つて、首を上げて、まともに前面を見る事は出来なかつた。數分前とやかく考へてゐたことなど全くどこかへいつてしまつた。實際何も考へられなかつた。御神殿をよく拜觀せよとの事で、斜横手の玉垣の間から御奥の御神殿を見たが、何でも白木造りの建物の上に黄金が神々しく光つてゐて、千木が内に切つてあつた。僕の記憶はそれだけである。何とも言へぬ心持がして、夢の様に御前を退出した。神樂殿の邊まで來て始めて我に歸つた様な氣がした。歸りは神樂殿の横手の下向道を通るのだつた。大麻授與所の門の傍に、羽毛の立派な雞が一羽居つたのも、天照大神と關係がある様で、神々しかつた。圓形の花園のある神苑を通つて、再び宇治橋前まで出た。此所で記念寫眞を撮る。此處迄來るとやつと今は

小さな城の様な感じがした。確か五階建て位であり、建物には露天の非常用の鐵の梯子が傍に附いて居り、其他、エレベーター、階段の便がある。何だか普通の旅館よりは、異様に氣味悪く感じた。四階の寢室へ行つて見ると、此れ又如何！汽車の二等寢臺の様な寢臺の棚が、上段と下段とで四段、室の三方に釣つてあるではないか。或人は「動物園だ」と叫んだ程の風變りな寢臺でした。地下室へ下りて夕食。今日は大阪は大抵見物してしまつたし、一緒に出る友達も無いので、日記を付け、都なる舊友と恩師とに葉書を書く。そして食後の散歩の爲、友達を探し求めて、もう一度長堀橋の方面から心齋橋筋へ散歩に行つた。大丸を見學。就床十時。

四月三日 曇

三時に目覺めたが、火事があつて大阪消防隊の敏速な動作を見た。堂島川の方向で相當大きな建築物で、火照が眞赤になつてゐたが、忽ちに鎮火した。萩の消防とは段がある様だ。夜が明けて、五時半頃、洗面、六時に朝食。間もなく出發。

先づ大阪城へ行く。堀を渡つて城内に入れば、巨大な石が眠つてゐて、太閤の全盛期の夢を物語つてゐる。大阪呼物の天守閣は白色セメントの壁であつて、百貨店の觀があつた。併し、五階の裝飾の躍り上つた金鯱は、壯大であつて豊太閤の太つ腹をよく示してゐた。コンクリートの階段を登れば、各階に大阪の産業研究資料から大阪城の歴史に關する書類等が陳列してあつた。早くも夏の氣のする大阪城を出た。電車に乗つて、四天王寺に至る。天王寺は五重塔が倒壊してゐたので、昭和五年に行つた時より悪かつた。次に動物園へ行つた。ライオンや虎や鳥類には上野動物園と餘り差は無かつたが、一番人氣物の臘腸臍の大きな池は動物園の大なる進歩だと思つた。廣い深い池を造つて眞中には海豹島を作り、(多分水は海水だつたらう。)そして十匹許の臘腸臍が鱒の獲物の爲に樺太でも斯くあらうと思はれる様に、妙な聲を出しては快速力で、自由に潜つたり浮いたりして泳いで居た。動物園中にて中食。

午後電車で難波まで行つた。そして人通りの中を列を立って、大丸百貨店の見學に行つた。大丸は元來吳服屋であるなかつた。だが、以前に晝間讀んだ時よりも大分趣が異つてゐる様だつた。お宮を出て眞直に神戸驛へ向つた。汽車辨で夕食を濟ませ十時前神戸發一路宮島へと向つた。汽車は相當込んでゐて席もなく困つたが、東先生が席をあけて下さつた。本當に勞れてゐたからか、十時頃よりぐつすり安眠した。

四月四日 雨

起きて見ると三時頃、早くも糸崎邊だつた。それから一睡して起きると廣島だつた。五時四十九分宮島着。夜は既に明けてゐたが、雨が降り出して來た。連絡船で嚴島へ渡つた。宿屋の玄關先に荷物を下し、輕裝し、僕は豫て、お祖父様の言ひ聞かされた通り、防水マントを手にしてゐたので早速着用した。お宮の前まで團體で行き、それから自由行動であつたので、岡村君と拜觀料を納めて、廻廊を渡つた。潮は干てゐたが、春雨がポツリ／＼と土地を濕して、宮島の廻廊を廻る情緒にはしつくり合つた天候であつた。大阪等の動的美に對して此處は靜的美だ。我々は阪神工業地帯を見て來た目には嚴島の價値が明瞭に見えたと思ふ。

から、吳服物の多いのは、その特色であつた。又流石大阪第一と言はれるだけあつて、エレベーターの數の多いのは驚いた。大丸地下室より地下鐵驛へ下り、地下鐵で梅田へ。阪急百貨店は既に充分見たので、直ちに梅田驛へ行つて汽車の時間を待合せた。

汽車に乗込んで流石名残り惜しく感じながら、連日の睡眠不足と精神疲勞の爲、重くなつた頭を神戸へ運んだ。途中は全部高架線であつたのも新しい。三宮下車、神戸港の見學に行く。有田ドラックよりの案内人の盡力により、岸壁に横付けになつてゐた歐洲航路「靖國丸」の船内を見學させて貰つた。船内の諸設置は整潔だといふ程よく整つて居つた。あれ程なら航海も少しも退屈ではなささうだ。英人も見えた。船客には外人の方が多しうである。あんな船を操る船長になるには相當の度量が要ると思つた。神戸は實際地理で學んだ通り、國際的都市であつた。元町通りとかいふ人通りの多い通りを通り湊川神社の横手の門を入つた。湊川神社參拜。日は既にとつぷりと暮れてゐたし人數も多いので「嗚呼忠臣楠子之墓」も餘り明瞭には讀め

兎も角も嚴島は日本三景の値打があるらしい。春雨の中を神社の裏手を散歩。濡れた鹿の姿も趣があつた。千疊閣を見て急ぎ宿に歸り朝食。此所で貝鍋等のお土産を揃へる。食後門前町へ散歩に出で、看板を見ると力餅屋が相當多かつた。秀吉公か元就公の遺風だらうと思ひ、其の名に興味を引かれて買つた。

九時五十分嚴島發、宮島着十時。十時十分宮島發車。初めて岩徳線を通つたのも面白かつた。小郡にて中食。その中に我が第二の故郷小野田を通過する。見慣れた煙突も白煙を吹いてゐる。僕は今迄怠惰の念の起る毎に、あの煙突を萩の地で思出しては心を引緊めたものだつた。今度は時間の都合もあるし、何れ四月中には父母は萩へ來られるので無駄な事だとして下車しなかつたが、いざ目の前に懐しい煙突を見ながら走り過ぎるとなると、實に斷腸の思がするであつた。私の心は實に淋しき一杯でした。

汽車は厚狹驛に到着。乗換である。所が、汽車の箱を下りると直ぐ前に、思ひ掛けもなく父が立つて居られた。急に僕の顔には久し振りで微笑が浮ぶ。疲れたかと問はれて

唱。解散。思へば一同一人の怪我もなく無事萩に歸つた譯だ。

旅行戯作

快男子野村重郎裸になり飛渡の瀧巖に立てり

山路は著しとズボン下げてゆく大股くろき田村由

之

焚火して濡れたる服をいつしんに干す山中が鼻の

上の汗

剣道の能美陽一袴刺らず戦へば負け袴刺れば勝つ

實際は相當疲れてゐたが、何に未だ元氣ですと答へて置いた。橋を渡つて美嶺線の汽車に席を占め、父の來萩などに關する偵言をされた。父は上り列車の都合で止むを得ず、上りプラットへ行かれた。會社の晝の休憩時間を利用して出られたのである。後で實に親といふものは心配されるものだ、實に有難いものだと嬉し涙は自然と流れ出づるのでつた。何時の間にか、汽車は厚狭川に沿つて山間を走つた。今日の思ひ出の日記を色々記入してゐる中に早くも峠を越えて、日本海岸へ出た。間もなく正明市に着く。又乗換いよ／＼萩の勢力圏へ歸つた。大津郡方面の人は懐しの故郷へと下關方面へ向つた。我々は間もなく上り列車に乗り一路萩へと向つた。友達は大分減つた様である。三隅、三見と過ぎれば、汽車通學の人が大分下りた。中にはお母さんが待ちに待つたといふ様な顔附で微笑を湛へて迎へに出て居られた人もあつた。いよ／＼汽車はトンネルを幾つも通つて萩に入る。水は實に澄んで清い。僕の第三の成長地否祖先以來の故郷である。玉江着。四時四十一分。校長先生、久永先生のお出迎を受け萩博用テント内で萬歳三



山口聯隊入營記

五年 河村 定一

四月十六日 火曜 晴

新緑の指月を後に列を作つた四臺のバスは阿武川の岸を進んでゐた。「あゝ」吾等待望の此の日は遂に來た。今から四日間軍隊生活するのだと思へば我知らず胸は高鳴る。午前十一時十分。山口着、第三バス遅れ、之を待つて正午零時半、三少隊を編成して堂々兵營に向ふ。萩中三十回卒業の藤田軍曹が吾等のために指導に當られた。「歩調をとれ」「頭右」おゝ吾等は此處に聯隊衙門をく

つたのである。仰げば右手にそびゆる時計塔、茶褐色の廣い練兵場に春光あざやかな整然とした芝生。赤瓦の舎兵總てが軍隊にふさはしい四角ばつた有様にも似合はぬ櫻がほゝゑんでゐるのは美しかった。

聯隊本部の菊紋章に敬禮、つゞいて原田中佐聯隊長挨拶終りて各小隊はそれ／＼屬する中隊の兵舎に向ふ。吾等一少隊は一中隊にかり河村上等兵の班に入る。

午後三時、聯隊の後方丘の中腹にある將校集會所に行つて教官、軍事訓話、所内見學、終れば軍隊夕食。運ばれた

バグの蓋をとつた時の香、否臭氣のこげくさい事、誰でも面喰はざるを得なかつた。それでも空腹に耐へられずがつ／＼と見る／＼平らげた。ニウム臭い大きな皿に山盛りの飯とニウム皿へ茶が一ばい。言譯に澤庵が二きれ三きれ。毛布にもぐり込んだのが九時。三十分交代の不寝番が出て行つた。窓越しに淡い電燈の光が淋しく漂ふてゐるのが見えた。かくして慌しい軍隊生活の一日を終へた。自ら湧く強い感激に何となく自分を一兵士とおぼえる様だつた。河村上等兵の軍事に關する話を聞きながら薄暗い質素な兵舎の中に眼をつむつた。早や大駟が鳴るのが聞えた。

五年 香川 朝政

四月十七日 水曜 晴

ふと眼が覺めた。窓際に腕を伸ばして星明りにすかして見れば時將に午前三時三十分。まだ外は暗い。窓外にはぼんやりと外燈が二つ、淋しく闇を照らしてゐる。周囲の森もしんとして唯眠つてゐる。實に静かだ。周囲の寢臺からは和やかな駟が聞えて来る。と、ばたり／＼と不寝番がま

と心に叫んで第二弾の發射にとりかゝる。五發位直ぐだ。そして終つたのが午後一時過ぎ。一同少し後に退いて重機關銃の射撃を見ながら飯盒の飯を食ひ、歸隊したのは午後二時過ぎだつた。それから武裝を解き銃の手入をすますと少し暇が出来た。然し楽しみにしてゐた酒保は今日は販賣停止だ。午後六時には班長殿につれられて一同入浴した。

やがて午後七時半、再び武裝して營庭に集合し、後方の練兵場で夜間演習を實施した。生憎の月夜で、満天には無数の星がきらめき、満月に近い月はこの假の戰場を隅々までも照らしてゐた。さすがに夜は寒く、冷氣が體に浸み渡る全員敵味方に分れ、我が軍は山本先生の指揮を受けて場の東方平地に陣をとり前方に歩哨を立てた。敵は池田先生の指揮を受け西方の暗い森に立籠つた。と黒い塊がかすかに二つ三つこちらに近づいて來た。さてこそ敵の斥候だ。油斷するなと各自が心を緊きしめる中にそれらはやがておぼる月夜の戰場の一隅へ消えて行つた。かくする中に機は熟し、味方は一せいに敵陣地へ襲ひかゝつた。かちりとも音をさせない黙々る襲撃だ。息が切れると。忽ち命令一下我

わつて來た。その去つた後は又もとの静寂に歸つた。何時の間にか眠つてしまつて、再び目覺めたのは、午前五時だつた。やがて五時半、營庭から起床ラツパが曉の空気を震して響き渡る。とたんに今まで静かだつた中隊内が一變してどたんばたんと騒がしくなる。直ちに營庭に躍び出して朝の點呼を受ける。歸れば直ぐに室内の掃除だ。夜具もきちんとたゝむ。洗面がすめば又直ぐに食事の用意だ。馴れないから。びく／＼ものでとても時間が掛る。どうやら食事がすむと聯隊の銃を受取り、武裝して七時半中隊前に集合。聯隊本部前で顔見知りの原田中佐殿の御訓辭を受け、やがて天谷聯隊長殿からも御訓辭を受けた。後は直に裏門から出て練兵場の側を通つて射撃場に行き豫定通り實包射撃を行つた。發射彈五發距離二百米。始めての事で内心びく／＼したがすんでしまへば何でもない。引金をかちりと引くとぐつと銃床が肩を押し銃口がぼつと紫の煙を吐く。音は聞えない一瞬我知らず眼をつぶる。開いて見ると銃口が他所の方を向いてゐる。「失舞つた」と思つて標的の合圖を待つと、やがて出たのは意外にも命中だ。「しめた」

が軍は猛虎の如く敵陣へ突入した。しばらくの間は敵味方の喚聲で静かだつた陣地はわめき上つた。この戰鬪で面白かつたのは兩軍の斥候が衝突して大格闘を演じた事だつた。月夜とは云つても二十米も遠の方はよく見えないのだから此の戦は見逃してしまつたが、後で聞いて見ると、その爲に名譽？の負傷者及び瘤を拵へたもの、又投げられた者は數名あつた。かくして演習は九時に終了し一同歸隊すると間もなく九時半の消燈時間が來た。かすかなラツパの音に合圖に中隊は間もなく暗に包まれ數十名の昨日入隊したばかりの新兵達は思ひ／＼の夢路を辿つた。

五年 杉原 大泰

十八日 木曜 晴

起床ラツパの音と同時に我々はベッドを蹴つて直に營庭に集合した。もう隣の中隊では整列を終つて居た。朝の空気が冷たく寧ろ寒氣がして來る程だつた。我々も整列を終へて點呼をすませラチラ體操をやり、其後東方遙拜、郷里遙拜をし各々營内に入りてベッドをあげ掃除をすませ當番

の者が持つて来た。飯を分配して皆そろつて大聲で「戴きます」と云つて食事を始める。始めの内は少し臭氣を感じたが慣れたせいかなんともなく大變美味しく食べ終つた。

七時半舎前整列。上等兵の引率のもとに營庭に出て各々空砲七發をもらひ受けた。それから軍用犬見學。狼の親類らしい凄い奴が盛んに吠えてゐる。いろ／＼な事をやつて見せたがまだ／＼訓練不足のせいか充分ではない。その前に軍用犬附大尉より軍用犬について種々古代より現代に至る迄の話聞いた。大尉は又日本に於ける軍用犬使用がまだ／＼世男の他の國々に劣つて居るから須く軍用犬飼用を獎勵す可く話された。その後練兵場に行き鐵條網を切る所を寫眞に取り白兵戦をやつて我々は防禦軍で敵を防いだ。それも寫眞に撮りその後一同雪舟の庭と云ふ所へ行き氣を落ちつけ、次に陸軍協同墓地參拜、身命を捧げて陛下の爲に働き名譽の戦死を遂げられた我々の先輩の墓前に行く感涙自ら出さるを得ない。一同「捧げ銃」をして後其處を下つて再び營内に歸り晝食。晝食後市街戦をやりつゝ龜山公園へ行きそこで一度白兵戦をやり、後しばらくそこで休んだ

然し後から考へる三日間は短い。思ひ出せば此所へ来たのも昨日の様な氣がする。實包射撃も、夜間演習も、戦闘教練も。誰もこんな事を思つて居る時に鳩班のボツボ軍曹殿がさも懐かしさうに尋ねて來られた。皆も別れを惜しみ、武裝姿となつて外へ出る。誰も彼も皆自發的に寢具をそろへ草履を並べたが此所にも兵營生活の一面が表はれたのだ。營庭に出でやをら四方打眺むれば白壁赤煉瓦の兵營も入營第一印象とは大分趣を異にして見えた。始め誰かの言つた博覽會の會場の様な無味乾燥に見えた兵營も一種の懐かしみを持つて眺められ、緑に染む楊柳、若草燃ゆる芝生、咲き匂ふ櫻花皆すべてが春になつて蘇へつた様に我等の精神を確かに覺めた様だ。

整列を終へて後聯隊長殿の御訓話のある事となつて居たが、時間も切迫して來たので出發する事とした。時計臺の時計は八時三十分を示し營庭には微風の中に機關銃隊の訓練が盛んに續けられて居た。歩武堂々山口歩兵第四十二聯隊の表札の掲げである營門を出た。我々五年生は既に兵營生活を味はつて短かいとは言へ三日間非常時日本の危急を

その後教官、藤田軍曹殿等からいろ／＼の話を聞き再び歸營して夕食をし、各自勝手に行動をして九時半の消燈ラツパと同時に床についた。晝の疲労で皆ぐつぐつと寝込んでしまつた。

五年 福田 寛 雄

四月十九日 金曜 晴

「起床」誰かぐかう叫んで跳び起きた。あちらでもこちらでもがや／＼と物騒しい音がする。營庭に走り出れば未だ起床ラツパは兵舎に反響しながら鳴り渡つて居た。最初は大分整列も遅れたが今では兵と同じ位、否より速く整列する事が出来る様になつた。「學生班、總員二十八名、事故無し、番號」と叫ばれる藤田軍曹殿の聲に應ずる「一、二、三……」の番號に意氣の籠つて居る事よ。僅かの間の訓練とは云へ習慣の力の強さで今では學生班も相當なものだ。然し折角兵營生活がわかりかけた時は、麥飯の味に慣れた頃はもう歸萩しなければならぬかと思へば何だか物足りない様な氣がしてはならない。演習の一日は長かつた

覺りつゝ暮したのである。或は之が最初で又最後の兵營生活をした人もあらう。又或ひは兵士として再び入隊する者もあらう。或は無言の勇士となつて營門をくぐるかも知れない人もあるに違ひない。感慨無量の中自動車を持つ。

随分自動車を待つた擧句三臺に分乗して九時三十分鴻城の地山口を後にした。兵營の第一印象、食事、實砲射撃、陸軍墓地參拜、夜間演習、戦闘教練、不寢番、或ひは談笑にすぎた夕、中隊の七不思議、或ひは校歌を精一杯どなつた事等々、次から次へと走馬燈の様に念頭に浮かんで來る。佐々並で一休みした後一路萩へ。おゝ懐かしき指月山が見える。鐵橋が家並みが：出發にも増して一同勇氣凛々事故もなく唐樋に到着。直ちに隊伍整然と懐かしの中學校へ、正午中學校着。校庭に整列、番號、報告、その聲は腹れて居るとは云へ元氣が溢れて居る。僅か三日の訓練にも拘らずその收獲は必ず少くはなかつた。緊張したその聲、日焼けしたその顔油と埃にしみた服、皆元氣そのもの、様だ。校長先生始め諸先生の御顔には軽い微笑が見受けられた。下級生も珍しさうに並んで見て居る。



校報

第三十五回卒業式

昭和十年三月四日午前十時より第三十五回卒業式を講堂に於て舉行す。生徒父兄及保證人並に來賓多數の着席あり。河内校長學式の辭に次ぎ勅語奉讀あり。次に卒業證書及び賞品授與ありて學校長の告辭知事告辭辻野總務部長代讀。父兄保證人を代表して田邊護氏の挨拶あり午前十一時に終了す。當日卒業生にして受賞せる者左の如し。

新谷 幸治
一、一等賞(學力俊秀にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
本石獨芳 西本 實 能美忠廣
岡敬太郎
一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を守り皆(精)勤五箇年に及べる者)
森本英男 藤田 茂 北田松太郎 市川和夫
一、三等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者)
林 茂夫 河内義助 福田民部

一二四
松浦二郎 藤本盛人
一、四等賞(本學年間皆勤し伍長(室長)となりて能く其の任務を盡したる者)
松尾美勇 田中達樹 辻田稔次
山口 實 中川修二 吉賀 暹
湯淺利夫 三村 巖 相島義夫
藤井四郎 吉屋二郎 中井義正
一、五等賞(本學年間皆精勤せし者)
徳久暢夫 平田佐正 馬屋原良雄
秋田康穂 木村曙巳 金子 順
吉田孝二 津野一二 齋藤治良
伊東邦治 田中哲夫 山崎大作
田邊利彦 森田茂穂
一、進歩賞(同窓會より)
(學年の進むに従ひ成績向上せる者)
秋田康穂
賞品授與式
四月八日、新學年の始業式後、前學年度に於ける第四學年以下の生徒に對し賞品賞狀授與式行はれたり。
一、特等賞(平素勤勉にして能く校則を守り學力俊秀にして伍長となりて能く其

の任務を盡したる者)

四年 石村豊徳 中村五郎 安野 謙 福田寛雄
三年 梅屋 薫 山根忠雄 小橋 安次郎
二年 新谷勇二 林 良夫 久芳 一人
一年 三好誠之 天谷善次郎
一、一等賞(學力俊秀にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 杉原大泰 岡崎寛人
三年 新谷皓俊 藤山昭次
二年 河内壽昭 藤山昭次
一年 森重龍馬 内山 博
一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍長(室)長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 淺野 力 山田正典 山本 利昌 花田博吉 水戸邦男
河村定一 香川朝政 田村 精作 末永 智
三年 熊谷正雄 菟原和平 大藤

威 大山喜義 岡村大一郎
竹内周二 田村正好 有田 靖 小河 博
二年 杉山 巖 末永太一郎 森井 深 水津久夫 増山喜一 岡田 清
一年 馬屋原貢 吉富敏郎
一、三等賞(本學年間伍(室)長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 能美陽一 淺原昌佑 貞本尙 山中健一 末永一雄 吉屋 竹治 弘中正雄
三年 新谷保治 吉村安時 松本 武壽
二年 土屋康紀 藤田 坦 大野 政雄 伊藤 準 林 克己
一年 山田松華 小野七太 波多 野保 本巢好隆 岡 忠雄 田中 寛 古谷佐一郎 松岡 晃雄 伊藤武次 正木 博 守永強一
一、四等賞(本學年間皆精勤せし者)

先生の更迭

昭和九年十一月以後
▲津村先生 昭和九年十一月十五日和歌山縣立日高中學校に御轉任
▲植村先生 昭和九年十一月廿二日御新任 國語科武道科御擔任
▲近藤先生 昭和十年七月一日御新任 支那語科御擔任

校誌 (自昭和九年十一月至昭和十年十月)

- ▲十一月二日 卒業生淺原海軍少尉の講演後小畑松本方面にて全校野外教練
- ▲十一月三日 明治節拜賀式體操祭
- ▲十一月五日 第三學年以上第一回統一考查開始
- ▲十一月六日 第二學年以下第一回統一考查開始
- ▲十一月八日 統一考查終了
- ▲十一月九日 第四時限後火災呼集演習
- ▲十一月十三日 教練查閱
- ▲十一月十七日 津村先生告別式 晝休山砲操砲寄贈式
- ▲十一月十九日 第五學年生縣下中等學校聯合野外演習に参加廿日歸校
- ▲十一月廿一日 松陰先生追慕會後松陰神社參拜
- ▲十一月廿二日 防長教育會評議員山縣治郎氏一行御來校御視察 植村先生就任式
- ▲十一月廿七日 萩市青訓中等學校生徒聯合演習参加翌二十八日午前七時より

引續き参加正午終了す

- ▲十一月廿八日 辯論大會舉行
- ▲十二月十二日 第三學年以上第二回統一考查開始
- ▲十二月十三日 第二學年以下第二回統一考查開始
- ▲十二月十八日 統一考查終了
- ▲十二月廿四日 終業式
- ▲昭和十年一月一日 拜賀式舉行
- ▲一月八日 第三學期始業式
- ▲一月九日 寒稽古開始
- ▲一月十八日 寒稽古終了後汁粉會
- ▲一月十九日 武道大會開催
- ▲二月七日 第三四學年第一回統一考查開始
- ▲二月八日 第二學年以下第一回統一考查開始
- ▲二月十一日 紀元節拜賀式舉行
- ▲二月十二日 第五學年統一考查開始第四學年以下統一考查終了
- ▲二月十三日 高橋學務部長御來校御巡視
- ▲二月十八日 第五學年統一考查終了

- ▲二月廿七日 第四學年第二回統一考查開始
- ▲三月四日 第三十五回卒業式舉行
- ▲三月六日 第四學年第二回統一考查終了
- ▲三月八日 第三學年第二回統一考查開始
- ▲三月九日 陸軍記念日岡本大佐の軍事講演あり第二學年第二回統一考查開始
- ▲三月十一日 第一學年第二回統一考查開始
- ▲三月十四日 統一考查終了
- ▲三月廿三日 終業式
- ▲三月廿七日 入學考查開始
- ▲三月廿八日 入學考查終了
- ▲四月八日 新學年始業式新入生入學式
- ▲四月九日 伍長室長任命式
- ▲四月十日 新舊生徒紹介式
- ▲四月十二日 學級自治會
- ▲四月十五日 志都岐神社參拜
- ▲四月十六日 第五學年生山口聯隊入營十九日

歸校

- ▲四月二十日 全校生徒油谷灣より軍艦伊勢に便乗濱崎に上陸す
- ▲四月二十二日 本日より毎週月曜日に東方遙拜を行ふ
- ▲四月二十三日 招魂祭參拜
- ▲四月廿九日 天長節拜賀式萩市體育聯盟主催陸上對技競技會舉行
- ▲五月一日 第四五學年辯論小會
- ▲五月二日 第一二三學年辯論小會
- ▲五月四日 山口高専主催陸上競技大會に出場翌日歸校
- ▲五月十二日 全校一日遠足舉行
- ▲五月十八日 山口高専主催籠球試合に選手出場
- ▲五月廿二日 火災呼集演習
- ▲五月廿五日 大楠公記念講話後松陰神社參拜
- ▲五月廿七日 海軍記念日粟屋海軍中佐の講演あり
- ▲五月三十日 行啓記念競技大會舉行
- ▲六月八日 山口高専主催水上競技大會に選手出場

六月十三日

- ▲六月十三日 第二學年以上第一回統一考查開始
- ▲六月十五日 第一學年第一回統一考查開始
- ▲六月十七日 統一考查終了
- ▲六月廿六日 縣下中學校體操會開催
- ▲七月四日 近藤先生新任式
- ▲七月十日 第二學年以上第二回統一考查開始
- ▲七月十一日 舊職員安藤紀一先生の葬儀に各學年代表參列す
- ▲七月十二日 第一學年第二回統一考查開始
- ▲七月十六日 統一考查終了
- ▲七月十八日 武道大會舉行
- ▲七月二十日 終業式
- ▲九月二日 第二學期始業式
- ▲九月八日 第三五學年生保證人會
- ▲九月十三日 縣體出場水泳選手壯行會
- ▲九月十五日 萩市體育聯盟主催武道對抗競技に選手出場

九月十六日

- ▲九月十六日 防空演習舉行
- ▲九月十八日 第二回防空演習舉行
- ▲九月廿七日 山口縣體育聯盟主催體育大會出場選手の壯行會舉行翌廿八日山口に出發
- ▲九月廿九日 山口縣體育聯盟主催體育大會開催
- ▲九月卅日 縣體出場選手の狀況報告會
- ▲十月三日 林龍太郎氏の御講演あり
- ▲十月十日 學級自治會
- ▲十月十八日 第三十六回創立記念式後競技大會開催
- ▲十月廿三日 第二學年以上第一回統一考查開始
- ▲十月廿四日 第一學年第一回統一考查開始
- ▲十月廿六日 統一考查終了
- ▲十月三十日 第四五學年生聯隊對抗演習に参加 午前一時本校庭出發 第三學年生以下は見學の爲午前七時半玉江發演習地向ひ午後三時歸校
- ▲十月三十一日 勸語奉讀式正午東伏見宮妃殿下を萩驛に御奉迎申上ぐ
- ▲十月三十一日 勸語奉讀式正午東伏見宮妃殿下を萩驛に御見送申上ぐ



校 友 會 報

向つても一段の努力を望みます。小學校の部では、兒童ののび／＼して無邪氣な書き振は、一層心強く感じた。

終に臨んで、今夏明倫小學校に於て行はれた書道講習會での辻本先生の御話の一部を、御参考迄にのせて見ませう。

「書道は靜の修養即ち自己反省の機會を與へ、そして吾人を靜の狀態におくものであつて、功利的にする爲ではない」とそれで吾人は、書道の精神的の價値を自覺し、人格の修養につとめたいものであるります。(杉山記)

書 道 部

九月八日、第二日曜日、我が展覽會の日だ。

此の日は一層の白雲天空を蔽ひ、指月の北風に砂塵混りて天候に恵まれざる日ではあつたが、觀覽者陸續として後を絶たず全くの盛會であつた。

我が書道部は五ノ二、四ノ三、三ノ三の教室を會場に當てた。第一會場の五ノ二組には、部長先生並びに生徒夏季休暇中の血と汗の逸品、一二等賞を陳列した

書 道 部

天高き九月七日、例年の如く第五年生及び第三年生の父兄保證人會を機として大展覽會が舉行された。此の日は日曜日に加ふるに天氣清朗にして、絶好の展覽日和であつた。午前八時より會場を開放して、午後四時迄一般の觀覽者に対して一齊に製作品を展覽に供した。

書道部は、第四學年二組の教室を以て平素の清書又炎熱の節ペンを走らしたべし習字帳などが、成績品として陳列され三年三組の教室を以て、小學校の出品物を陳列した。在學生の分を一部と二部に分け、一部を今の三年生、二部を今の二年生とした。そして平素の清書は、優

秀なるものを選抜して一、二、三等に分つた。この名譽ある一等は、二部に於ては河村康一君に授與された。あの河村君のねばり強いつつたりした書き振は、さすがに吾人の眼を引かずにはゐられなかつた。又一年生には此二三年來、名譽の一等を見なかつたのは甚だ遺憾である今一段の努力を切望する次第である。一般に出品物の成績が、年々進歩の跡を示すとは云へ、まだ尙進歩の餘地は多く、決して／＼是を以て満足と爲す事は出来ないでしやう。時代は日々に進み、特に近年書道と云ふ言葉が熱心に唱へられて來、又書道の重要性がだん／＼世間に知られる様になつて來たので、此の方面に

面笑を禁ずる能はざるの狀態だ。然し其の無邪氣そのもの、中にも出來榮え群を抜き、本校作品に肩を並べんとする概あるのもあつた。

地 歴 部

斯く我が書道部は本展覽會の一部として觀覽人の心を驚嘆させ、或は優雅にし或は快氣を覺えさせて、午後四時全く盛會裡に閉會した。(梅屋記)

燦々たる陽光の下、緑の世界未だ去らず、絢爛を咲き競ふ美藝の秋、九月八日曜日、例年の如く第五學年及び第三學年の保證人會を期として、茲に盛大なる萩中學校生徒成績品展覽會は舉行せられたり。此の日は日曜日に加ふるに青天白日を以てし絶好の展覽會日和にして、萩地より觀覽に來る者、數を知らず陸續として後を絶たざりき。

我が地歴部に於ては三ノ二、四ノ一の二教室を以て夫々地理科、歴史科の作品陳列に當てたり。

成績品は主として研究物、年表、繪畫肖像畫、模型、地圖等にして、概して成

先づ目を魅くものは何んといつても、正面の部長先生の油繪だ。續いて一等入選の三年生の阿武君の雄大な筆使の自由な靜かな景趣溢るゝ風景畫、並びに一年生の松野君の巧妙なタツチ落着のある田中君の靜物、將亦精密其のもの、四五年生の製圖、其の苦心と努力の跡、一つとして觀る人をして讚嘆なき能はざらしむ。其の他二等作品も皆夏休の努力を物語る至美眞美のものだ。吉富君の油繪も觀客を魅いて居た。

歩を第二室に入れる。即ち四ノ二の教室だ。此處にも眞美の世界歴然として開け、一快會場に入選作品を網羅す。

それ或は山水登臨の美を極め、人物の盛麗を誇り、或は雄大なる都市の景を寫せるありて、觀る人をして、或は寛閑之野寂寥の趣に遊ばしめ、或は四遊の衝舟車の會に遊ぶの感あらしむるものばかりだ。

惜まるゝ歩を、第三會場小學兒童作品展覽會場に移せば、一轉！今迄の高尙典雅、雄健の一面は是れりとか、童色溢

績優良昨年及び、それ以前に比して一入の満足を加ふ。總て巧に正確精密極致刻苦、一として努力の結晶ならざるはなく進歩の跡歴然たるものありき。實に慶賀に堪えざる所にして、觀者をして歎稱擱く能はざらしめたり。

地理科の陳列作品は先づ模型を第一とし地圖之に次ぐ。特に本年は模型に於ては、天下に名を成す萩中の模型として辱かしからざるもの、その過半数を占め、益々その特種獨特性を發揮して、以て大いに萩中の爲に氣力を擧げたり。等級差衡の際何れとして優劣を定め難かりしが爲め、我々は非常に苦心をしたる程なりき。本年度に於て特等賞を獲得したる箱根附近の模型地圖の如きは唯々感嘆の外なし。

歴史科は特に肖像畫に於て優をなす。その他の繪畫、年表等に於ても、昨年に比して數段の進歩をなしたり。只、研究物の少數なりしことは甚だ遺憾なりき。來年度よりは進んで之に應ぜられんことを望む。

思ふに我が部は諸君の熱烈なる努力に依つて今日の盛況を見るに至りしも、未だ進歩の餘地は無限にして、是を以て満足と爲す可きにはあらず。今一層の研究と努力とを拂ひ、青年の英氣溢るゝ純眞の作品を多数出品し、更に、更に、堅實なる進歩を見られんことを切望して止まず。(安野記)

理科部

九月八日、(日曜日)、第三、第五學年の保證人會を機として我等の展覽會が開催された。此の日は多少の風あるも全く展覽會日和で一點の曇もなく澄みわたる。觀覽者は開場時間を待たずしてどつと押し寄せた。我が理科部は實驗室と階段教室を以て當てられた。今年も昨年のそれに比して頭角を抜いた優れた作品が見當らなかつた。比較的立派な製作品としては扇風機、ラヂオ、軍艦模型、機關車模型であつた。殊に菽中理科部の爲に大いに受ふ可きは近時生徒ので研究心の向上が沈滞した様に思はれる。製作品の中でも此れが暑中休暇四十日間の努力

競技部

第五回 菽中 陸上競技對抗試合

(菽市體育聯盟主催)

昭和十年度菽中競技界の劈頭第一を飾る第五回、中、商、青、陸上競技大會は春も將に暮れんとする四月の二十九日、目出度き天長の佳節を卜して行はれた。場所は古き傳統を誇る我が懐しき母校のグラウンド。此の日や折悪しく天候に恵まれず、午前には遂に雨を見たが、やがて晝前に至りて止む。

午後零時半、選手入場式と、もにいよ／＼の戦の幕は切つて落された。先づ最初はフキールドでは砲丸投、トラックでは百米第一豫選。續いてハイジャンプ、四百米第一豫選。而して砲丸投で一舉十五點を、ハイジャンプでは十點を得て我は斷然菽商、青年をおさへた。されど各種目の進行につれて彼、菽商も奮闘に奮闘を續け、遂に終りの四百米決勝と、スエデン競走とによつて彼我の勝敗を決せ

の奮闘を誓ひます。次に本校の得點表、出場選手名を掲げて筆を

擱きます。(香川記)

順位 一等、菽商 二等、菽中 三等、青年

種目	入賞者	等級	得點
100m	泰郎 大五 原村 杉中	2.6.	6
400m	泰男 大三 原野 杉杉	6.3.	5
1500m	安春 田 豊	2.	5
5000m	一 定 河村	4.	3
スエデン競走	之郎男 敬之博人 泰由五三 由長 大 貞吉 征 夫世逸 泰男	2..	3
砲丸投	長 大 貞吉 征 夫世逸 泰男	1.3.4.5.	15
ハイジャンプ	貞吉 征 夫世逸 泰男	1.5.5.	10
ブロード	大三 原野 杉杉	1.6.	7
總得點			54

んとするに至つた。頑張れ、我が選手諸君よ！ 負けるな、菽中！ 然し勝利の神は我を見放したのか、四百米決勝に於ては、我が選手の健闘も空しく、彼は一舉十六點を奪ひ、我は僅かに五點を得たのみ。駄目だつ。選手諸君 次のリレーで頑張つてくれ。頼むつ。然し、嗚呼然し、運命の神は何處迄我に皮肉なのだらう。最後の頼みのスエデン競走に於ては菽商のトップ松岡君がスタートの直前でバトンを取落し、我は三十米餘もリードしたにも拘はらず、最後には我は二十米餘も追ひ抜かれ、遂に敗れてしまつた。嗚呼萬事休す。今度こそは、と意氣込んだ此の戦も遂に我等の敗北と歸した。僅か七點の差で。事此處に至つては溢るゝものは只涙。

然し、負けぬぞ好敵手菽商よ、まだ關西もある、縣體もある、我等は誓つて今日の恥をそぐぞ。思へば選手諸君よ、よくやつてくれた。又應援團諸君よ、諸君の御熱投に對して深く感謝します。又先報諸兄にも。かへす／＼も我等は將來

- メンバー
- 百米 杉原大泰 中村五郎 時山元行 (五年) 杉野三男 (三年)
 - 四百米 杉原大泰 田村由之 (五年) 杉野三男 (三年)
 - 千五百米 河村定一 (五年) 豊田安春 (四年)
 - 五千米 河村定一 (五年) 日溪毅負 (四年) 師井淳吾 (三年)
 - 砲丸投 田村由之 阿武博 三本長人 原大泰 (五年)
 - ハイジャンプ

山本長人 瀧口吉世 長野征逸(五年) 林良夫(三年)

杉原大泰 中村五郎(五年) 杉野三男(三年)

關西陸上競技大會記

昭和十年五月五日、第十回近縣中等學校陸上競技大會は山高グラウンドにて舉行さる。思ふに萩聯合大會に敗北の涙を飲みてより未だいくばくもなし。必ずや勝たんと必勝を期す吾等選手の意氣、天をつくものがあつた。

午前八時入場式あり、國旗掲揚、會長式辭、選手宣誓等型の如くにして直に競技に入る。トラック、フィールドを並行して進む。本大會の皮切り、百米第一豫選には五年杉原、中村四年、有田の三君我が校の代表として全力以て萩中名譽の爲に戦ふ。A組、C組に入りたる有田、中村兩君玉碎す。杉原君D組に入りて輕く入選したるはかねて歎なき所なれど、吾等のよろこび大なるものあり。フィールド砲丸投には、縣下の古豪を

1である。鴻中、徳商、關中、何ぞ恐るゝに足らん。セーブして走れば輕く入選。

かくして午前の競技は晝の休憩に移る午前中得點、我校十五點。萩商二、山師八、防中七。

槍投を以て午後の部に入る。滿場緊張の雰圍氣に幾條もの銀線がゆるやかな弧を描いて綠草から綠草に流れるはげに美觀たり。田村君がんばりしも成らず、體の不自由のため詮方なし。

百米決勝、自信に満ちし杉原君、萩商松岡君、下商石丸君等の俊足と伍してぐんぐんがんばりしもスタート悪しきため勝を松岡君に譲りて三着、然し未だ向ふところ二百米あり。一時二〇分千五百米には豊田君期待に負かず見事なラストを以て遂に三等に入りたるは之又驚異。

フィールド三段跳決勝には五年瀧口、長野兩君、並に三年林君又も大奮闘をなし、も及ばず一三米五二の萩商大草君優賞す。二百米決勝には又も杉原君、その技術を發揮せんとせしも前半の不調のた

ほこる田村、阿武の兩君と更に柔道部猛者山本君の、三巨軀天晴れな奮闘を見せた。田村君春以來體をいためたにかゝはらず相提携して涙ぐましき勳をなす。山本、阿武の兩君努力なりて一二等を獲得すれば、我劣らじと投げたる田村君、又四等に入りて一舉九點を得、吾等が幸先を祝ふに充分だつた。山本君の優賞は本大會の榮ある我等が部旗掲揚の劈頭を飾つた。「萩中」部旗が鴻城原頭ひるがへり、我が校歌が春空を流れ渡つたときの歡喜、涙が出た足の地につくのも忘れず。吾等はこゝに大なる光榮と力を得た厚く山本君に感謝す。

時を同じうして走高跳あり、五年龍口長野三年林の三君いづれも良く跳ぶ。弱冠なれど林君、天賦のバネを利用して見事、關西の歴々をのして三等とは天晴れ瀧口、長野兩君の奮闘目ざましきものありしも破れたるは返すくも残念。

八時五〇分八百米豫選 四年竹本、三年師井君輕く入りて吾等のよろこびを加ふ。二百米第一豫選には五年時山、杉原め後半の努力むくひず三着。二時二〇分五千米あり、小生練習不足なるも一點を奮闘して望を達す。

フィールドの最後を飾るボールには吾々多分の期待を持つたのである。三米を練習に跳びたる中村、豊田二君、更に山本君を加へてゐるのだから。時に萩商の二十一點、吾の二十二點。實に伯仲の大接戦。吾勝つか、屈するか、本大會の關ヶ原とも云ふべきボールの戦だつた。我が選手の功なれば吾等の策や萬全たるべし。滿場緊張裡に吾が選手の必勝を誓ひボールを握る。バーは二米六〇より、豊田、山本君好調なれど中村君惜しむべし遂に二米八〇にてくちく。バーは二米九〇。萩商河内山君、山師一人の吾二人と計四人。いづれも劣らず奮戦。バーは三米。四君落ちて更に九〇に下げる。「先づ跳べ」二人一舉八を獲得せば勝算は完全に手中に有り。是が非でも勝て。バー折れていたむ體をひきづる山本君、足をきづついた豊田君二人を見て吾々は泣いた。勇を鼓して戦ふ兩君のために、遠い

四年有田君出場す。有田君C組に入選、杉原君又輕く入る。時山君惜しくも落ちたれど君に望むはハードルにあり。續く千五百米には四年豊田君の奮闘なりて先づ豫選通過す。待ちたるハードルには時山君輕く入る。四年中村君一寸の差にて破る。君のすばらしいフォームを以て來る年への努力を望む。

圓盤投決勝には新人豊田爲之君、巨軀阿武、田村君大奮戦す。田村君、病軀物ともせず怪物力にて物の見事に二等に入れば豊田君も四等に入る。阿武君の落ちたるは残念。

トラック、百米第二豫選には杉原君、萩商松岡君と組み堂々と戦ひて一着十一秒とは實に驚異。師井、竹本兩君の八百米、並々ならぬ奮戦なりしも及ばざりしは残念至極。兩君の前途有望、大なる精進をされんことを。續く二百米第二豫選には杉原君例の好調でおさへて天晴れ。

時に千六百米繼走豫選あり、フアースト豊田君、セカンド時山君サード竹本君ラスト中村君相當がつちりした好メム。母校を思ひ出して、吾々は兩君の優勝を祈らざるを得なかつた。然し万事空しく河内山君最初の跳躍をもつて遂に今日の勝敗は大半彼等が手中に渡つてゐた。山本君、豊田君のベストをつくした奮闘に厚く感謝す。時に萩商二十六點、我が二十五點。

かくなれば最後を全うするが吾等スポーツマンの唯一の任務である。負けてもいゝから之を完成しよう。二百米低障害には關西の雄萩商半田君と組み吾が時山君、豫選なんぞはなんのそで遂に決勝に名のりをあげて奮戦しさすが功を成して三等に入る。

本大會最後を飾る千六百米繼走決勝ボールのかゝりたるは午後の太陽もその力劣へた四時半、斜陽ふみ荒されたグラウンドに今日一日の若きスポーツマンの努力と熱のあとをさらした。バトンタッチも鮮かに萩商、山師、宇工、徳中の六チームに伍して今日の目ざましい奮闘を爲した吾等チームは一段の輝を見せた。萩商チーム辛くも宇工、石田君の追撃をまぬ

がれてテープを切った時敵ながら感激の拍手を送った吾等だった。待望の、感激の、一日は此處に終る。榮に輝く大旗をかざす萩商に、又もその優賞に拍手を送った時の吾等の心は淋しかった。

かくして鴻城の天地は暮れんとす。ボブラが颯々と鳴る重荷を重した様で何とも云へぬ寂寥な心をどうする事も出来ないうで宿所に足を進めた。最後にのぞみ山口高校、高商諸兄の絶大な御後援、御指導を深謝致します。

(河村記)

西日本陸上競技大会記

待望久しかりし榮光の日は遂に來た。山口福岡をはじめ、廣島、大分の各縣を網羅した西日本の此の豪華版、第二回西日本男子中等學校對抗陸上競技大会は梅雨曇りの六月二十四日、下關市外公認長府競技場に開催され、若人の燃ゆるが如き力闘の姿をくりひろげた。

午前八時ラッパ鼓隊演奏裡に壯麗極りなき入場式、引續き一〇〇米第一豫選よ

り競技開始、數日來の雨天のため競技場は濕潤であつたが、未來の陸上日本を背負つて立つ三百餘のアスリートは力走、又好技、豫選より早くも大會記録續出し見事な功績の數々を作つた。此の中に入りて堂々たる力を技倆を發揮したる萩中チームの概略を記す。

種目	出場者名	学年
一、一〇〇米	杉原 大泰	五
一、二〇〇米	杉野 三夫	三
一、四〇〇米	杉野 三夫	三
一、八〇〇米	師井 淳吾	三
一、一五〇〇米	河村 定一	五
一、五〇〇〇米	河村 定一	五
一、低障害	時山 元行	五
一、四〇〇米繼走	杉野 三夫	三
一、四〇〇米繼走	杉原 大泰	五
一、四〇〇米繼走	河村 定一	五
一、四〇〇米繼走	田中 潔	四
一、四〇〇米繼走	時山 元行	五
一、四〇〇米繼走	杉野 三夫	三
一、四〇〇米繼走	杉原 大泰	五
一、四〇〇米繼走	河村 定一	五
一、四〇〇米繼走	時山 元行	五

種目	入勝者名	等數
一、走巾跳	竹本 經夫	四
一、走巾跳	杉原 大泰	五
一、走巾跳	杉野 三夫	三
一、走高跳	瀧口 吉世	五
一、走高跳	林 良夫	三
一、三段跳	長野 征逸	五
一、三段跳	瀧口 吉世	五
一、砲丸投	田村 由之	五
一、砲丸投	阿武 博	五
一、圓盤投	田村 由之	五
一、圓盤投	豊田 爲之	四
一、圓盤投	田村 由之	五
一、圓盤投	杉野 三夫	三
一、圓盤投	中村 信一	四
一、圓盤投	豊田 爲之	四
一、槍投	中村 信一	四
一、槍投	豊田 爲之	四
一、棒高跳	中村 信一	四
一、棒高跳	豊田 爲之	四
一、棒高跳	河村 定一	二
一、棒高跳	河村 定一	二

萩中の健闘成り殆ど各種にその足跡を残した。

第五回山口縣男子中等學校體育大會

たゞけは響くばかりのからりとした秋晴れ、力強い光が東天に渦巻き昇る頃、吾々萩中選手は鴻城原頭に堂々その隊伍を進めた。「ベストを盡くす」「必勝の信念」で戦ふとは吾等が母校に誓つた言葉だつた。感慨無量！見渡すグラウンドには早や緊張の色が漲つて、吾等十七の健兒の面も感激に満ちてゐた。げに絶好のコンディションに伴ふに選手の意氣の旺盛と、吾等は何かしら強い力で引かれる如き感があつた。

八時半、百米第一豫選で、杉原、時山兩君がいづれもそつて選に入りたるを見たとき、吾々は今日の運命の大半が決せられたと思つた。誠に幸先良き今日である。つゞく八百米豫選に師井君殘念にも落ちしも三年の若冠、未來あり。此の時砲丸投の決勝を終へて、阿武、田村の兩君、四、五等をものせば吾軍の志氣大いに上る。古豪の名に負かざる兩君へ厚く感謝す。二百米第一豫選に杉原君又も

入る。田村君の失格殘念である。千五百米豫選には豊田君見事に入りて又々吾軍に歡聲あがる。四百米繼走には杉原、時山の兩猛者と新人田村、寺本の四君もてチームを作る。防中、多中、宇工、鴻中徳商と組み入勝確實と豫想してゐたが案外にも不振、遂に落選す。返す／＼も無念。四百米に竹本君出場せしも振はず。時に走高跳に林君優勝すとの報に接し又々歡喜の聲吾軍控所に滿つ。未だ三年の君である。げに一米七〇とは驚異、未來あり、益々精進せられん事を祈る。百米第二豫選にも安心して杉原、時山君の疾走振りを見る。かくて兩君決勝に入るを得て益々吾軍の威力を強うす。二百米障壁には時山、寺本二君出場せしも何れも豫想通り走れず落つ。實力を多分に持つ時山君の殘念は最も事ながら吾々又此の落選に厚く同情を寄す。十二時、千五百米決勝ありて吾が豊田君難無く走りて遂に四等に入り三點を獲得せば、圓盤投決勝に又々四、五等を田村、豊田爲之の兩君奪ひて五點を加へる。時に師範の二十

種目	出場者名	学年
一、低障害	時山 元行	四
一、四〇〇米繼走	萩中チーム	三
一、走高跳	林 良夫	三
一、三段跳	瀧口 吉世	二
一、棒高跳	中村 信一	三
一、槍投	豊田 爲之	四
一、圓盤投	杉野 三夫	四
一、圓盤投	豊田 爲之	三
一、砲丸投	田村 由之	五
一、砲丸投	阿武 博	五
一、砲丸投	田村 由之	六
一、砲丸投	田村 由之	六
一等六點、二等五點、三等四點、四等三點、五等二點、六等一點。但し繼走三等八點にして萩中得點計五十五點なり。萩商に勝を譲り二等に落ちたりとは云へ選手の奮闘は敵をして恐ろしめるに充分なるものがあつた、吾未來に向つて此のひそんだ力をぐん／＼出して行くのだらう。萩中の強みはそこにある。表面弱く見えるが一團を結成した時初めて統制ある底力を見せるのである。河村記		

八點、萩商二點、萩中二十一點であつた然しトラックに於て宇部工業、萩商業が多數の豫選入勝者を殘してゐる事は吾軍の樂觀を許さざるものであつた。先づかくして午前は大好調。

二百米第二豫選に吾が俊足杉原君、樂に入りたるは誰しも欸はざる所なれど、萩商佐野君を抑へたは又々うれし。千六百米繼走には主を新人に置き、中村、豊田、竹本の三人に、更に重鎮田村君を加へる。山師、防商、柳中と伍して竹本、中村、田村、豊田の順に走し、軽く師範以下全部を壓して一着。決勝への自信更に強うす。二百米決勝では杉原君充分の自信と實力を有せしもスタート思はしからず、ために前半不振なりしも後半のピッチ見事に上リラスト、スパート効を奏し堂々三着に入る。二時、五千米決勝のコールがかかる。河村、田中の兩君その責任を果さんと大いに頑張る。こゝ數年委を見せなかつた長距離が此の一二年最も有数の頼みある種目と變つてしまつたそれだけに重大な責任があつた。河村不

調なりしも田中君の好調に合して後者三等に入れば前者五等に入りて一舉六點とは物凄。續いて百米決勝。之こそ關西粒選りの猛者連ばかり、山師藤津、萩商佐野君等と肩を比して萩中杉原、時山兩君の英姿は輝く號砲と共に躍り出す六つの砲丸！然し杉原、時山兩君のスタート悪く後半ぐんぐん追ひつめしも遂にゴール。かくして五、六等の計三點を増す。四百米繼走に意外の失敗を見たがトラック最後に殘る千六百繼走には最善をつくすべく田村、豊田、竹本、中村の四君、強い自信をほめかせば吾等安心して見送るを得。

山師、宇部工業、萩商、下中、山中とげに強敵ぞろひ。竹本君無理せず走つてバトンには中村君に。棒高跳決勝中の君ながら勇氣百倍遂に走り終へて田村君にバトンは渡る。田村君巨軀物ともせず走る。豊田君にバトン移る頃、吾チーム五位を得六位を引きはなす事はるか、豊田君あせらず四位を追ひしも距離足らず、惜しくも勝ち得ず。然し豫想以上の好成績を收める。かくしてトラックは終る。各得點を見るに宇部工業三十九、萩商三十六、萩中三十四。實に本年度關西大會と全く運命を辿つてゐる。吾等の胸が騒ぎ始めた。唯二點ぐらひで萩商業に負けるものか、宇部工業が何だ、然し宇部工業に勝つためには六點を要する。之ぐらひどころにかなつたらうにと思ふが、今更何とも出来ぬ。三段跳で西日本に鳴らした瀧口君もコンジイション悪く、遂に葬られてしまつた。唯一つ殘るは豊田、中村兩君の棒高跳のみである。兩君とも充分の實力を持ち安心して良い筈だが關西大會の運命を考へるとき又々不安が襲ふ。

二米六〇、七〇、八〇、九〇、何の苦もなくオーバーす。然るに九〇を越す者七人、勿論吾が兩君は加はつてゐる。四米で山師、防中の二人オーバーし他の五人落ち、更に九〇より決勝争ひをする。第一回目豊田君落ちて他又皆落ち、三回目豊田君越せば皆オーバーす。パーは四米。豊田君軽く越し、中村君越し、一人

落ちて遂に二人共決勝に入る。之でどう見積つても三點は拾ふ。かくて年來の宿望萩商征覇成る。三米五に上り豊田、中村兩君共オーバーすればあゝ我勝てり。七點を輝かして遂に宇部工業を二點リードす。満場の觀衆吾軍に拍手を送れば吾等唯涙のみあり。やがて先輩の音頭と呼びさまされて夕陽沈む。鴻城原頭に吾が記念歌が感激に振へてひびく。マイルリレ一の疲労も物ともせず、健闘、又健闘の中村君見事中村君を助けて功を奏した豊田君兩君の面も感激の涙が溢れた。何とうれしい勝利だらう。我等は此の榮ある大會に縣下中學校の何れにも勝つた。吾等は勝利者となつたのである。感慨無量唯とめどもなく涙が出た。あゝ又あの太陽が渦巻いて西山に沈んでゆく。本大會出場の吾々選手に多大の激勵と指導を下さつた山口の多數の先輩諸兄に厚く感謝します。本大會出場選手名を左に記して筆を擡く。河村記

百米 杉原大泰 時山元行

二百米 杉原大泰 田村克介
四百米 竹本經夫
八百米 師井淳吾
千五百米 河村定一 豊田安春
五千米 河村定一 田中 潔
低障碍 時山元行 寺本 豊
四百米繼走 杉原大泰 時山元行
田村克介 寺本 豊
田村由之 豊田安春
竹本經夫 中村信一
田村由之 阿武 博
田村由之 豊田爲之
瀧口吉世 林 良夫
走中跳 田村克介 林 良夫
三段跳 瀧口吉世 寺本 豊
棒高跳 豊田爲之 中村信一
マネジャー 香川朝政 弘長

籠球部

春季山口高等商業學校主催籠球大會
新緑薫る五月の中旬山口高等商業學校主催にかゝる近縣中等學校籠球大會は同校校庭コートに於て開始された。参加校は十三校で縣外よりは廣島市商

及び同日の優勝校松江中が來たのみで他は全部縣下の中等學校であつた。吾が萩中チームは試合の前日、十八日齋藤先生引率の下に萩の地を校長先生以下諸先生の御見送を辱うし八時半出發、十一時半頃山口に着く少時休み午後高商コートに行きバス及びビシユートの練習を行ふ皆元氣旺盛戦わずして敵を壓するの感あり。

明くれば十九日六時起床、野田、豊榮兩神社に参拜必勝を誓ふ。七時半に入場プログラムはと見ればA組の一番始めで宿、敵防中と組んで居るではないか我々選手間には防中打倒の聲がもれ始めた、愈々八時合圖の笛の音と共にボールは投げ上げられた。吾がチームのセンター三隅田君懸命にジャンプしてボールを取る然しながら敵もさるものにて見事なカット及びパスワークによりて我等の奮闘の土臺をくつがえす。然し我が選手は屈せず奮闘又奮闘！(試合の進行順序の狀態は一々と書くまい)しかし體力、技術の相違は致し方なく遂に五八對十二の大差

を以つて破れた。選手一同は泣いた然し泣くな男だ、この敗を一つの尊き體驗となし秋の縣體育大會には是非とも優勝するのだ。つら／＼この敗因を考ふるに先づ第一に選手に學年のあまり差のあつた事だらう、故に少しチームワークが取りにくかつたのであらうが、然し選手一同は元氣よく愉快に闘つて呉れた。決して我が校には他校より劣る所はなかつたと思ふ。ちなみに擧ぐれば同日のA組の優勝校は防中であつた。最後にメンバーを擧ぐれば、

C 三隅田 F 北村 G 石谷
新谷 横田
河内

末筆にあたりて松井先生其他先輩諸氏に感謝の意を表して筆を置く。弘中正雄記
山口縣體育大會

主催縣下中等學校體育大會

縣下のスポーツ界の王座と仰がるゝ縣體育大會主催縣下中等學校體育大會は九月廿九日、初秋の候冷ややかに鴻城の原頭高商グラウンドに於て花々しく開始せられた。此の日前日より氣付かわれて居た

天候も良好のスポーツ日和と歸し又選手一同も元氣旺盛であつた。我々籠球部員はマネジャー共に十名諸先生及び生徒諸氏の熱烈なる御見送を受け二十八日午前十時必勝を期して山口に向ふ。途中元氣で十二時頃山口着少時休憩の後高商コートに練習に行く。一同元氣旺盛シユートも百發百中で一同氣をよくし明日の試合に備ふ。

明ければ二十九日午前六時起床、豊栄野田兩神社に参拜必勝を期す。八時入場も早や場内には各校の選手が赤銅色の皮膚を思ひ／＼のユニホームにつゝんでウオーミングアップをなして居る。我々一同プログラムに目を轉ずれば如何に我々はA組にて春の近縣中等學校籠球大會にて組んだる縣下の最強豪たる防中と組んで居るではないか我々の期待はせめて山中とでも、しかし愚痴を言ふのが男ではない瓦全として残りより玉碎するのが男ではないか。清く正しくあつて碎けるのが男の本分であらう。十時十分合圖の笛の音と同時にセンターポール

は投げ上げられた。三隅田君懸命にジャンプも諸選手頭張りしも前半にても早や二十二對三の大差をつけられた。これではもう駄目だ一を改めるなら後半は三年の諸君にまかす。やがて笛の音に始められ二年の山本君懸命にジャムプするが敵のセンターは百戦を繰た古狸だ、山本君の手には入らないが、しかし他の選手よく頑張り見事なチームワークパスワークによりて奮戦又奮戦、遂に十一對九にて破る。そこで全部を合すれば三十三對十一にて破れもしかしそう大差にならなかつたのも三年以下の諸君が大層頑張つて來れたからなのだ。君達は末だ前途は洋々たりだ。よろしく自愛して萩中籠球部の爲めに奮闘すれば我が萩中チームが縣下各全國に君臨する日の近き將來にある事を斷言してやまなハのだ。終りにあたり松井先生其他他山口在住諸先輩に感謝の意を表す。左記に當日のメンバーを擧げん。

C 三隅田 F 北村 G 石谷
山本一夫 新谷 横田 山本直幹
河内 大藤 弘中正雄記

水 泳 部

第七回近縣中等學校

優勝水上競技大會

時恰も初夏！陽光燦として緑の天地に輝く六月九日に第七回近縣中等學校水上競技大會は山高プールで行はれた。晴れ渡る蒼穹の下、碧のプールは漣一つ立たず嵐の前の静けさを持しながら、底の白線をくつきりと浮べて若人の飛躍を持つて居る様であつた。東は遠く廣島より水の中學として名を天下に馳せた修道中學を始め三縣下八校の水の猛者は水上征覇を夢みて鴻城の地へと集つた。我が萩中も水郷の萩を代表し、南下軍八名を組織して勝利の榮冠を巴城の地に持ち歸らんものをと長驅して來たのである。

午前八時三十分、開會式舉行、優勝楯返還、會長式辭、選手宣誓は型の如く行はれ、戦ひは三百米メドレー、リレー競選に始まつた。萩中も前例を破つて初めて出場した種目である。A組に福山誠之館中學、修道中學、萩中學、濱田中學あり、我がメンバーはトップはベツクの中

村百君セカンド、プレストの高原君、ラスト、クロールの阿部君である。ラストコイルに續く號砲一發、紺碧の水は白銀の飛沫となつて、静まつて居たプールも狂瀾の修羅場と變じた。初めより猛烈な接戦だ。皆一直線になつて進む。中村君はベツクの練習不足にも拘らず、よく他に就いて萩に於ける記録を破る事七秒で歸り次は高原君。昨日の練習に好記録を出した高原君はよく奮闘し濱田中學との差を縮めたが、昨日の調子が出ず谷部君に移る。阿部君白浪を蹴立て、後を追つたが遂に僅かの差で敗る。最悪一組落選の筈であつたが、B組の山中に二秒の差で敗れる。若し高原君に昨日の調子があり、阿部君に平素のタイムが出れば山中位は完全にノックアウトする所であつたが、過ぎた事は仕方なく、プログラムの特頭を無念の涙で濡したのだつた。次の四百米自由型競選にはA組に中村大君B組に三輪君出場の豫定であつたが、中村君リレーに力を注ぐ爲止むなく棄権する。B組の三輪君、孤軍奮闘したに拘ら

ず四等となり、豫選に落ちたのはかへす／＼も残念である。多分數日來、腕に負傷し、猛練習の出來なかつたのとタイムの爲であつたらうが、萩に於けるタイムより悪かつたのは不思議でならない。然し、兩君とも未だ二年の若輩、前途有望の身であるから、必ずや後日覇を唱へる事であらう。次は二百米胸泳競選、B組に池田君、C組に我等の高原君出場、池田君力泳の甲斐なく三等となり落選したのは運が悪かつたのであらうが、高原君C組で師範の強豪藤村君をおさへて悠々一着で入選したので茲に始めて愁眉を開く。

次は百米自由型競選、A組に中村百君B組に阿部君出場の筈であるが、阿部君二つのリレーを後に控へて居る爲、棄権し中村君のみに期待をかける。然るに天は何處迄我にとつて不利なのであらうか號砲と共に飛び込んだ五個の肉體は飛泳をあげて進む。猛烈な接戦だ。二十五米ターン、依然として五人は同一線上にある。稍中村君他をリードしてターン。そ

の儘ぐんぐん、他を離す事二米、然し他校も流石一校を代表して来る者でラストの二十五米より中村君僅かに遅れる。後十五米、中村君前に出たかと思へば誠之館中の村上君頭を出す。又中村君先へ、然し中村君メドレ、リレーの疲勞未だ恢復しない爲かタツチの差で落選したのは我等の最も意外とした所であつた。タイムから云へば、C組に居れば軽く入選出来たものを、阿部君でさえC組ならば確實に入選出来たのであつたが、プログラム編成如何ともし難く落選したのはあまりに悲壯だつた。次に八百米自由型豫選があつたが人員不足の爲出場出来なかつたのは甚だ慚愧に堪へない所である。然し豫選のタイムを見るに中村君の練習の時のタイムで堂々入選して居るのを見れば返すくも残念である。二百米フリー百米バツクの豫選があつたが、萩中に出場者なく無關係だつたのは遺憾な事であつた。

午后零時四十分プログラムは愈々八百米リレー豫選に進行したが、A組の濱田

重鎮高原君は必勝の氣を面に漲らせてスタートに着く。此の烈日の下に今日の盛況を見んものと立錫の餘地もなくゴールの周邊に群つた觀衆の目は三コースの高原君に注がれて居る。目！目！目！先輩の聲が前方より起る。餘韻のある笛の音構へた用意！跳び込んだ六個の肉體は、碧の水に白泡を残して進む。正しく一列に並んで行く。二十五米、ターン、未だ一直線だ。三コースの高原君少し出た。一コースも他を離して平衡が破れたが三コースぐんぐん伸びる。流石は我が高原君七十五米、百米相變らず他をリードする約三米、然し百二十米あたりで突然頭が沈んで急にスピードが落ちた。どうしたのだからか、痙攣か？萬事休す。辛うじてペールの端へ辿りつき休息する事暫し。一時觀衆のひつそりした中に山高生の私語が聞える。一コース、六コース、五コースと順々にターンをして進む。遂に皆ターンした。高原君未だ盛んに苦しさをなげをして居る。氣管へ水が入つたのか、然し頼む。母校の爲に！、それ

中學が形勢不利と見たか他に心算あつてか棄権し、直ちに決勝への資格を與へらる。次は愈々期待を懸けて居た二百米リレー豫選。プログラムを見ればA組に、山師、萩中、濱田中、誠之館中、B組に山中、修中、柳商で何れも強豪揃ひの中に交つて居る。ファースト、コールにオーダーを通知に總務へ行く。「阿部、刀禰、三輪、中村百」と。愈々ラスト、コールに應じて並び立つた我がチーム、胸間のマークも伊達には飾らぬと許り、ゴールの前端を眺めるトップの阿部君の姿は強い光の中に立つ立像の様だつた。ピ、濱田中忙たしく跳び込む。それを流し目に見た阿部君には未だ落ち着きがあつた。再び皆、各自のフォームで構へる。號砲と共に四個の肉塊は宙に躍る。好スタートで跳び込んだ阿部君よく山師の跡を追ふ。二十五米、ターン、依然他との差は少い。次刀禰君、初陣の爲か少しくあせり氣味に跳び込み、稍離れて歸る。がサアード三輪君他校の跡を追つて跳び込む。二十五米、ターン、ターンの

位に屈する様な高原君ではない筈だ。最後の修道中の中道君に抜かれる事約五米にして漸くターンを離れる。一蹴り強く蹴つて後を追ひながら前方を凝視するその眼ざし、四米、三米次第に差が縮められて行く、餘す所五十米、四十米、それに反して差は二米、一米となつて行く、後五十米、並んだ、一人抜く、次に山師の藤村君、又並んだ後十五米、うつつと高原君前へ出る。をの面にはさつと血が登つて三着に迫る。碧の水が日い泡となつて後へ後へと流れる。又並んだ、殆んど同時にゴール、イン、あゝよく頑張つた。苦痛を忍んで力泳、又力泳、その意氣、これぞ眞の萩中精神である。然るに天は無情だ。高原君、中途で止めなかつたならば一着は欸ひない所だ。觀衆皆驚歌の聲を擧げて居る。スピードカーは爽やかに響いてその結果を告げる。高原君惜しくも四等、再び思ふ「我に運なし。」と。然し高原君よく奮闘し、他校の心膽を寒からしめたのは大いに稱讚に値するものである。

練習不足か又後れてラストの中村百君に繼ぐ。萩中自由型界のナンバーワン、中村君長身を躍らせて進む。濱田之學との差は僅かになつた。然し中村君のラスト効を奏せず遂に濱田中にも敗れてゴールイン。續いてB組選豫、修道中例然として強く三着は山中、タイム二分八秒六、オ、萩中よりタイムは悪いのだ。然し、然し、運命の神は何處迄我等を見放したのか。スピードカーの報によれば「萩中學は惜しくもオミットです」と。萩中チームはフライイングをやつたのか。餘りの事に我が戦士も悄然とならざるを得なかつた。萩中にゴールのない爲か、リレーの練習の不足の爲か、我が萩中寂として聲なく空しく控所へ戻る。ア、折角期待した二百米リレー、緑の天地に背いて我等の心は暗い。四百米自由型決勝が行はれたが萩中に關係はない。只注意すべきは山中の古家上野君及び誠之館中の高橋君が共に大會新記録を出した事だ。次が待ちに待つた二百米胸泳決勝、全校の期待を背負つて母校の爲、我が胸泳界の

プログラムは百米決勝、八百米決勝：と進み、午後六時半、遂に八百米リレー決勝となる。之に勝たねば校長先生、及び諸先生、生徒諸君に面目ないと我が選手の前には悲壯な決心の色が表はれて居た。オーダーは、三輪中村大、阿部、中村百、コースは不利な六コース。出場校は一コースより、山中、修道中、山口師範、誠之館中、柳井商業、鏡野一發、六つの男性的な體がなだらかな曲線を夕日に輝かせて水に入る。トップ三輪君よく頑張り、隣の柳商に續いて歸り中村六君に渡す。中村君稍、ピツチが遅い。ターン、又少しく遅れた。然し柳商も大分弱つたらしい。皆跳び込んだ後に阿部君ターンを離れる。阿部君メドレ、リレー及び二百米リレーの雪辱戦と許り、始めよりピツチを逸めて跡を追ふ。見る見る中に差が縮まつて行く。四米、三米と。もう他のコースの方を見る暇もなく只五コースと六コースと丈が目映る。應援の聲が只わあつと聞える。阿部君少し曲つてロープに觸れる。然し差は確實に縮

められて行く。愈々猛烈なラスト、差は殆んどない。その儘流れ込み、次の中村百君へ譲る。同時と云つてよい位に跳び込む。中村君の頭が少し前に出て居る様だ。然し敵もラストを受け持つ程の強豪だ。ターンで中村君を抜く。中村君ピッチを速めて並ぶ。こうして五十米、百米、ターンで遅れるとは云へ、遂に約一米を追い越し、四位の山中へ迫る。側の労働者風の爺さん盛に萩中と柳商との争闘を氣にして居たが中村君柳商を抜くや「やれ〜とう〜やつた。」と我が事の様に喜んだのは只一人の我々の應援者であつた。中村君山中を破らんとしたが惜しくも五着となつた。あゝ萬事休す。戦は済んだ。而して我等は又も惜敗の苦しみを味ひ、僅か七點を得たのみである。何故か不運な春の大会。遠く長門峡より流れ下る清流に花に背いて四月から行つた練習も、今日の聖戦に効を奏しなかつたのか。噫我が校にブルがあつたなら確實にターンの練習の出来る所があつたなら、柳商や山中に敗れはしなかつたも

君よく頑張る、柳高、山中に續いて歸り阿部君に譲る。好妙な引繼ぎ、下商、安中は靜かに離して三着にゴールイン。劈頭先づ難なく入選。次に四百米自由型豫選が行はれた。A組の一着のタイム六分十八秒、B組六分十六秒、この調子ならば中村大、三輪君共に難なく入選と思はれたがプログラムの組合せ悪くC組の中村大君六分四秒で三着となり敗れたのは残念。然し君は二年でありながら縣下の強豪工藤君に續いて惜しくも敗れたとは云へ、其の努力は非常なものであつた。中村六君八百米に頑張る様激勵する中にD組が始まつた。D組の三輪君ゆつくり泳いで軽く一等で入選して愁眉を開かせた。續くは百米平泳、A組に初陣の一年の中野君、C組に我が校の重鎮高原君、D組に池田君の三選手出場の筈だ。A組の中野君稍遅れて飛び込んだが、夏休みの熱心な練習空しからずラストの二十五米でゲンゲン二等に迫つたが殆んど、同着でゴールイン、もう五米、百一米でも長かつたら中野君入選出来たのに。然

のを。然し！敗將兵を語らずもう云ふまい、来るべき秋の大会には……。

宿に歸ると田坂さんを始め多くの先輩の方々が茶話會ならぬ殘念會を開いて待つて居られたが、我等南下軍の顔は擧らない。萩に持ち歸るのは只高校と高商の手拭ひ許り、校歌を合唱して鴻城を後にする。湯田の螢を車窓に見つゝ懐しの母校に着いたのは十時少し過ぎで時計の針が靜かに直角を示して居た。

終に臨み、諸先輩の方々がわざ／＼ブル迄御激励に来て下さつた事や、盛大な殘念會等をお開き下さつたの對して満腔の謝意を表します。H・F生記

第五回山口縣水上競技大會

夫れ惨敗は死にあたる

男子一度び敗れなば

鮮血とんで永久の暗

その悲しみを知るや君

必勝の信念を念頭に盛大なる見送りの中を出發する。九月十三日の朝である。時將に八時十分。待望の大会も愈々明日に迫つた。五月雨の降る日も四十日の夏

し未だ一年の身前途、未だ春秋に富む。C組の高原君、ウオーミングアップの調子で悠々一着で入選、D組の池田君武運拙なく惜しくも敗れる。次に行はれる百米豫選にはA組に刀禰君、B組に阿部君C組に中村百出。銃聲と共に跳び込んだ。A組の戦士飛沫をあげて進む。二十米迄皆並行、ターンで柳高海田君少し出る。他はこれに遅れて二着を争ふ。刀禰君稍遅れて惜しくも入選を他校に譲る。B組の阿部君刀禰君の代りに頑張る二着を保つて歸る。C組の中村百君強豪揃ひの中によく奮戦し、三着で入選。此の時一着の上野君(山中)は一分三秒七の新記録を作り他を驚かせた。續いて行はれた八百米準決勝に出場する者はA組に三輪君、B組に中村大君、三輪君どうしたのか蒼白な顔をしてスタートに立つ、日頃元氣な君、四百の豫選の時は好調であつたが、悲壯な面持の儘跳び込む。調子が悪くピッチも遅い。一着のタイム十二分十秒七それに比べて三輪君十三分二十八秒とは、萩に於ては如何に調子が悪

休みもこの大会の爲に―たつた一日の爲に―絶大な努力を捧げて来たのだつた。十時過ぎ山を越え川を渡つて我等が山都山口へ着いた頃は雨も大分ひどくなつて来た。晝食後雨の暗間を見て練習に行く冷雨膚に冷たくブルの波も高かつたが選手一同調子はよい。特に三輪、中村君等の滑らかなフォームは他校の練習者の注意を惹かせた。軽い練習の後プログラムの見て明日の準備をする。高原君の記録が目につく。

明くれば十四日、昨日の雨も止み、青空さえ仰がれた。一同八坂神社に参拜し山口高女へと出掛けた。午前八時開會式前年度の覇者山口師範の優勝旗返還、選手宣誓に次ぎ戦は二百米リレーによつて始められた。萩中はA組で三コース、他に一コース、安中、ニユースに柳商、四コースに下高、五コースに山中、銃聲一發水に飛び込んだ五人の若人、皆頭を並べて進む。我がオーダーはトップ中村百君、刀禰君、中村大君、阿部君の順序中村君よく頑張つて刀禰君に渡す。中村大

くとも十二分三十は必ず出して居たのに如何にコンディションが悪かつたか想像するだに悲痛である。B組に中村大君、四百米の雪辱戦と許り勇躍スタートに着く。ピストルは鳴つた。僅かに遅れて飛び込んだが見る／＼中に師範の強豪工藤君に追ひついて、よく之の迹を追ふ。工藤君の力強い泳法に對して中村大君優美なフォームで滑る様に泳ぎ續ける。前半のタイム六分十秒既に三着をリードする事約五米、後半もよく着に續いて泳ぎ入選確實と思はれた爲「ピッチを落せ」と云ふに拘らず、最後迄頑張つて三着を抜く事約三十米。次に行はれたのは二百米平泳豫選、A組に高原君、C組に中野君、D組に池田君出場、高原君、百米にも増してゆつくりと泳いで他を離す事二十米許り、流石我が校のキャプテンの名に背かない。C組の中野君、惜しくも殿を務めて泳ぐ。又入選出来ないだらうかと思はれたが後半になつて他を次第に壓迫して居るではないか。並んだと思つて居る中に一人抜いた後一人、残るは五

十米確實に差は縮められて居る。初陣の若人頑張れ、後十米中野君僅かに前へ、然し敵もラストを出して又抜き返す。中野君懸命に泳ぐ、夏休みの練習の功あつてか中野君僅かに出てタツチした様だつた。後は只審判の判断を待つのみ、やがて結果報告、果して中野君入選との事、とく頑張つた。續いてかゝる八百米リレールのコール。萩中A組で三コース。他校は師範と下商、柳高、萩中のオーダーはトツプ三輪君セカンド刀彌君、サード阿部君、ラスト中村百君。三輪君まだ顔色が悪い。號砲と共に皆飛び出す。後半に強い三輪君もラスト出で柳商、師範に續いて歸る。次で刀彌君師範を抜かうとしたがその儘の差で下商を後に阿部君に渡す、阿部君獨特のフォームで泳ぎ下商を大分離してラスト中村君に繼ぐ、中村君大いに頑張りしも師範に二着を譲り三着で入選、B組では山中他をリードして悠トツプを行く。稍後に柳中、商船、安中接戦を演じ抜きつ抜かれつ遂に商船の惜敗となる。次が百米背泳準決勝、我が校

の苦手、津野、金子兩君共に腹痛を訴へるがそれもおし切つて泳がねばならぬ苦しき、津野君あまり青い顔をして居る爲五十に力を注がせる事にして棄權、然し入選者の中一分四十二秒八の者もあつたから津野君元氣だつたら、入選出来たかも知れなかつたのに。然し幸に君は未だ二年、自重して練習に精進されん事を祈る。B組の金子君振はず惜しくも恨も吞む。プログラムは次々と進み、最後の豫選たる二百米自由型、B組に中村君、C組に刀彌君D組に阿部君、三君の入選は確實と思はれた。中村君山中の上野君に續いて二着で入選、刀彌君又二着を争ひながら入選、阿部君もよく強豪の中に交つて善戦三君見事に入選す。次に百米平泳準決勝時正に十一時五十五分。我が高原君A組で四コース、高原君には頑張れの語は不要であらう只落ち着いて行けば銃聲に續く水聲プールの水がサワ／＼と鳴る。高原君左右に二着以下を従へて難なく入選、續く五十米背泳、A組に津野君B組に金子君出場A組一コースの津野

君二コースの三等と並でゴールイン、B組の金子君も亦芳しからず遂にバツタは惨敗に歸した。續く百米自由型準決勝、こそはと中村、阿部兩君勇む、中村君A組、阿部君B組と決定したが何れも劣らぬ強豪揃ひ、猛烈な戦ひは豫想された、銃聲と共に跳んだ中村君、滑り出し悪く二十五米では僅かに遅れた。然し五十米では遂に一直線となり皆並んだまゝ進むプールの波は騒ぎ一、二、三着皆殆んど一瞬の間にゴール、インB組の阿部君善戦健闘したに拘らず、我れに利なく惜敗したのは天運としてあきらめざるを得ない。やつと協議を重ねて居たA組の結果発表、中村君三着で愈々決勝へ出る事となつた。次の四百の準決勝B組に我が三輪君、やゝ元氣をとり戻したが依然顔色は悪い。宿の飯でもあつたのか三人も腹痛に苦しむ然し無事入選してほつとさせる。之で午前の部終了決勝へ残る事の決定したものは、二百八百兩リレー、高原君の平米平泳中村百君の百米自由型、三輪君の四百中村大君の八百米

晝食を終へて休養する間もなく、直ちに二百米リレー決勝、中村君、阿部君共に出場既に五回、流石の健脚も漸く疲労を覺へ雙の腕も思ふ儘ならず一抹の不安を與へる。ラストコールに應じて、悲壯の面持で出場一コースより山中、柳商、柳中、師範、萩中、大津中の順序、出發の合圖により六人の精銳は白銀の飛沫を擧げて水中の八となる。中村百君、隣りの師範の強豪の浪を受けて苦闘、然しよく頑張つて刀彌君に繼ぐ刀彌君全身に力を込めて猛烈に柳商を追ふ、柳商との差は少い。次で中村大君勇躍として追跡する。柳中、大津中、大分遅れ、師範と山中、萩中と柳商、柳中と大津中互に相争ひながら後五十米となる。皆ラストダツシユ物凄く、阿部君の努力に拘らず柳商に續いて四着でゴール、イン我がタイム二分五秒九。此所に始めて六點をいれる。次に青年の百米自由型豫選行はれる。二百米平泳準決勝、A組に高原君B組に中野君出場、高原君相變らず他を悠々とリードして一着でゴール、インB組では

中野君力泳に拘らず遂に失格、然し君は未だ若い、必ずや後に名を擧げるに違ひない、次に二百米自由型準決勝、リレー後僅か三十分しかたゞ又中村百、阿部兩君六回の出場の疲労未だ癒えず、特に中村君リレーに力を注いだ爲體の調子悪く、又後の百米に力を注ぐ爲遂に他校に入選の榮を讓るB組には我が阿部、刀彌君コースを並べて出場、然し惜しい哉兩君ラスト出ず伸より四、五着で歸る。遂に二百米も他校に點を贈る事となる。爾來背泳決勝の後八百米自由型決勝、中村大君一コースに出場、前半を出し過ぎたか、後半芳しからず遂に遅れて、貴重な一點を入れる。一着の上野君のタイム十一分五八秒六、嗚呼三輪君健在ならばこの位のタイムは出たであらうに。濟んだ事はしかたもなく次の高原君の百米平泳に期待をかける。ピストルの音と共に跳び込んだ、頭を擧げた、唯々として泳ぐ、山中の應援なく静かだ三十米あたりで一直線の平衡が破れた。高原君の恐れ居た、村本(師範)も高原君に敵し難

く唯高原君の跡を追ふ。高原君にとつてはあまりにも。もの足らなかつたに違ひない。高原君獨泳の形だつたので去年の記録も破れなかつたとは、如何にバツドコンデイションとは云へ、萩では、あの河の中の練習場で、而も進み勝ちな萩中の時計で既に破つて居たのを。青年の四百米、背泳も濟み再び高原君の二百米平泳、高原君アウト、コースの一コース、然し高原君の優勝は確實だ。果して二十五米のターンより次第に他を引き離して殆んど五米も先を泳ぐ。春惜しくも水を吸ふて敗れた百二十米のあたりも無事にすぎた後は只時の過つのを待つのみ、あと五十米二十五米猛烈なラスト遂に二着を離す事八米で優勝、高原君水上に上つて後も未だ三着以下の接戦である。高原君微笑と共に之を眺める。次に青年のバツク、百米自由型が行はれ續いて四百米自由型三輪君出場の筈だが顔色未だ蒼く、胸がつかへて苦しいとの事、然し母校の名譽の爲に戦はんとする悲痛な覺悟、唯感激に耐へない。ピストルの音は響いた。

跳び込んだ、三輪君又少し後になつて居る。然し見よ、五十、百となる毎にぐんぐん、他を壓してトップの工藤君（師範）に肉迫するではないか。元氣が出たのか？一同の顔は紅潮した、二百米ターン、三輪君僕に先んじて居るではないか、その調子最後迄！二百二十五米ターン、同時だ、然し萬事休す！三輪君の顔は日蠟の様だ、急にビツチが落ちた、嗚呼、遂に機會は去つた。惜しくも次第に遅れる。五十米愈々顔色が悪い遂に五着と並んだ、ぢり／＼と抜かれて行く悲しさ網でもつけて引張り度い様な焦燥かられながらも只三輪君を見守るのみ。後に未だ八百米リレーにも出場せねばならぬではないか、實力はありながら動かぬ體を如何せん。明年こそはと涙を呑んで控所へ引きあげる。此所に一點とは云へ貴重な點を入れる。萩中合計二十二點、青年の二百米平泳もすんで百米自由型決勝中村君の出場も七回を數へ鐵石ならぬ身に此の重き責任。然し遂に戦ひは始つた中村君一コース。縣下の精銳の争ひ、上

野（山中）海田（柳商）有田（師範）等皆一直線の儘進む、同時にターン四十、五十未だ優劣の差はあまりない。プールの水は荒れに荒れる。山中の應援團は叫ぶ。後二十五、二十、十、五、山中の上野君コール、イン續いて、有田、海田君、僅かに遅れて中村大君等コール、イン惜しくも勝を譲る。續いて我が先輩三浦さん等の大日本游泳會公開、青年の四百も濟んで愈々大會の最後を飾る八百米リレーラストコールはかゝつた。萩中一コース、他には柳商、山師、柳中、山中、安中の諸校、我が校のトップは三輪君。各校選りに選つた強者の中に交る君は尙調子悪く嘔吐を催す様との事、然し萩中の爲に必ずや頑張るであらう。ビー、用意！續く銃聲に躍る六匹の若駒。山中、師範他に僅か先だつてターン、三輪君、柳商と共にターン、以下之に續いてターン。山中、師範、後になり先になりして進む。三輪君亦柳商と相並んで進む。少し柳商を抑へてセカンド刀彌君に渡す、柳商猛烈に我を追ふ、又並ぶ遂に少し遅

一四六
れてサード阿部君跳び込む。此の時山中師範の應援激しく。プールの水又湧き會場は熱狂の渦中となつた。山中勝つか、師範勝つか？阿部君差を縮めんと猛進又猛進、ついでラスト中村百君起つ。柳商我先んずる事約五米、春の雪辱と許りこゝを最後と戦ふのであらう。中村君柳商に迫つたが身體の疲勞甚だしく徒に心は焦れども手足は思ふにまかせず遂に柳商に續いて四着となる。先つ争つた山中、師範は山中、應援に力づいたかタツチの差で優勝。遂に戦ひは濟んだ、閉會式舉行。あゝ記念すべき大會は最後の幕を閉じたのである。我等は豫想を裏切られて僅か二十九點を得たのみであつたがその敗因は果して實力の不足の爲であらうか、否選手の不足ではあるまいか。日本海に面する水郷萩に育つた我が萩中六百の健兒中で水泳部に籍を置く者僅か二十名に充たず、その爲水泳部總動員をしてもいまだ出場定員に達しない始末である。古語に云ふ「敗將語らず」と。然し愚痴かも知れぬが、もし我が校にプール

があつたなら、わざわざ八丁の練習場に行く時を空費せずに練習出来たのに、この事實は種々の點で練習に影響を與へる事は少くない。又河中の爲水流及び湖の平泳は練習に差支へる事夥しく、水流の爲ターンの流された事も幾回であらうか。近き將來に於て、運動場の擴張と共に校内にプールの作られん事を切望して止まない。又我が選手は皆充分に伸びる素質があるに拘らず指導宜しきを得ない爲か熱心な努力に報いられない事は頗る遺憾な事である。それに水泳部員の少い事は試合の不成績に頗る重大な關係を持つであらうと思はれる。爲に中村百阿部君等は十回も出場しなければならなかつたし三輪、中村君は二千米以上も泳がねばならなかつたのである。金石ならぬ身にこの負擔、實力を有しながらも疲れし體を如何せん日頃の實力を發揮出来なかつたのは返す返すも残念な事であつた。然し皆よく戦つた點でも尙止まぬ意氣を以て奮闘した。得點僅か二十九點とは言へ皆努力の結晶そのものゝ様な點なの

であつた。
終りに臨み、山口では、試験にも拘らず多數先輩の御應援を受け、唯々感謝にたへません。謹んで御禮申し上げます。又在校生諸君には出發に際し、盛大な御見送をなされ歸萩の際には、遠隔の所にも拘らず萩驛迄も御出迎へになつた事に對しても厚く謝意を表します。又とこしへに我が水泳部に幸あれ！（福田記）

柔道部
第四回萩中萩商萩青對抗武道大會
日支の風雲滿洲の廣野に急を告げしより早くも滿四年を経過せんとする昭和十年九月十五日この日。萩青年をしていやが上にも身心共に躍動せしめんとする第四回萩中萩商萩青對抗武道大會は明倫公堂に於いて火蓋を切られんとして居る。顧るに、今我が眼前に團圓と翻る優勝旗こそ本大會始まつてより此の間、一度も敵に譲りたること無きものなり。この親愛なる我等の優勝旗をどうして手放すことが出来やう。我等選手一同は必勝を期

して會場に臨めり。
午前八時會長の挨拶審判の注意を終り、愈々猛烈な闘争が開始されんとす、然るに如何せん。プログラムのトップを飾る萩中對萩青に於いて最初よりメンバーの不足せる青年が尙一層の不足を生じて居るとは。委員の斡旋にもかゝはらず、集合したる選手は僅かに五六名。いた仕方なし、遂に萩中對萩商を以つて火蓋は切つて落された。先鋒よりざらりと居並ぶ小野西島、三村等々の諸子萩中キツテの立業を以つて忽ち六番目山下までに五點を擧ぐ。此の勢實に全勝せんとするの意氣込みなり、然るに七番目吉村より、吉村の引き分けを始めとして、稍々形勢不利に陥り僅かに小林山本の勝を見るのみにして、森、赤川、中村、田村諸子の敵に四點を譲りたるは實に残念なり。此處に七對四を以つて我等の勝に歸すれど此の成績を以つて我等の期待せるものに比較すれば決して好成绩とは稱せられず。山本の涙に曇れる激勵の聲は我等をして益々悲壯なる決心を懐かしめた。

森	桂二	△	○
吉村	重和	×	○
山下	茂	○	○
未益房之助		○	○
新谷	晴俊	○	○
三村	剛	○	○
西島	愛三	○	○
小野	孝策	×	△

(註) ○ハ勝×ハ引分△ハ負
山口縣體育大會

九月二十八日我等選手一同は萩中健兒六百の全責任を双肩に擔ひつゝ、鴻城の地へと覇業を目ざして出發せり。明くれば二十九日。我等選手一同實に元氣騰湧として演武場山口中學校へと向へり。

此の日參加校十九校にして、此等各々が第一班第二班に分れ、尙各班が甲乙二組に分れ都合四組となる。然して試合形式は此等四組より一の優勝校を出し、此の四校にて更に準優勝戦を行ひて最後の二校をして優劣を決するの手續なり。我が萩中學校は第一班甲組に組したり。試みに甲組のメンバーを見れば宇中萩商徳

に前途に多忙ある四年生諸子の活躍振りを傍見せし時我等の心は不知不識の中に大山の安きに置かれたる心境に入らざるを得ず。冀くは下級生諸君よ。講堂の一隅に靜止せるあの美しき優勝旗を見る時諸君達の先輩達が如何に一致協力奮闘せしかを思ひ起せよ。而して此の穢なり榮冠に一點たりとも汚點を附すの行爲ありたる時は諸君達の最大恥辱としれ。此の先輩達の奮闘に報いる爲にも我が萩中の爲にも永久に榮冠を保持すべく諸君達の奮勵を望む。

(中村記)

最後に大會の成績を烈記して置く

野村	重郎	×	△
山本	長人	○	△
三戸	關夫	×	○
田村	由之	△	△
中村	五郎	△	○
赤川	尙	△	○
小林	康雄	○	○

(商萩) (青萩)

第二回戦。萩中對萩商メンバーの不足せる青年は辛じて十名を集め得たり。戦はずして五點は我等のものだ。先鋒小野が機先を制せられしは實は残念。併し後に居並ぶ雄士の鋒、依然として其の鋭を表はし不戦勝を合して十一番中村までに十點を獲得。續いて田村立ち上つたが萩商對の時に右手の自由を失ひ。十分なる活動發揮せられず。惜しくも敗れたるは實に同情に價する。次に三戸軽く一點を擧げて山本に任を譲る。山本良く好勢に出でしも、中途にて氣分を害し、尙責任の重きを感じて奮闘せしに、敵我が弱味につけ込んで遂に山本を組み伏したる山本の心中如何ばかり。敵武士道を知れるや否や續いて大將野村も敵將横木三段と負けじ劣らじの勝負を演ぜしに僅かの差を以つて勝を譲る。以上の試合に於いて十一對四。全部を通じて我等十八點を第一位として續いて萩商十一點萩青七點なりし。

嗚呼榮冠は永久に我等のものなり。百万一心の祖訓は立派に體せられたり。特

商山師と言ふ勢ぞろい。

又此等四校の各校についてのメンバーを見れば徳商、宇中、萩商いづれも初段三人づゝ、全く萩中と其の形式に於いて一致せるところあり。故に此の三校は恐るゝに足らず。唯我等の苦とする所は山師のみ。二段を二人備へし陣立。確かに我等の強敵なり。

試合は徳商對宇中によりて開始せられたり。やがて五番目萩中對萩商。過日萩の地に於いて堂々優勝せし萩中だもの。勝敗戦はずして推測し得べし。審判の「始め」なる號令によりて居ならぶ雄士十名つと立ち上り交々組む。しばらくして我が先鋒新谷、少しアガリ氣味なりしか先づ機先を制せられたり。然るに中堅山本が特異の腰業で一點を擧げ、續いて赤川が「業有り」二本を續けざまに取つて一擧二點を擧げたるは我等をして安堵の胸を撫下さしめたり。大將野村と見るに、これは仲々雄雄決しさうもなく副將三戸よく攻勢に出でしも時間の制限を如何ともすること能はず。遂に兩人共引き

たる山師に應戦せんとす

第四回目、立ち上るとすぐ中村が關節を取られ續いてさすがの雄勝山本も彼等の巧妙な寝業で來られては堪へ兼ねず。遂に勝を譲り三戸も一點を取られたり。野村赤川よく頑張つて引き分けにしたるは我等の感謝する所なり。此處に於いて、三點を取られて、遂に山師をして優勝校たらしめたり。

我が敗因を顧る時雖しも二三氣付く所あるに相違なし。然して今我が考へをくどくしく列記するに及ばず。

唯我等は今年を以つて本校を巢立つ者として下級生諸君に一言傳へ置きたいと思ふことあり。

我中學生生活四年間を顧る時我等が或る一部以外を除いては、如何に運動と言ふ觀念に重きを置かざりしか。併し我等と雖も始めより此の重要なことを知りながら疎遠に陥りたるにあらず。極端に言はば我等にとりて、我が校を代表する選手達が唯他人事であるかの如くに我等の眼に映じたりしなり。諸君達の

にも唯選手諸子の行動を何気なく見て居る者が無いであらうか。我は疑ふ。若し有りとせば速かに改心せられんことを請ふ。即ち若きより選手の意氣行動を以つて自らの意氣行動とせば、諸君のいづれも他日我が校の全責任を擔ひし時理想を果し得ると我は思ふ。要は諸君が協同一致の精神に自覺め、より一層高き理想に向つて突進せられんことを希望して止まないものである。(中村記)

の期待を双肩に擔ひ必勝の臍を固めながら、主將森田を先頭に高鳴る胸を押へながら明倫校門に迎へ校歌合唱に選士の意氣を嫁が上にも鼓舞し、開會式場に入る思ふに過去數十日間一段の緊張を以つて此の大會の覇權を再び我が掌中に歸せんと終日猛練習を重ね今や巴城の地に商業青年と覇を争はんとするのである。開會式場に臨むや、開會の辭會長挨拶優勝旗返還中能美の宣誓などあり第一のメンバー對萩青との幕は重苦しい空氣の中に切つて落され先鋒高崎の快戦に思はぬ微笑戦績左の如し。

一五〇
 ◎長尾——桶山
 ◎半田——野原◎
 ◎阿武——坂田
 ◎石田——來島正
 ◎林——星◎
 ◎高崎——西村
 之にて十一——四の驚くべき勝利を得息もつかず次の戦のプログラム萩商との試合に萩商の悔るべからざる氣勢に接戦の不安を豫期せしめた。

最後に大會の成績を表示して置く。
 (商德) (中字) (商萩) (師山)
 野村 重郎 △ ○ × ×
 三戸 關夫 × △ × △
 山本 長人 ○ ○ ○ △
 赤川 尙 × △ ○ ×
 新谷 皓俊 ○ × △ △
 (註) ○ハ勝 △ハ負 ×ハ引分
 劍道部
 萩市體育協會主催第四回武道大會之記
 九月十五日。母校の名譽。母校生六百

萩中 萩青
 ◎森田——横山
 能美——木川◎
 ◎田邊——原田
 ◎居田——竹田
 ◎白神——村田◎
 ◎浮里——中村◎
 ◎渡邊——山下
 ◎阿部——河村◎
 ◎金川——藤田

萩中 萩商
 ◎森田——石田◎
 能美——仙崎◎
 ◎田邊——水津
 ◎居田——大庭◎
 ◎白神——來島◎
 ◎浮里——田中◎
 ◎渡邊——岡
 ◎阿部——宮本
 ◎金川——岡崎◎
 ◎長尾——荻田◎
 ◎半田——井上◎
 ◎阿武——宇佐川◎

◎石田——藤井◎
 ◎林——重枝◎
 ◎高崎——吉田

先づ高崎機先を制し林前戦の雪辱に輕く二本、石田の苦戦其功終に奏せず思はず不覺阿武の力闘終に報ひられ、半田長尾は日頃の練習淺く惜敗して涙をのむ。此の頃より應援生徒は重苦しい緊張の中に投出され刀の一寸の動きにも思はず臍を冷し金川の日頃の實力あまり振はず惜しくも敗る。此れまでの戦績から見ても萩商の勝。此處に於て、應援者も異様な興奮に巻かれ選手一同も不安の雲に包まれた。此の重苦しき緊張も阿部渡部の全勝に解消安堵の胸をなでたるも東の間浮里苦戦、終に敗れ、再び不安の間に一同包まる、白神萩商來島を敗り居田惜敗此の接戦に森田會長思はず席を離れ審判の傍に立たれ、手に汗握らる況や選士一同に於てをや、田邊よく敵を制し續いて二本奮戦快勝今や残す所大將と副將なり此の二將にて萩中劍道部の勝敗は決せられんとす。

能美徐ろに構へて立つや仙崎をよく攻め今や斬らんとしたる敵辛じて逸れ思わぬ不覺、萩商の最初の戦に對して我の二回續いての戦に我が戦士疲勞の爲の不覺無念に齒をくひしぼりながら能美退く。森田と石田の試合となるや萩中生總立となり後から制止の聲も聞えず竹刀の動きに歎視しながら手に汗握る、中には思はず「心勝の信念」と大聲で呼ぶ流石は森田靜かに一禮トシと立つ。此頃柔道再び強敵を葬り万一森田の會となるも完全なる勝萩商石田も善く戦ひ勝負なしと見た頃如何にかく不運の續くものか意外にも終に石田に勝をゆぶり劍道部は七對八にて惜しくも一點の差にて涙をのむ。かくして十二時の時報を聞きて閉會となり萩中十八點萩商二十點にて終に二點の差を見るに至り、柔道部の點數と合して中學三十六點となり五點の差にて勝利の榮冠を獲得せしも劍道部日頃の實力餘り振わざりしを遺憾とす。將來への希望をのべて揮筆

(小河生)
 山口縣體育大會
 天高馬肥秋九月二十八日遠く澄み渡つた朝、劍道部も他の選手と共に覇を争ふべく鴻城の地へと運動場を出發しました出發に際し澤山の人の心からなる拍手を感謝します車上の人となつた我等は元氣旺盛だ或る者曰く歸りには此の自動車の側に優勝旗を飾らうと。間もなく我等の乗れる車は國道を馳驅して山口に着いた、今年は劍道部の試合は武徳殿にて催される。豫定である町を歩つてみると他校から集まりし者も多く歩つてをり明日は彼等と一戦するのだと思ふと自ら興奮してくる夜中尾先生の一場の訓戒があり「元氣でやれ敵を恐れるな夜は早く寝なければいけない」と話された。我等は八時半頃から床に這入つたが仲々寝られない。「おい眠つたかいや眠られない」と云ふ聲が處々方々で聞えてゐたが最後に「明日は必ず勝たねばならぬぞ母校の爲に」とか「よし頑張るぞとの聲が聞え後は皆静まつた。」

明くれば九月二十九日秋晴れの空はいと爽かだ朝早く眼覚めに吾等は竹刀を提げて前の八坂神社に参拜し今日の勝利を祈り合せて今日の奮闘を誓った。それから森田、居田、田邊、浮里の四君は身仕度をして境内で、二本練習し私は竹刀を振る程度で宿に歸った。

劍道部一同は「ハミ」を買って食った私も一口食ってガリ／＼とやつたが氣持が悪くてすぐ捨てしまつた。

しばらくして吾等は中尾先生に従つて武徳殿に行き間もなく、戦の幕は切つて落された。試合方達は全校二十六校を東西南北に分ち萩中は西部に組し關中、下商、下工、小農、萩商、防商に類してゐる何れ劣らぬ強豪だ、「何糞なで斬りだ」先づ最初に吾校は萩商と組んでゐる、先鋒浮里は恐ろしいまでに目を張つて敵をにらんでゐる。勝負一本の聲に兩者はつと立上つた。二三合打ち合つてゐたが「面あり」の聲にはつとすれば味方の勝利だ、續く田邊も軽く取り遂に吾等は勝つた、次ぎは吾等の最も強敵とする關中

旅團主催 衛戍射撃大會 縣射撃大會

參加の記

二十四日八時旅團主催にかゝる衛戍射撃大會は山口射撃場に於て大雨の中で開會された。本日射撃手、藏田、田中、白上、貞本、池田君等は非常にコンディション悪く、白上君の三十六點が我校の最高でメタルになつただけである。

因に本日個人優勝者得點は四十三點、萩商が一等で平均三、四五點萩中二、二、八點であつた。我々五名は教官殿の引卒で無念さを忍んで頭からずぶぬれになつて宿屋へと引取つた。

二十五日開會式が過ぎるまでは昨日からの雨に風さへ加はつて射撃場は悲惨な常態であつたが、本日池田先生に引卒されて来た、山縣、香川、時山、河村、中村君等が射撃場に到着した頃には時々青い空を黒雲の間からのぞかせるやうな天氣に變つた。吾々前日から來てゐるのは未だはつきり照準點の定まつてゐない新銃で昨日の根みを暗らさんものと躍

だ、試合は進むにつれて吾等は元氣足らず遂に敗る、併し大將森田と關中の大將との試合は見るべきものがあつた、互に自重して間合を切つてゐるつと竹刀の先が動いた、そして二三合「お面」と言ふ森田の聲に吾等は一時にしめたと思つた又「ボン」と云ふ氣持のよい音がした勝つたと思つた瞬間森田は竹刀から片手離してある審判曰く、「手を離しては取らぬ」とあゝ残念だ實に残念だつた敗れて後の祭だがあの時の審判は若くて未だ素人だと思ふ。

以後關中に敗れ氣を腐らしてしまひ元氣も出なくなつた私の兄も大分痛んで思ひきつて面にも伸びられなかつたのも癪だ而して結局西部七校で關中、下商、下工、萩中、防商、小農、萩商の順位になり我校は七校中四等であつた。

今日の試合に於て大將の森田は終始元氣よくよく敵を壓倒してゐた、私も出来るだけ力を出しましたが技も未熟な爲に遂に敗北に歸してしまつた。

中堅の居田は日常の實力の半分も出し

得づ調子悪くあのよく伸びる面も一向出なかつたのは甚だ残念だつた、四將の田邊は元氣よくて氣焔をはきよく敵を制した、先鋒の浮里は第一回以後振はず彼の足を痛めてゐるのが徒らに残念だつた。

願ふに此の試合に餘り芳しからぬ成績を得ましたが四年生以下の劍道部諸君、能率的な練習をせねば駄目だ徒らに道場の前で無駄話をせずと直ちにさつさと稽古すること時間の活用だそしてみつちり一時間半も練習し家に歸つて勉強すれば決して他の人に遅れはしない。

激しく練習するのは人一倍苦痛だ然しその苦痛にめげず母校の爲に重なる且大の使命を受けて戦の庭に立つ者こそ眞の大丈夫ではあるまいか。劍道の指令者はおも自分の義務として、練習し上級生は下級生をよく導いて平和に親和に上級下級生はよく融合して益々努力せられん事を願ふ。終りに望んで私達の芳しからぬ成績を皆様におわびし且夜遅く、出迎へて下さつた事を深く感謝します。

Y、N、生

であつたのと今春實彈を五發打つたきりで自信が無かつたからである。來年から活躍せられんと欲せられる四年生射撃部諸君に吾々。必々練習を積み自信をつけて照準點の定まつた銃を持つて行き給へ (池田記)

辯論部

秋季辯論大會

昭和九年十一月二十九日 午前十時より講堂に於て定例大會を開催する。その

順序左の通り

- 一、開會の辭 委員 三村 殿
- 二、暴風雨に面せる日本 二ノ三 西村 信海
- 三、木佛金佛石佛 一ノ一 内山 博
- 四、早起 三ノ一 熊谷 正雄
- 五、皇軍の必勝精神二ノ二 金子 直治
- 六、英國人の誇りと日本人の誇り 一ノ三 加藤 垣次
- 七、人生 五ノ三 田中 敏彦
- 八、松陰先生 一ノ一 伊東 祐信
- 九、續 三ノ三 堀 啓一
- 一〇、先は東方より一ノ一 森重 龍馬

書道	辯論	雜誌	柔道	劍道	副會長	會長
八木澤教諭	岡三庭上教諭	久永教諭	山植川村教諭	大岡村部教諭	津野守教諭	河野守教諭
	伊長谷川輝道典隆實	田貞村本精一作向	野中村本重一郎	阿居部田吉與	第五學年	第五學年
	堀熊谷啓一雄俊	林岡新崎博寬邦人俊	木小赤村林平治	阿石武知夫	第四學年	第四學年
	末鈴杉永太一郎	村佐伯上幸賢	兼岩崎下忠行	河野昭充次郎	第三學年	第三學年
	天金子善次郎	岡伊東重忠龍馬	池水津好明	山藤武一郎	第二學年	第二學年
	日山森野川大和美	堀森野原健成憲三元美	伊天山藤野正宣	市田引原邊三郎	第一學年	第一學年

昭和十年年度校友會委員

- 一、三人の兄弟
 - 一、苦悶する世界
 - 一、兄弟三人の金儲け
 - 一、光は東方より
 - 一、些細の事に注意せよ
 - 一、學生諸君に告ぐ
 - 一、水
 - 一、不幸なる混線
 - 一、日本海々戦三十周年を迎へて
- 坂本 淳
- 一、死して命令を守る
 - 一、成功の要訣
 - 一、噫々古賀聯隊長
 - 一、私
- 第一學年
- 一、千兵衛と萬兵衛の話
 - 一、生物發生の法則
 - 一、和尚さんの欲ばり
 - 一、海外發展の道
 - 一、私の感想
- 岩崎 末廣
- 一、おととき話
 - 一、和尚さんの話
 - 一、キッチンヨンの話
 - 一、一口ばなし
 - 一、六つの地蔵さま
 - 一、忠犬
- 以上
- 一、開會の辭
 - 一、徳川家康
 - 一、吉田松陰
 - 一、孝行兵士
 - 一、松陰先生に對する感想
 - 一、過失
 - 一、立志
 - 一、詩吟
 - 一、譽の兵曹
 - 一、寛大
- 以上
- 一、開會の辭
 - 一、徳川家康
 - 一、吉田松陰
 - 一、孝行兵士
 - 一、松陰先生に對する感想
 - 一、過失
 - 一、立志
 - 一、詩吟
 - 一、譽の兵曹
 - 一、寛大
- 以上

- 一、未來に生きよ
 - 一、張良
 - 一、義經の自重
 - 一、貧富何かあらん
 - 一、太平洋の將來
 - 一、ガンヂー
 - 一、日本青年の曙光
 - 一八、眞劍
 - 一九、農村振興策
 - 二〇、寓感
 - 二一、討論「論題」流行唄を唄ふ是非
 - 二二、講評
 - 二三、閉會の辭
- 以上
- 委員 林 久生

- 一、開會の辭
 - 一、亞細亞の覺醒
 - 一、金を得る三つの方法
 - 一、盲目と跛者
 - 一、所感
 - 一、夜明け前の世界
 - 一、所感
 - 一、生の充實
 - 一、閉會の辭
- 以上
- 第三學年 五月二日
- 一、徳川家康
 - 一、吉田松陰
 - 一、孝行兵士
 - 一、松陰先生に對する感想
 - 一、過失
 - 一、立志
 - 一、詩吟
 - 一、譽の兵曹
 - 一、寛大
- 以上

- 一、開會の辭
 - 一、亞細亞の覺醒
 - 一、金を得る三つの方法
 - 一、盲目と跛者
 - 一、所感
 - 一、夜明け前の世界
 - 一、所感
 - 一、生の充實
 - 一、閉會の辭
- 以上
- 第三學年 五月二日
- 一、徳川家康
 - 一、吉田松陰
 - 一、孝行兵士
 - 一、松陰先生に對する感想
 - 一、過失
 - 一、立志
 - 一、詩吟
 - 一、譽の兵曹
 - 一、寛大
- 以上

右大會に於ける成績優良なるもの左の通り

右大會中吟味の優良者左の通り

右大會に於ける成績優良なるもの左の通り

弓道	水泳	褒賞	器具	球技	競技	理科	地歴	書道
岡森 庭木 教教 諭諭	池齋山 藤本 教教 諭諭	森兒山野 山口田 教教 諭諭	岡田八岩福野 崎中木本 諭諭諭諭	安久東玉 保部保 教教 諭諭	池山齋 山藤本 教教 諭諭	中野村 尾田岡 教教 諭諭	岡山 庭本 教教 諭諭	水沼 教諭
金子正彦	高田原富平	田邊中正明	森澤五郎	弘中秀雄	竹内秀雄	弘三前中	三田好得三	山田能邊美
村部百合	阿羽鳥光	市新大 川谷藤保	橫山平治	有田敬高	松田高	杉北宗村	豐豐日田	仁梅芳
吉野松隆	白井男	山長岡浦 本岡秀	河村利一	水津久夫	河內壽昭	新谷勇二	師林久士	田阿藤
三輪大鐵	津野大俊	津野大俊			馬山矢屋原	境古谷村	三廣田好	吉田山
中野滿明	加藤中				大石野丸勝	池元川部	濱町岩本	桂大浦
								藤上修三

昭和九年度校友會費收支決算報告

經常費(收入)	一 金參千四百拾貳圓九拾八錢也	總收入高
內 譯	金六百貳拾五圓六拾八錢也	前年度繰越金
	金貳千參百四圓五錢也	生徒會費
	金貳百貳拾參圓拾七錢也	職員會費
	金百參拾八圓也	校友會入會金
	金六拾圓也	寄附金
	金拾貳圓八拾六錢也	預金利息
	金四拾九圓貳拾貳錢也	雜收入
支 出	一 金貳千九百貳拾五圓六拾五錢也	基金之部(收入)
內 譯	金貳百九拾四圓七拾壹錢也	一 金千五百七拾貳圓六拾五錢也
	金貳百四拾六圓六拾五錢也	金千圓也
	金四百五拾七圓貳拾四錢也	金四百參拾參圓五拾五錢也
	金貳百七拾七圓七拾錢也	金參拾九圓拾錢也
	金百四拾九圓六拾四錢也	一金ナシ
	金貳百五拾五圓五拾錢也	差引殘金千五百七拾貳圓六拾五錢也
總收入高	前年度繰越金	用紙部
	開校式	卒業式
	弓道部	園藝部
	圖書部	雜費
	雜費	記念事業費
	雜收入	學年度繰越
	債券	債券
	債券利息	債券利息
	前年度繰越	前年度繰越
	獎賞部	獎賞部
	開校式	開校式
	卒業式	卒業式
	園藝部	園藝部
	圖書部	圖書部
	雜費	雜費
	記念事業費	記念事業費
	學年度繰越	學年度繰越
	雜收入	雜收入
	預金利息	預金利息
	寄附金	寄附金
	校友會入會金	校友會入會金
	職員會費	職員會費
	生徒會費	生徒會費
	前年度繰越金	前年度繰越金
	總收入高	總收入高

附

錄

卷一	論	一
卷二	論	一
卷三	論	一
卷四	論	一
卷五	論	一
卷六	論	一
卷七	論	一
卷八	論	一
卷九	論	一
卷十	論	一
卷十一	論	一
卷十二	論	一
卷十三	論	一
卷十四	論	一
卷十五	論	一
卷十六	論	一
卷十七	論	一
卷十八	論	一
卷十九	論	一
卷二十	論	一
卷二十一	論	一
卷二十二	論	一
卷二十三	論	一
卷二十四	論	一
卷二十五	論	一
卷二十六	論	一
卷二十七	論	一
卷二十八	論	一
卷二十九	論	一
卷三十	論	一
卷三十一	論	一
卷三十二	論	一
卷三十三	論	一
卷三十四	論	一
卷三十五	論	一
卷三十六	論	一
卷三十七	論	一
卷三十八	論	一
卷三十九	論	一
卷四十	論	一
卷四十一	論	一
卷四十二	論	一
卷四十三	論	一
卷四十四	論	一
卷四十五	論	一
卷四十六	論	一
卷四十七	論	一
卷四十八	論	一
卷四十九	論	一
卷五十	論	一
卷五十一	論	一
卷五十二	論	一
卷五十三	論	一
卷五十四	論	一
卷五十五	論	一
卷五十六	論	一
卷五十七	論	一
卷五十八	論	一
卷五十九	論	一
卷六十	論	一
卷六十一	論	一
卷六十二	論	一
卷六十三	論	一
卷六十四	論	一
卷六十五	論	一
卷六十六	論	一
卷六十七	論	一
卷六十八	論	一
卷六十九	論	一
卷七十	論	一
卷七十一	論	一
卷七十二	論	一
卷七十三	論	一
卷七十四	論	一
卷七十五	論	一
卷七十六	論	一
卷七十七	論	一
卷七十八	論	一
卷七十九	論	一
卷八十	論	一
卷八十一	論	一
卷八十二	論	一
卷八十三	論	一
卷八十四	論	一
卷八十五	論	一
卷八十六	論	一
卷八十七	論	一
卷八十八	論	一
卷八十九	論	一
卷九十	論	一
卷九十一	論	一
卷九十二	論	一
卷九十三	論	一
卷九十四	論	一
卷九十五	論	一
卷九十六	論	一
卷九十七	論	一
卷九十八	論	一
卷九十九	論	一
卷一百	論	一

萩中學校同窓會創立二十周年記念式に當りて

長添護國一帯の山の端が薄薔薇の色に染められて、羽衣野の南面から朝靄が黙々と流れ始める。遷座祭の祝旗が冷たい朝の空気を妙に和やかなものにしてくれ、萩中學校同窓會創立二十周年記念式、慰靈祭、祝賀會こんな考がこの數日頭にこびりついて早々に學校に出る。踏む足音が澄んだ秋の空気を振はして、靜かな朝の彼方に流れ去る様に思はれてならなかつた。

可成以前から豫定を樹て、取か、つた仕事ながら、當日になると實に忙しい。晝下り食事を咽喉に押し込む様に終へる頃、はや來客が見え始める。受附の諸氏も大童だ。豫定の人員を遙かに越えて、もう二百七十有餘名の人が出席。開會豫定時刻を少し過ぎる頃、學校のサイレンを合圖に、一同の入場に式が始まる。秋の光が一パイに差し込んでゐる。講堂は明るかつた。散り残つた校庭の櫻の葉が眞紅に燃えて、可憐なコスモスが窓越しに靜かにゆれてゐる。

君が代の合唱が終ると、河内會長の戊申詔書の奉讀あり、引續き式辭には吾が萩中學校同窓會創立二十周年記念祝賀の意漂ふ。盛んと言ふよりも莊嚴な靜かな感を強く受ける。

和田幹事の會務報告終りて、來賓岡田閣下の祝辭に此の式を閉ぢる。約一時間。記念式後更に同窓會員物故者の慰靈祭を行ふ。當日遺族の出席者五十七名。正面に祭壇を設け、御酒御饌を供へ、左右に神籬を立て、五色の綾を懸け、中津江社司の招魂の祝詞に、早くも嚴肅なる氣分が漲る。天に在ます靈、地在ます靈も親しみ多かる學び屋の此の講堂の祭壇に神集ふて、此の催しを靜かに嬉んで見まもつて居られるだらふと思ふと、背條に冷水を流された様に襟を正した。滿堂肅として咳一つすらない。齋主の祝詞につゞいて祭主の祭文を額だれて聞く。遺族の間に歎秋の聲を聞く、子弟を失つた遺族の肺腑を衝き、新なる涙を催さしめるに充分だつた。祭主、遺族、來賓、會員

各總代の玉串拜禮を終つて、遺族總代中山三見村長の挨拶があつた。會長の祭文に對へられたものでその中に「若し愚ながらも子供が生きてゐて呉れたら、御參堂の皆様の中、和合の中に活動をしてくれもしたらうし、又今日の式にも喜んで參列したであらふ」云々の言葉こそ親の愛として尊い神の聲の如く私の耳に響いた。「親思ふ、心にまさる、親心」あの松陰先生の歌を沁々と味ふ。幾年の後までも忘れ得ぬ、愛兒への慈悲だつた。

私は今日の此の慰靈祭こそ、實に有意義なものがあつたと肝銘した。豫定の如く式は終つた。

ホツトして合併教室にかけ昇ると、折詰、酒が白いテーブルにならべられてゐる。齋藤、大村二氏に五年生に祝餅を配布して貰ふ。祝宴は間もなく始まつた。カラ／＼と盃の觸れ合ふ音、全く今までの嚴肅さから解放しられて和氣緩々たるものが漲る。蓄音機の聲、掲がる歡聲、マア一杯、キュー（酒が咽喉に通る音）記念歌合唱、詩吟、謡曲様々な交響樂の裡に祝宴は終つた。やれ／＼ホツカリして片づけられ始めた。宴會場の窓から暮れ行く空を見守つて居た。昭和十年十一月一日記（尾崎生）

此文 七七、七八、四、

昭和十年十二月十五日印刷
昭和十年十二月二十日發行

編輯兼 發行者	山口縣萩市 須子五郎
印刷者	山口市後河原一五 小澤彬啓
印刷所	山口市先賢堂前 山口響海館 電話二一三番
發行所	山口縣萩市 山口縣立萩中學校校友會

山口縣立中學校友會